

5860

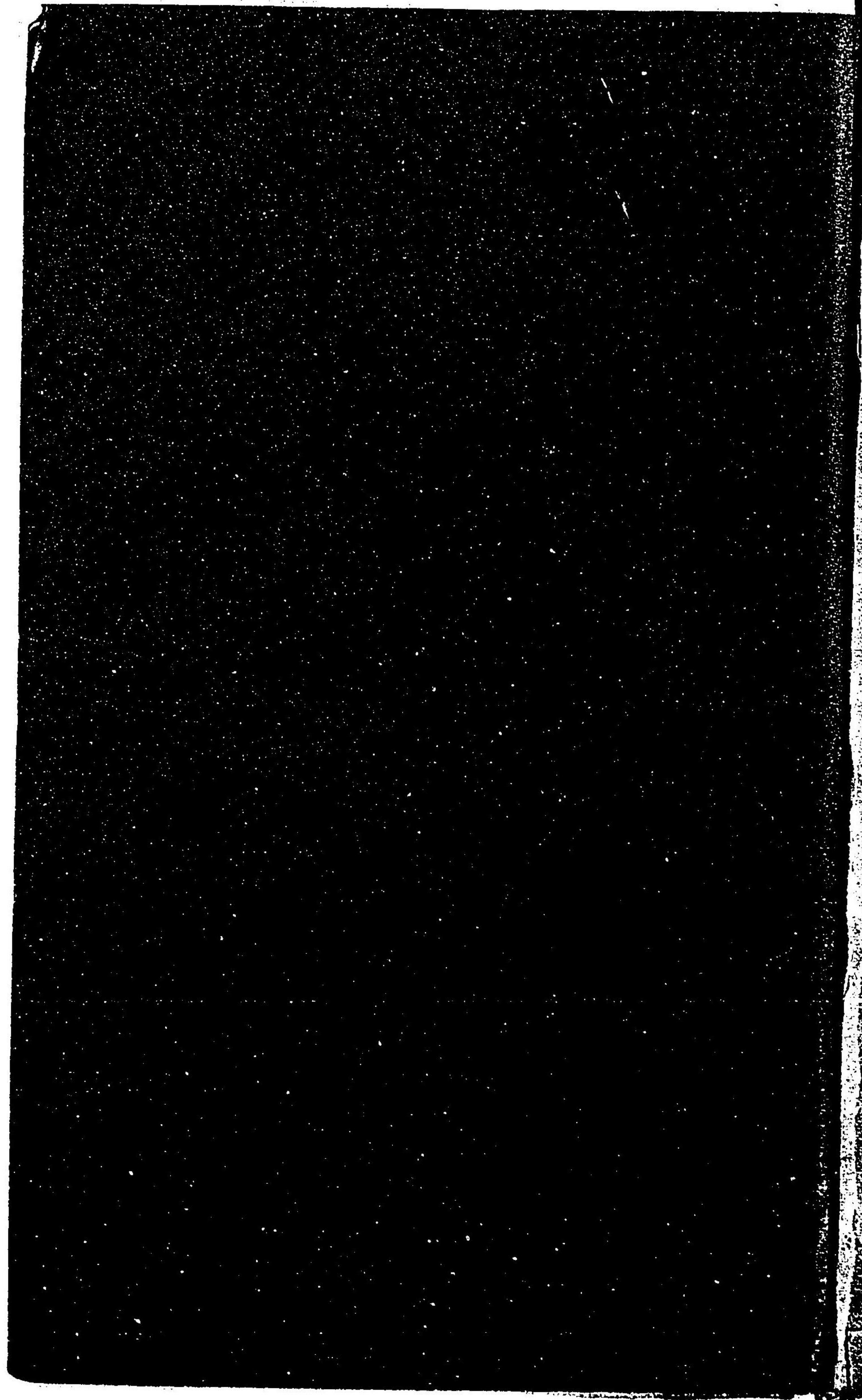
姉の  
花  
の  
百

桃川  
の  
演

後  
編

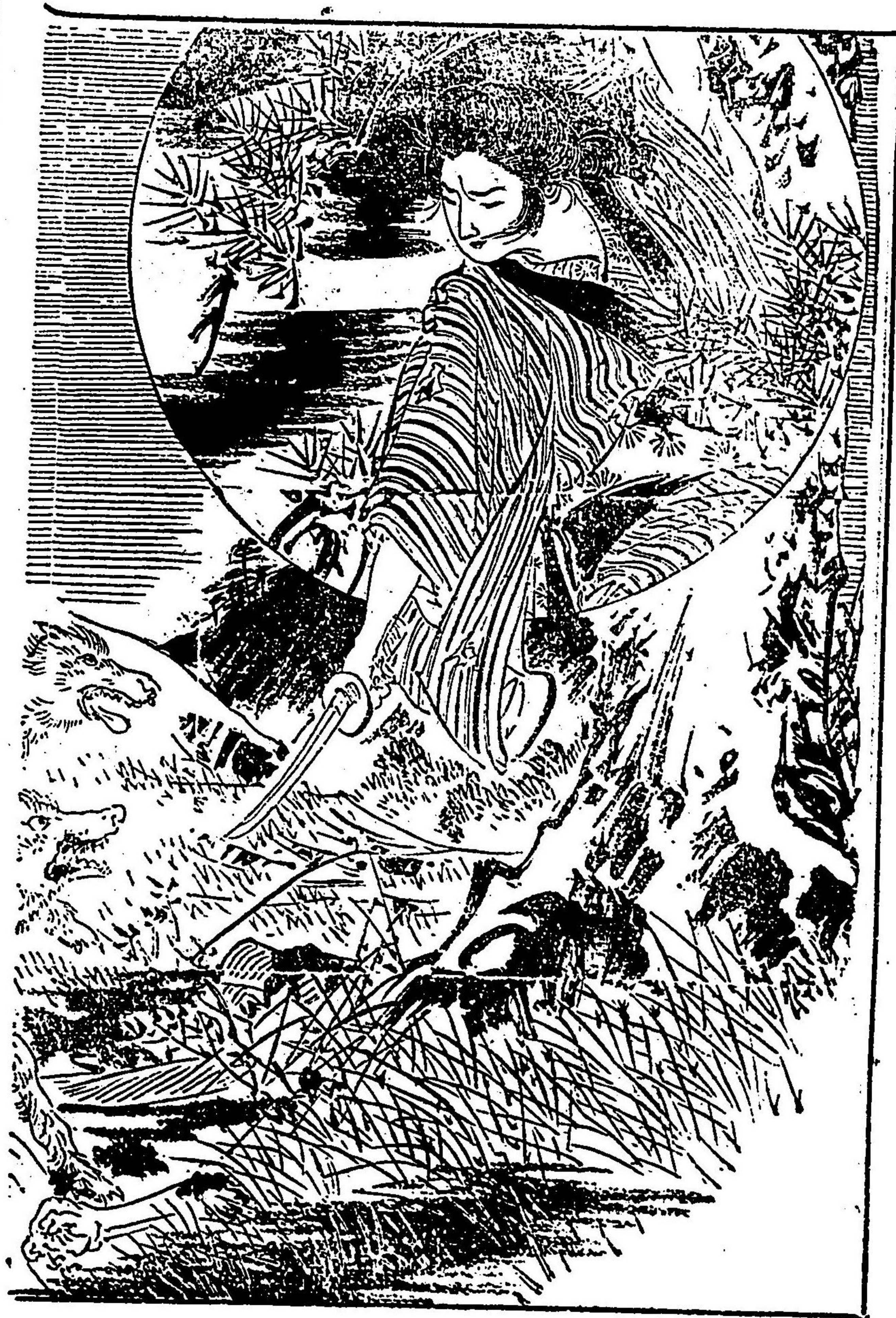
長  
生  
堂  
刊





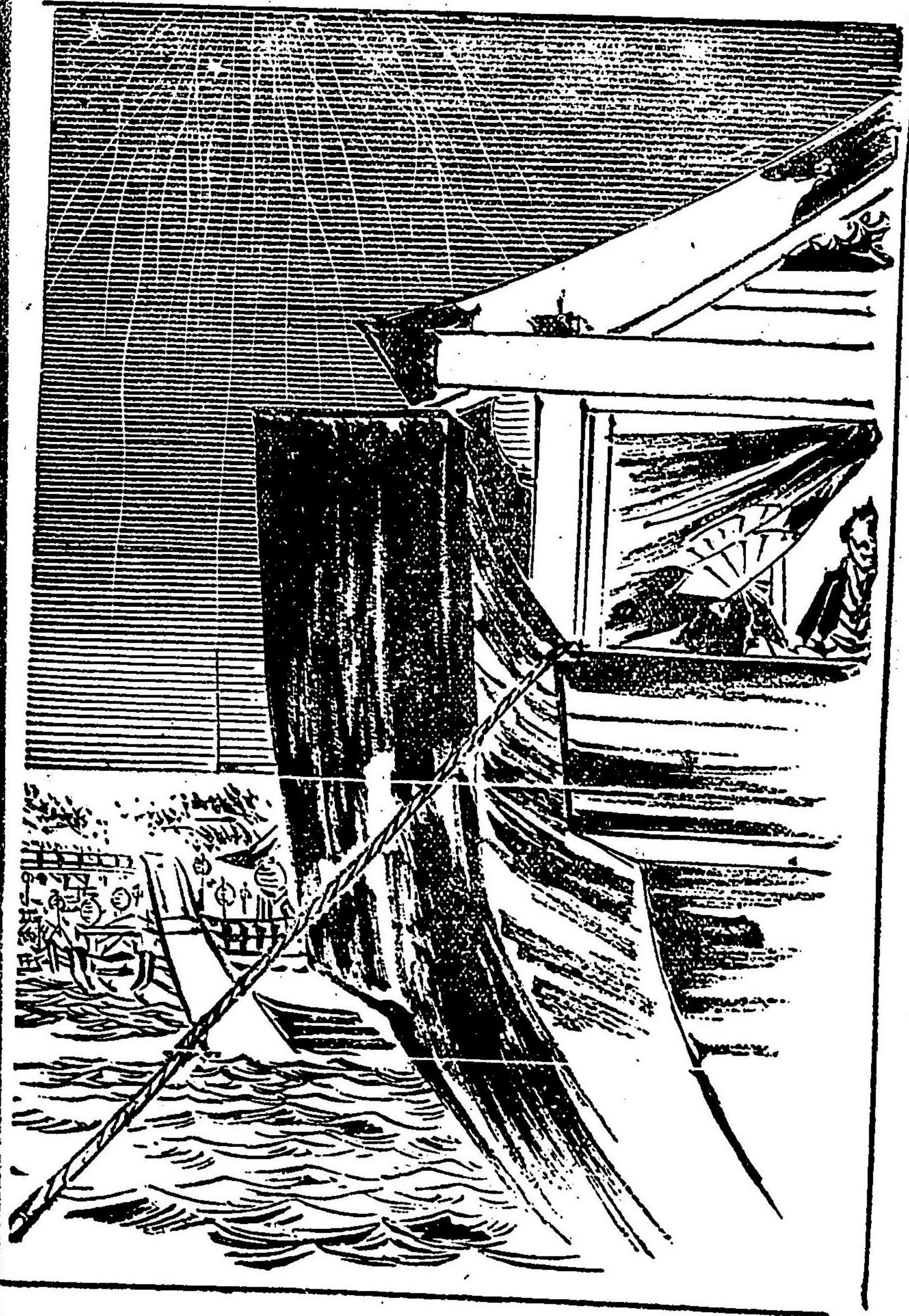
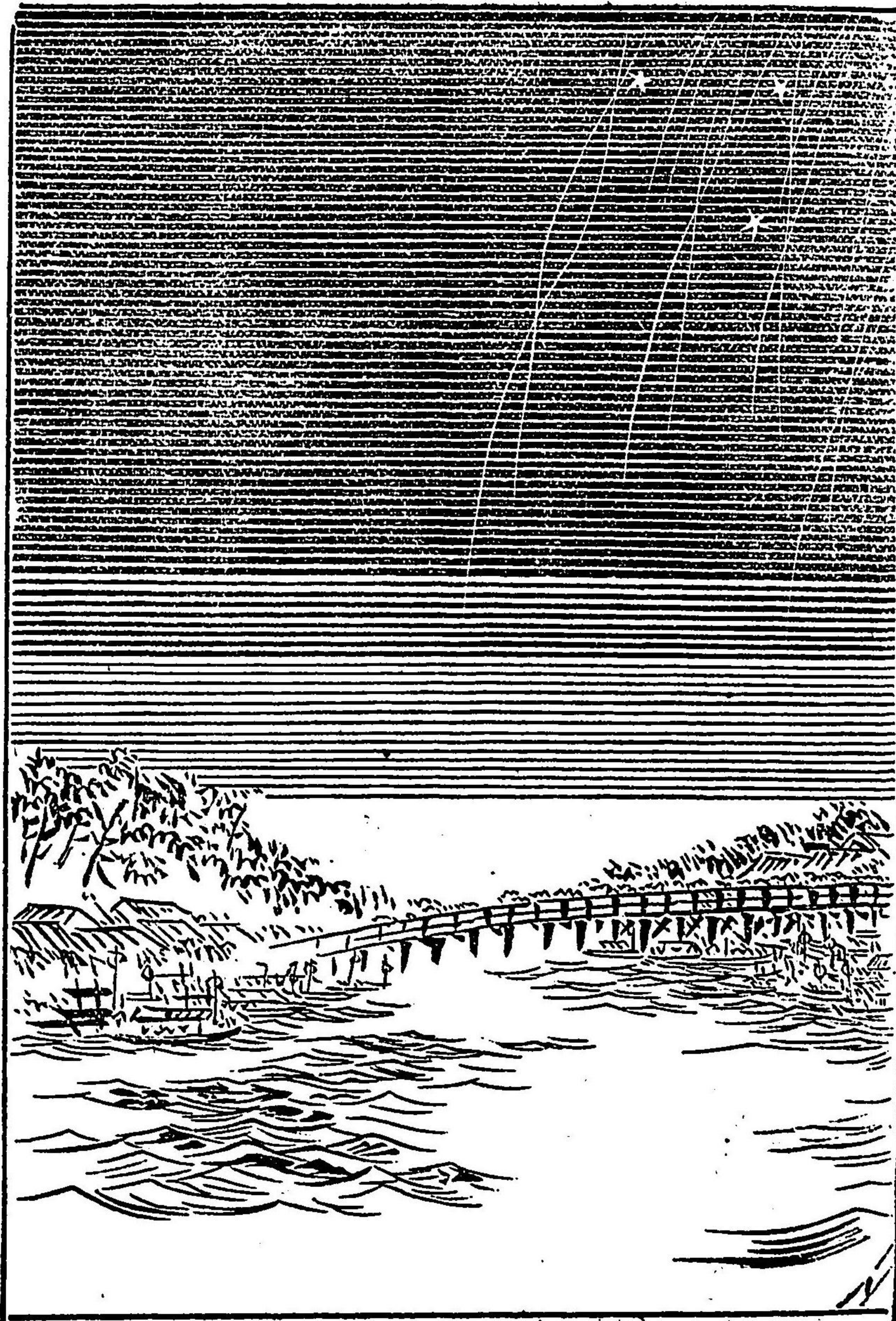
姐妃のお百後編序

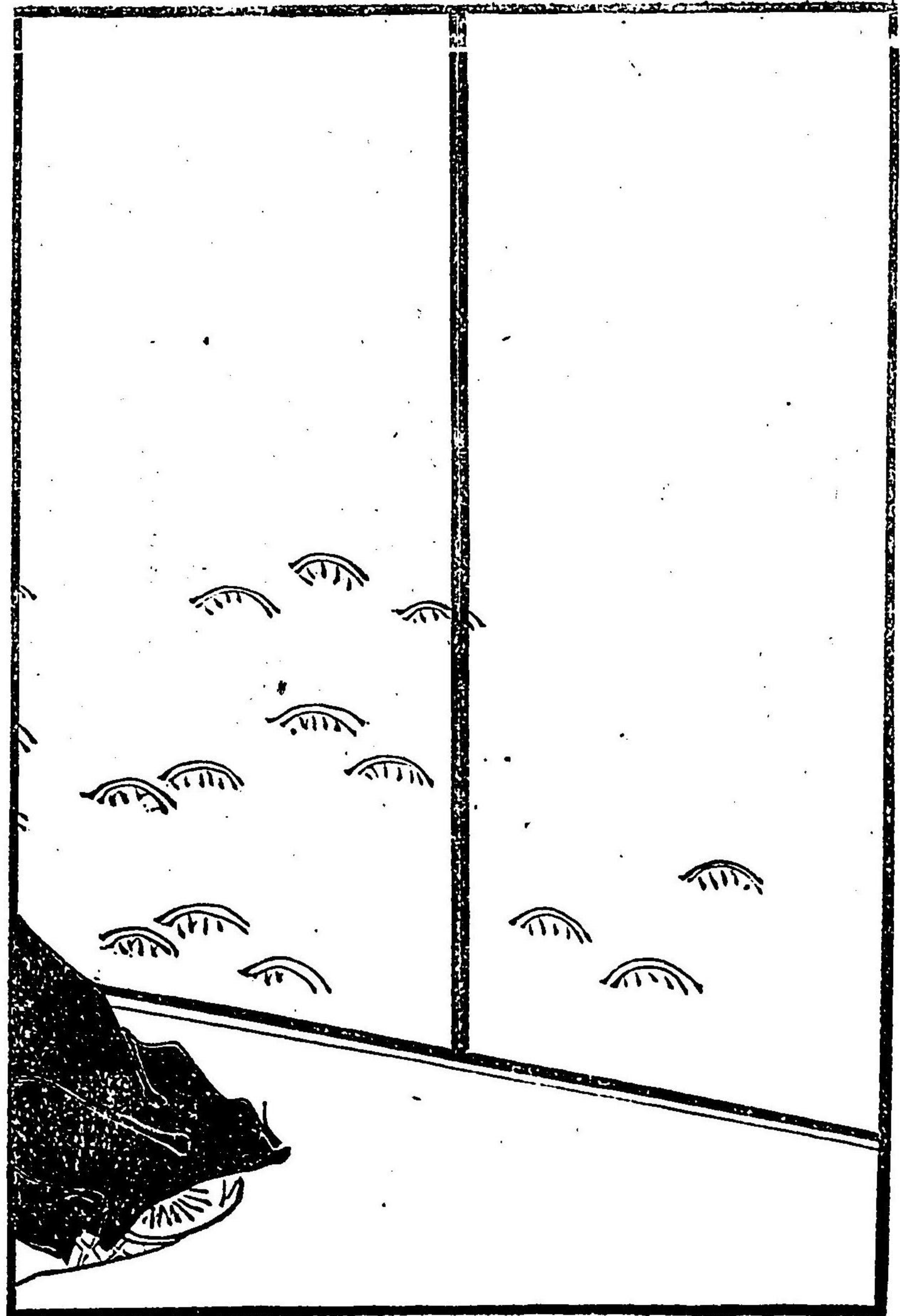
人間一世中眞の快樂は變化多きありとすれば小説の妙趣も亦然りと云はざるを得ず今やお百變化の大略を擧げ序に代んとす抑も彼れ初め小間使とあり其家婦を放逐して産を傾けしめ一旦零落して乞食とあるも江戸に來て當時有名の藝者とあり或は欺きて先きの良人を殺し或は金藏破りの黨類とあり或は盲人の小女を苦海に沈め其金を取り終り盲人をも殺さしむ其囚はるゝや女半の頭となり火災の爲め一時放れて貧人を救ひ其徳は依りて死罪を免れ佐渡に流されて役人を殺し豺狼の難を脱れて島を破り竹取舟子を欺て一夜の妻とあり瞬間之れを殺し又逃れて海賊の頭とあり令嬢と化して某寺の和尚を欺き奮惡を發て之れを殺し其首を以て五百













圓の大金を詐取し事の顯るゝや海中に投じて捕縛を脱れ慈善家を救れて  
其養女となり是より佐竹の愛妾となりて家老と通じ終に御家騒動を起す  
至然れども悪運爰に盡き己が仇敵たる孝子に舊惡を發かれ終に鈴ヶ森  
の露と化するに至れり嗚呼世に毒婦多しと雖どもお百の如く神出鬼没詐  
術に巧みざるものゝあらざるあり彼れ一世は果して快か不快か讀者本編  
を繙て高評を賜らんとを乞ふと云爾

明治丁酉の元旦

松聲堂主人誌

持  
516

百おの妃姐

姐妃のお百 後編

桃川如燕 講演

第一 席

サテお百傳次の二人の、四月廿一日の夜に役人を殺して鑛山口の木戸を破り、それより登りつ、降りつ岩を傳ひ谿間を潜り松の根方へ攀つて命カラク漸々として廣き所へ出ました

傳「百此處は何と云ふ所だらう」 百「傳さん此處は確に竹島街道、此處まで脱びりやアモウ助かつたも同様、ア、有難いことだ、モウ〜ドンお事があつても互に悪事なしまし、二人とも頭髪を剃して、ドウか遠國へ往て辭かよ年月を送つて死なたいね——」傳次も之れを聞いて「お百、ア、惡い事やしねい物だア、親を對して不孝を働き、人を苦しめて金銀を盗むが如く取つた其天罰にて此の苦楚、活きながら地獄に落ちたのを……ドウか心を改めて樂み暮して死なていものだ」と云ふ途端に頭の上で「オーウ」と云ふ狼の

遠吠えを聞いています

傳次お百の兩人ハハット驚いて振向くと忽ち飛來つた五匹の狼傳次を望んで飛掛り突如肩骨へグアツと噛附いた、雷とも云はれるほどの傳次でございますけれども、瘦衰へて居る所へ狼も肩口をアングリ噛られたのですからドーと倒れる、お百も於きまして傍へも覆樹があるゆゑ其枝へ手を掛けてヒラリと飛上つた、野猿の如く木登りをさし一番上の三又も腰を掛けて瞰下す、恰も月の晝間の如く現在此處まで一緒に脱けて來た傳次が多はくの狼もホリ／＼食ひれて居るのを見る其の苦しむ一ト方ありませぬが、救ふことならんやうすることも出来ぬ、見る／＼内も狼の傳次を食ひ盡して仕舞ひ是れからお百を食ひむと云ふ了簡か又一聲「オーウ」と云ふ、兩眼の光りの明星の如く、吐出す舌の火焔を吹くかど疑われ、平常の瘦せて居る狼それども彼れめ愈々人でも食ひうとするとさよ／＼毛が諸も立ちまして其勢ひ凄まじく既も飛附かんとする様子でございますから盗み取つたる麻差をバ逆手に持ち、木の又へ腰を掛けて居て飛來る狼をストリーストリーと突落す大膽不敵のお百此のどき頻り／＼と云ふ貝の音が立ちます、

佐渡での鳥破りがございませすと疎て相川の役所へ於て申渡してあると見せまして宿々在々村々端々残らず此の貝の音を吹立てると海岸通りへメーンと一時も固ゆが附きます、又ドーンドーンと打出す大鼓がモウ囚人の此の方で石捕つたと云ふ報告の大鼓でございます、

狼の其の貝の音も驚いて八方へ散亂し及ぶ、此の法螺貝と云ふもの獅子の吼ゆるの形でございませす、左ればよや之れを獅子吼と申しまして山伏の方で一言半句と吹立てるのが先達の貝の吹方でございませす、如何なる狂獸も此の貝の音を聞かすと思ひ逃去りませす、シテ見ると獸の王の獅子でございます、

お百も於きまして貝の音が立ちます、さてアアが今島を破つた報知だと思ふと遙か向ふメナラ／＼メナラ／＼燈火が見ゆるゆゑア、一つ道れ／＼又二つ、必定相川から捕手が向いたよ相違ない、傳次が此處へ斃れて居るからお百も此の近邊へ居るだらうと木の上を見上げられてハ一大事と思ふゆゑ、盗み來つた衣類をバ散々も嘸裂さ、頭髮を引抜いて血の附いて居るのを下へ投出し、自分ハ樹梢の最頂の繁みの所へ登つて小さくあつ

隠れて居る、下は穿物でもあれ、板樹の上へ登ったと云ふ考へもあるが、既足で逃げて来たから穿物のない、極寒の時分よ、佐渡の既足をこころでいひませぬ、足袋を二重穿きましても容易く歩かせぬが時しも四月の下流のことで、先づ温かいを依って此處まで逃がれました。

後四

相川のシキの役人の是を見て、甲「同役、傳次の狼の爲めは食殺され首だけ此處もあるが、是れは食掛けた所へ我々が貝を吹き、松明を振って来たので、狼め定めしお百の方の肉が柔かいを依って銘の間へ引いて往って食ったものと見える。乙「左様、モウ斯うあるから、奉行へ訴へれば宜し」と云ふので、腰を下げて居た太鼓をドンドンと打つと方々で一時ドンドンと身延の御開帳の御著みたいよイヤ敲くの敲くの八方十方で敲き出し、傳次お百の狼も食われたと高らかも呼りも呼り相川のシキの役人の引上げて仕舞ひました。

お百の樹の上までホッと云ふ息を吐き、ア、難有い、コリヤア平常信心する神佛の助けだ、宜い了簡だ、何んで斯様お奴を助ける神佛があるのですか、さういふ了簡だから惡事を

働らくのでござります。

人間生命が助かりたしと云ふ一心もあるとモウ怖いことも恐ろしいこともござりますせぬ。夜が明けましたることゆゑお百の唯遅れたし遅れたしと云ふ一心よ赤裸體で海岸通りをムクムクとやんで参る。ムンとカチヤリッ、カチヤリッと云ふ鈍の音が致します、お百のハテは何んで彼様おカチヤリッと云ふ音がするか知らず仰上つて見る。

是れは能登島と云ふ所から竹を取りよ来て居る竹取の勘作と云ふ老爺で、貝の音を聞いて扱ては佐渡破りがあるかと一時自分の船へ来て固めて居ったが太鼓の音を聞いてモウ佐渡破も召捕られたかと思ふゆゑ元の所へ来て頼りよ竹を伐つて居ります。

彼の竹島と云ふ所の一面の竹藪でございます、僅かお御連上で能登の七尾、能登島、彼の邊の人が船で渡りまして其の竹を取って竹細工を致します、能く七尾の竹細工の麻いと云つて皆お彼地へ参った御方の御求めよあります、是れは總て佐渡竹でございますして佐渡の竹と云ふもの大層性が宜いさうでございます。

竹取老爺の勘作と云ふ者が頼りよ斯う竹を伐つて居ると、お百の考へた、待てよ所が所だ

後五

又依つて助けて呉れろと言つても容易く助けて呉れまい、佐渡の罪人を万々が一助けたときより同罪もあるから誰も助け人はいない、それも大恩人からいざ知らず何んも知らぬ他人を助ける氣遣ひのない、是りやア彼の老爺が竹を伐つて居る間も彼處へ船が繋いであるから彼の船へ潜り込んで遙か沖へ乗出したときも何んども欺き、罷り間違へた女徳だから色仕掛けもしていても生命を助けられたいものだ、さうださうだと考へ込み其際いである竹船の底へ這入て隠れて居ります、

後六

竹取老爺の御作のさう云ふことより更らぬ知りませぬから充分竹を伐つて積込みましたゆゑ繋網を拂つて柁柄も手を掛け、漫々渺々たる青海原を潰れて居るといふ云ひながら左ばかりの高浪を更らぬ恐れる氣色もよく、重船、取船と腕一杯ムドブーリ、ドブーリと云ふ所を乗切りまして沖合へ一里半ほど出たときもお百が時間を測り「モシエ」と聲を掛けた、實は驚きましたア子御作老爺、竹が口を利いたのか知らそれとも柁柄が鳴つたのか、モシエと聞けたがハテさ、思ひきや船底へ女が隠れて居やうとの知りませぬ、又もや漕出す柁拍子「モシエ」と聞けた、ハテさ、何か己らが船へ居るだ、ア、竹取物語と云ふ本の中

又赫夜姫と云ふ人が竹の中から出たといふことがあるさうだが、是りやア面白い、竹の中から女が飛出すのか知ら、何處であらうと思ふ途端に揚板を左右に拂つて下から出たのを見ると色白く、鼻筋通り口元尋常にして眼中涼やかで頭髮こそザンバラのさつて居るが實に美しい女だから御作老爺の柁柄を放し後へムドと倒れ「アハアお前さん何んだア」百「アノ私に加賀國大聖寺在觀音寺村と云ふ所の百姓久兵衛の娘でございます、幼少いとき伯母が御屋敷へ御奉公をして居りまするゆゑ行儀見習のため伯母の許へ参りましたが流行病で両親が大病との報告も急いで取つて返した處がトウ／＼両親ハ亡くありまして法事の済んだところへ歸りました、それで私一人て佛參へ参つた歸り掛け田舎道のことゆゑ山の中より大男が現れ出たトウトウ其の者に捕へられ船中へ連れ込まれて耻かしいことだが私の弄姿されたまでの覺えて居りましたがそれから先きの夢現浪の音も氣が附いて見れば斯の如何に裸体もされて右も左も渺々たる青海原、それゆゑ此處へ繋いだ船があるから此船へ這入つて居たから何時しか生命が助からうと唯それのみ考へて貴方の御船へ這入つて隠れて居りました、ドウぞ生命を助けて下さい……」と兩掌を合せて拜むゆゑ竹

後七

取老爺の勘作此女が人を殺して佐渡破りをした大毒婦との知らぬで勘「ヤレ〜マア可愛想よ己れの此の先きの能登島と云ふ所の竹取老爺、年分よ竹を取って細工物を拵らへ加州金澤の御城下だの今お前さまの言ひしつた大聖寺、越中富山、能登の七尾、それから放生津滑川、彼の近邊へ持つて往つて商賣をするがヤレ〜可愛想よ、それぢやアア今夜の私等が家へ泊つて二三日の内よ己らが加賀の御下まで商賣へ往くよ依つてお前等を連れて……サウサアノ觀音寺村と云ふのの大聖寺の御城下から左へ取つてアレでも小半里あらうぢやアそれでもマア連れて往つて進せべし」百「有難うござります」勘「何んよしても裸体ぢやア手におえぬし、己らの半纏を貸して還るべし丁度此處よ辨當の殘餘があるから食ひッしやい」とそここの婦女の徳で勘作老爺の縋半纏を著せ辨當の殘餘を食ひせマレ〜の梅干すら宜いが半分食ひ掛けた酷い辨當、けれども斯うあると旨いも不味もござりますぬ、

一体彼れが旨くぬい是れが旨いのだと云ふの人間が増長でござります、難行苦行をするでもよめりそりやア何んが扱て措いて美味しものでもござります、此の度の日清戦争も就ても

後八

暑よ射られ寒よ打たれた軍人方の御艱難御辛勞、御食事おのこを新聞上でナラ〜拜見いたしませんが、ナカナカト通りの御苦心でござりますせぬ、

總て勘作の己れの家を志して参りますと百「モ〜貴方お幾歳でござります」勘「己らかね、己らア五十一歳だ」百「ア、おかみさんは……」勘「エ、……婆はノ三年前に死んで仕舞つて六歳に於る峯松と云ふ男の子が一人あるが此峯松が留守居をして居ます」百「ヘー……デハ私も斯うやつて身体を穢されて今更ら故郷の觀音寺へ歸るのも面目がござりますせぬ、何んと私をお前さんの家へ留めて置いて留守のとき用を達さしては下さいませぬか、言はれ貴方は私のためには生命の親、其の六歳に於る子供衆を育つて上げれば死んだ佛も私の志が届きますゆゑ嫌やでもあらうが勘作さまとやら、私を女房として下ささせぬか」

勘作は驚いた様子、此様ぢやア人形か天人が天降つたやうな美しい娘を抱いて寝れば直ぐは生命が縮つても思ひ遣すことばない、と何くも同じ男女の情「さうかぢやアア美味い物も食はず汚さい着物ばツかり若せても宜けりやア私等が女房にする私も子供を一

後九

人置いては竹を取り、往つたり竹細工を賣り、往くよも心が落付かねい、ドウだき物は極まりが附かきけりやア行けぬいから此の船の中で固めをしやう、早いが宜い」「百」殿談言ツちやア行けぬい船の中でソンの事をすれば船玉様の詞が當る、お前さんの女房と極まりやアモツ是れから緩くり私は借白髪まで添遂げる……」「勘」是りやア難有い私等がやうき老爺と嘘も借白髪まで添遂げるたア、ドウかマア夢から覺めるが宜い」と老爺ニコニコ顔でヤツて来る、

後十

勘作は我が家へ歸つて来て戸口をガラリ開けると、竹屑の中へ寝て居た六波に於る時松と云ふ男の子が「父親さん歸つたかい」「勘」オー、時松今歸つたアノ死んだ母親を佐渡の竹島から連れて来たよ、美しい女よあつたかア先の母親は眇眼で跛足だ……」「勘」宜いから寝て仕舞へ」「ヤア助倍老爺ゆ……」「勘」此の野郎、何處から其様き事を聞いて来た、是れから勘作もお百の引裂き鯛もユナカラ酒、ナヨツと夫婦の固めを致し「勘」サア寝るゝと何んだかドウも事が極まらぬいから早く寐たが宜いッへ」「百」お前、やう床急ぎをするから先はお寝なさい、女房よ花が咲き男縁よ姐虫が生くと云ふ噂の通り久しいこと

おかみさんがあいのだからマア裏所邊りから此の近邊の不潔いこと……扱てお前さんの女房もある以上の見ても置けぬい、此處らを奇麗に掃除して緩くり寝るよ、お前さん其の内一人で寝て居て下さい」

此處のナヨツとお百が可愛想きとてろで濡れぬ先きこそ露をも厭へ、悪事は悪事を働いたやうなもの、今もあつてア、悪事は悪事を志したお蔭に斯る難行苦行をさすかと頼りよ後悔、此の穢き老爺を二三年でも三年でも亭主と言つて機嫌を取り、末のクワク坊主よあつて生涯終りを取るよと云ふ了簡よあつたから奇麗に其處よ此處よと掃除を致しました、百「サア勘作さん、緩くり寝なせうよ」と云ひながら佛様の御燈明を消しました、

總て越中から佐渡、加賀、能登へ参りますと大層御門徒が多うございます、その開祖親鸞聖人が彼の邊をグルク御廻り遊ばしましたので大層一向宗門が流行ります、それゆゑオマムキ様オマムキ様と申してドンお不潔さい百姓家でもナカチカ佛壇の奇麗よしてあります、それが其の國の風俗で佛壇に金を掛けるの何んとも思ひませぬ、それで彼の邊で決して御燈明を口で消しませぬ、

後十一

後十二

お百は口で消さうとしたが不圖氣が附いて、斯う手で一つのハツと横に拂ふ途端に一番上にあつた位牌が落ちて来て遊華堂がお百の眉間へカツナリ當つたかと思ふと、メラ／＼と血が出た、ハツと手の平で眉間の血潮を押へるから落ちた位牌を取上げて見ると「秋山秋月大姉」裏を返へして見ると「攝州大坂川口桑名屋徳兵衛妻高、行年二十七歳」と云ふ位牌、「百、勘作さん」勘「何んだあ……ドウだい斯う夫婦と極つたら早く寝ちやア行けぬいか、ドウも事が極まらぬい」と云ふと話をしても面白くないたア、百「イ、エ、此の位牌の話をしおけりやア私は一緒に寝るさうよ」勘「そりやア大變だ、話は庚申さんの夜ですべしと思つたが、お前等がさう云ふから位牌の話をして聞かせるが能く聞くが宜い、他では無いが、己らが弟野郎の傍者と云ふ者の病身であつたがノ誠は正直者で稼いだ金子を澤山こと溜め込んで村内の衆と談合の上三人連れで御伊勢から金刀比羅様へ参詣して往つた、其の歸途は大坂見物をする途中でお前さま金子も衣服も奪られて赤裸体それで、ドウすることも出来ぬいもんだから同郷者が大坂に居るので其の同郷者を使つて往つてそれからお前さま給金を抵當に金子を借り衣服を拵へ、さうして奉公に往つたのが大阪治安川口の桑名

屋と云ふ、廻船問屋をりやアア度々私等がどころへ手紙で便宜も寄越したが三年越飯焚をして居た、さう云ふ男だからミツナリ給金を旦那のへ預けてサア愈々其の貯金を持つて國へ歸らうと楽しんで居ると此の位牌ちうものは桑名屋の本妻のお前さまと云つて賊も結構な、縁起が美つて情け深い、御實家の泉州堺の河内屋さんと言つて是れも大府の廻船問屋だつたが海嘯の爲一夜の中一家一門死に絶えて桑名屋へ入嫁いた此御方だけ助かつた、そこは宜かつたけれども大阪雑魚場魚賣人の新助ちう者の妹百と云ふ女が小間使に住込んで此女が滅法縁起が美いもんだから主人と好い交情もありやアがつて、本妻のお前さんと私等が弟の佐吉野郎と色をしたと言つて突の降る中をば裸体にして追出しやアがつた、そこで弟野郎は他へ奉公に住込み其の給金を前借して衣服と帯を拵へたさうだが其の主人は鹿島屋と云ふ酒店で是れはナカ／＼感心お人サ、佐吉から詳しい話を聞いて其の御主人が別な金子を呉れた其の金子で高きまの衣服や帯を拵へて遣り自分の給金の半ばを御小使におさういと言つて弟野郎が此の位牌の細君さんよ上げたと云ふ、ナカ／＼己らが弟だが見上げた男サそれ引換へて、お百と云ふ女の大恩を愛けた細君さんを無

實の罪は、陥れ加之突の降る中を裸体として追出すきんてマア犬猫も等しい世も酷い女があれはあつたもの、弟野郎が大坂から歸つて来たときも此の位牌を持つて来たそれで弟が兄さんや此の位牌だけの毎日毎日回向をして上げて下さいと呉れくも言われた丁度今日のお高さんの命日、世は怖ろしいのにお百と云ふ女だが何處にマウして居るか……

……と現在自分が竹島から連れ込んだる女が島破りのお百とも知らぬ道理、お百の之れを聞いてア、切て心よもあゝ悪事をして流れ流れて佐渡國竹島まで脱出で、能登島へ来た上り壘の上で往生が出来ると心を絞めた此のお百だが、ドウしても斯う云ふ一念の爲りも引廻りされ、生かす殺さす苦しめて其の上、生命を取られる此の身……マエトウするものか此様を白髮の老爺を抱いて寝やうより毒を食やア皿までだ此處を一番立退いて仕て三昧さことをして處刑は就く方が餘ッばは宜い、とガラッ氣が變つた、左れば源三位兵庫頼政の歌よ、

幾度か思ひ定めて變りらむ願もまじき心さすけり

それゆゑ、聖人も日よ三省すと仰せられたました、其の道、其の身を償しんでも兎も角、人

間と云ふものゝ遇失勝ちのもの、アナ恐るべきの色慾の二つでござります、此方の勘作、話して居るうちよ晝の疲勞とコナカラ酔の酔が来て、ユロリ横又寝たまま前後も知らず白河夜船、稼業柄といひ云ひながら梅拍子のやうなる齒切囃んで頻りムッウツツと睡入りました、行燈の燈光を掻立ッてお百ハツク〜と勘作の顔を見ながら世の中は髯面と云ふやつのあるが面ハツと髯といひ此奴だ、馬鹿長い面をして紋羽の足袋で溝へ陥落ッたと云ふやうさ臭い口を開いて居る醜体いさいな、此様を汚い老爺をば如何も其の身が大事されんとて抱いて寐やうとまで覺悟をしたのハア、人間の了簡と云ふものハ種々あるものだ、此の儘此家を飛出せば竹島から斯う云ふ女を連れて来て一ト夜足を留めたと言われ、それからそれへ村々津々浦々と七十五箇所の割印者、人相書を廻りされ、ハ五尺の身体の置き所があら、エー往き掛けの駄賃だ、立つ鳥跡を濁すさよと云ふことがある、氣の毒だが殺して往かよアさらきいと覺悟をして殘餘の濁醪を飲み充分食事をした上は纏て勘作老爺さんの寢て居る枕の間へ有合せの小倉の紐を通し咽喉の上で結びツ玉を拵へてカ一杯スーンと締め附



けたから忽ちの間よ七轉八倒の苦悶トウ／＼勲作老翁の怒り殺された、  
後十六  
六歳よある峯松小僧の竹屑の中よ寝て居りましたが、峯アレー母親が父を殺したアー」と  
駈出さうとするところを「百小僧め」と云ひながら傍へよさる煙草盆を取って投付けた  
から頭よ當り、ゴロ／＼と踏躓けて座敷の中へ轉げ落ちニヨッキリ二本足が突立って頭  
と身体の灰の中へツブノ道入った、そこへ今飯を食ふとき沸した茶を器でも殺すやうに打  
掛け先妻の衣類から帯からスツカリ何一つ残さず引摺ひ、ニツコリ笑って手拭を姐さん  
りよして小襟凍々しく取上往かうとしたが、待てよ此の儀よして往きやア足が附く斯うし  
て、往かうと竹屑を掻集め汚さい障子襖をバ其上へ重ねて火を點け、其の儘其家を立出  
てました、  
道の程凡そ五六町も来たかと思ふと、火事だー火事だーと呼ひる、お百の大衆を焚いた  
積りでそれを知邊よ何處ともなく海岸通りを立去ったが、實よ恐るべき大毒婦是より致し  
て能登の七尾の港から越後路へ乗込むの講談、

第二一席

それよりお百の山よ夜を明かし、辻堂よ泊り遂よ能登島から能登の七尾の港へ参り七尾か  
ら越中の國を差してスツ／＼スツ／＼参ります、  
日を重ねて参りましたのり一つの時、俗よ之れを地藏峠と申します、飛脚が殺されたとき  
其の血が地藏よ飛ねて居ると云ふ書さへ物凄き峠をバ大膽不敵のお百の唯一人で右の時へ  
差掛る、御天氣の好いときよ二三軒茶店が出て居りまして供華又の線香を賣り飛脚菩提  
の爲めよ線香を御上げ遊ばせ、御華を御上げささい」と勤めます、それで往來の旅人の其  
處へ来て地藏を拜し線香等よ上げ茶を飲みながら由來さきを聞き、又由來書さきが版行よ  
刷ってございまして切られた飛脚や斬った當人のことを詳しく書いたものをも買ります、  
丁度お百が其處へ掛った日よ雨模様ゆゑ茶店が出て居らず更に往來もありません、  
大膽不敵のお百、唯一人地藏の前へ参ると、成るほど血が飛ねて居る、其の血潮生々ど致  
してツツた今血が飛ねたる如く、流石六道能化の地藏尊、末世の悪人どもへ教訓の一つ、  
お百の其の地藏の蓮華臺へ腰を掛け盗み來った煙草入を取出してバク／＼バツバツ煙草を  
喫みながら「百モツモツ地藏さんニ、あきたり六道能化と云って極樂へも地藏へも御導さ

あつる云ふが私の出生が大坂で江戸で悪事をして佐渡へ流され、是まで私の手は掛けて殺した人の数知れず、私の身分は付て生命を捨てた人も多うございませうで、下ッせ極樂へは往けまい、けれどもモウ少し悪事をしたから私の考での地獄と通振けて極樂の裏門へでも出られやうかと云ふ考へですが何分も其のときより宜しく御頼み申します、大層奇麗な御顔をしてく」と云ひながら伸上ッて地蔵さんの顔をペロンコして「百、地蔵の顔も三度と云ふが、何だかボンヤリして居るね」と飽くまで地蔵を嘲弄しニッコリ笑ッて立去らうとする。

ところへヌク／＼ヌク／＼下から上ッて来たのは飛脚体の男十の字、赤羽の赤合羽、玉子三度の飛脚笠、皮柄の道中差、甲掛、手甲、切緒の草鞋、振肩掛の荷物を肩へ掛け、お百の腰を掛けて居るところへ来て。「モウ／＼姉さん、此の時は唯一人では通れぬから籠の方でナラリとお前さんの姿を見たゆえ話をしから時を越さうと思ッて来たが大層お前さんは足が早うございませうね……、アモ、お前さんは何處へ御出でなさるの……」「百、ハイ、私に越後の新潟へ参ります」「ハイ、……」「一体お前さん御出生地は……」「百、ハイ、能

登の七尾でございます」「七尾だ……七尾はお前さんのやう奇麗な垢抜けた女はあゝ等だが……」「百、アライアライドゥしたら宜うございませう、幼少いとき伯母が江戸の或る御屋敷に御奉公として居りましたゆえ、伯母の許へ参り女一ト通りの行儀、其の他の科古をする積りで参ッて居りますと親が大病との報知を取ッて返したところ死も目も通はず法事も済みまして何處かへ奉公へ往かうかと思ッて居ると親類でもから嫁に往け婿を取れと言ふが能く俗談に「國を出るとさや泪で出たが今や自國の風も嫁や」と云ふ通りッツツ七尾の者が寄ると障ると田舎言葉でございまして前後不揃のことを言ひ、丹波猿のやう赤顔をして居る者を生涯の亭主と願ひのは此の世の中、女と生れて餘りと云へばそれが情けあいの斯う云ふ考へから越後國新潟の毘沙門島と云ふ所は藝妓屋町で大層繁昌すると云ふことゆゑ其の毘沙門島の藝妓屋へ往き事情を言ッて奉公し藝妓でもあッて面白可笑しく年月をさう云ふ粹き所で送りたいたいと斯う考へて飛出しましたが、また新潟の毘沙門島までは餘ッばございませうキ」「百、ハイ、ハイ、己れは越後の國新潟の絲買出の又兵衛と云者で國々在々を買ッたり賣ッたりして歩く稼業で、今度故郷の越後の新潟へ歸るのだ

が毘沙門島の布袋屋と云ふ内り悪意だから私共其家へ世話をして上げるよ依って私と一緒  
 又新濁へお出で、だが泊りく旅籠屋で事よ依ったら無理なことを頼むかも知れず、  
 其の代り旅籠屋の料から遊食の代り勿論、船の代でも忍籠の代でも一切己れが持つゆゑ姐  
 さん頼むせ」百「マアドウしたら宜うございませう、私のやうな此様な不肖者……」又「不  
 肖者どころぢアない、ドウもマアメラしいものだ、姐さんマア己れを可愛がってお呉れ  
 よ」百「アラドウしたら宜うございませう、それは私の方で申す口上でござりますよ」又  
 「お前のやうな結構な容貌の者が往って藝妓よりやア吃度繁昌するからマア私と一緒  
 新濁へ往きませ」百「難有うございませう」と口で言ふが腹の中よてお百り「此の野郎、  
 フ、己れが越中七尾の者で新濁へ往って藝妓屋へ奉公仕をすると言やア本當よして一緒  
 よ連れて往さやアがッても定めし本名を聞いたらビツクリ仰天コイツは面白い世の中よ  
 ヲて来たぢア……」  
 是れから日を重ねて参りましたるのが越中国放生津と云ふ港でござります、放生津と云ふ  
 所へ入船出船の繁昌の先づ新濁の次だと云ふ位、其の放生津の日の出屋と云ふ丁度入口

が東を向いて居て大陽が真向きでござりますから日の出屋と云ふ名を附けましたでナカ  
 くの此家は放生津での料理店、其家へ参りまして数種の饅頭物をして食べて居ると赤ら  
 類の船頭体の男が揉手をしながら這入ッて来て 船頭「エー、モシ越後の御客様エ新濁行の  
 金藏丸が出船よあります、若し御乗んさいますから今の内よ手廻はしして御乗んさい  
 いまし、マア空の様子ぢやア二三日先きはムツカシウござりますよ」又「ア、さうかい船頭  
 さん、己らア實は船よ乗らうと思ふから此の家へ来たのだ」船頭「ンんからモウ直ぐ出ます  
 ゆゑ、ドウか御早く御乗込みを願ひます、若し召上るものがあるなら船で御上りませう、  
 御酒の御燗や御飯の御茶位のは沸ます」又「それぢやア薬や、此處でお飯を食ふけれども船  
 へも御飯を充分入れて、生玉子を五ツ、それから當所の名物は章魚ださ、章魚の煮たのよ  
 それや是れや取揃へて五人前入れて呉れ、何んでも當家のものでさくらやア食ッたやうな  
 心持がしさい、サア姐さんや船よ乗んさい」百「左様でござりますか、それなら御供を  
 致して参りませう」又「薬や勘定して呉んさい」と日の出屋の勘定を致し取急いで金藏丸と  
 云ふ船へ乗りました、

船頭「御忘れ物はございませんか、出ますよ」と聲を掛け、船は港を離れ、北海の漫々海々たる、青海原をば「ゴ〜」と浪を拂らして行く。

お百は心中、先づシメたものだ、是れより越後の新潟へ乗込んでそれから進退をしようと思ふ種々考へがあるから生アツ遣つて此の船へ乗り指さしをしきながら「百」モシ〜向ふへ見えますのは彼處は何んて言ひますか」又「彼處は佐渡國サ」百「オヤ、アノ悪るい事をすると佐渡へ流されると云ふが……」又「どうよ」百「怖い所ですわねー」ナニ怖い所ですわねーらあいののだ、役人を殺り殺やアがって竹島街道を立退いた大悪婆「百」アノズツと象の鼻のやうに突出した所は彼處は……」又「彼處が七尾よ」百「オヤ、ア宅も居りますと氣が附きませぬが此處から見ると大層見當が違ひますわねーさんかんと言つて居るところへ先刻乗船を勧めよ来た赤ら顔の船頭がやつて来て突然お百の前へ胡坐を組ま、船頭「姐さん一杯酌して呉んぞ」と客人の前をも憚らず胡坐を組いたが、お百のセツともしき、此方の方が上手の大悪婆だけども何處までも柔順しやかよ」百「畏れましましてございませぬ」船頭「姐さん、お前此の船を何んと思つて乗つた」百「ヘ〜」船頭「ヘ〜やアねら、お前此の船を

何んと思つて乗つたよ」百「私、詳しくはございませぬ、此處へ御出でござる御方、越後國新潟の糸屋の旦那様、私が途中で目よ掛りまして新潟の毘沙門島へ往つて奉公をしやうと思ひますと言ひました所がそれで、己れが連れてつて道るから己れと一緒に来いと云ふので今後の日の出屋で種々御馳走も取りましたスルと姐さん此處から新潟まで陸を往くのと船で往くのので、昔から此の船の間違ひがあるから乗つて往まよと云ふことでございませぬから此の御方の御勤めも任せて乗込んだのでございませぬが、一体是れ何んド云ふ御船でございませぬ」百「ホ、ホ、ホ、知らねら、可憐な、姐さん、是りやア海賊船だ」百「ヘ〜海賊船と……」百「分らねら、困るさア、海賊たア海の盗賊よ」百「ヘ〜山の盗賊……」百「山の盗賊、山賊だ」百「ヘ〜、ソ、ソ、ソ、此の船の海賊船で……」百「どうよ、お前を連れ込んだのは新潟無宿の赤岩重助と言つて己れが酒田の船入坊主だ、帆の手を取つて居るのが滑川の銀藏よ、船も立て居るのが長門の熊右衛門、今船の方で用をして居るのが立山の三吉と云ふ五人乗の海賊船と知らずして乗込んだのがお前の災難、五人でお前を抱いて寝やうと云ふのだが、ア今夜の赤岩の哥兄が抱いて寝る、鏡を抽いたら己れが、明

日の夜も當つた、外見は怖い坊主でも心は柔しい、噛めば噛むほど甘味の出る鯛坊主たる己らのことだ「百」ハアお前さんが鯛坊主ちゃん……「龜」何んだ鯛坊主ちゃんだあんて、顔はノッペリして居るけれども何んとなくスウ〜しい女だナ「百」毎夜お前方が抱いて寝ると云ふのかイ「龜」さうよ「百」フ、ー、ム、ぢやアママ名乗って聞かせるから耳の穴を掻き出して能く聞け、手前達ア己れを尋常の女と思ふだらうが出生は大坂で江戸で悪事を働いた藝名小三本名も百だ、先の亭主を砂村で殺し二度目の亭主は甲州巨摩郡荒川無宿の彦五郎と云つて澤山もあいが十三人の人殺し、甲府で半破りをして佐竹の金藏を破り役人を斬つたところから食込んで小塚原で切出し鼻首、乾兒の秋田無宿の重吉と云ふ奴が己れの悪事を訴へたが彦五郎と云ふ二度目の亭主が己れの罪を引受けて處刑も就いたけれども上の役人が己れの悪事を認めためる相ツリの重吉は熱氣を食つてコロツと往つた、己れは運強く唯一人傳馬町の女半も二年越しの長半、ところが傳馬上町から火事が出て石出帯刀様御預かもの四人が悉皆半拂ひもあつたときも半を出て第三日目も立歸つた、第三日目も立歸つたので娑婆がわつて佐渡へ流された、女で佐渡行と云ふのは始めてだ、けれども永く居る所ぢや

アあいから兩國無宿の雷傳次と云ふ奴を盛まして役人を突殺し、竹島街道へ脱出たときは雷傳次は狼も食はれて死んで仕舞つた、己れも樹の上から其の傳次が狼も食はれるのを見て居てツツとし、ドウせ生命を捨てるのだと覺悟をしたがドウ云ふことか狼は逃げて往つたゆゑヤレマア嬉れしやと思ふところへ相川の役人がソレ佐渡脱けと追掛けて来た松明の光りも一つ追れて又二つ、迎も通れ難き身の上をモウ一度と樹梢も隠れて居ると元々跣足で脱げたのだから穿物はあし樹梢から己れが頭の髪を捨て置いたゆゑ雷傳次は狼も食はれ、小三のお百も狼も食はれて頭の髪が此處も残つて居ると役人は認めを附けて相川の役所へ引上げたア、嬉れしや辱けさや生れ變つて此の身体、ドウか壁の上で往生を一旦覺悟はしたけれども被るおく能登島と云ふ所で竹取老爺の持作を殺して立退き、是れから一ト仕事と思つて来た途中連れ込んだ奴は商人も妻は變へて居るけれども言葉の端々合點が行かぬと思つたそこは承知で乗つた海賊船、出羽の酒田の酒井左衛門尉殿御領分で寺町も正覺寺といふ法華寺がある其寺の坊主の悪事をば女半も居るときも新入りから話を聞いて居るゆゑ其の坊主をばブツ〜と掛け鉢も果敢きい者を助けて遣らうと思つ

て乗込んだ此の船、己らが手は從やア美事金取らせて遣らア、言ふことを聞けば大層だ、黙つて居ても此方から自由にしてやる、一人二人は面倒だ五人ア、一緒来い、太陽さまが黄く見ゆる赤と吐きあが宜い、御戸帳開いて見せるから其處まで御本尊さまを拜め」龜「イヤ、モウそれや及びませぬ、ドウぞ御免を……ドウぞ驚かせましたナ」赤岩の重助、酒田の龜八、滑川の銀藏、長門の熊右衛門、立山の三吉等一同の者は言葉を揃へて「エー姉御、さうぞミツナリ金儲けをさして下せし」百「さうお前方が言やア纏った金子をミツナリ取らせて遣るから宜い加減足洗してマア海賊は癪めた方が宜い」一同「それぢやア乗込さうと」田羽酒田を、望んで乗込し船、御話變つて此方は出羽國酒田、是れは酒井左衛門尉殿御領分内八萬石酒田六萬石、けれども大層國は良し所で、庄内は酒田で持ち、酒田は庄内で持つと云ふ位が古今の盛り場でございますして一の町二の町三の町、今町、幸町、魚町でございます、

茲はその寺町龍王山正覺寺と云ふ法華寺がございす、本尊は毘沙門様で寅の日の縁日はは老弱男女群集いたしす、正覺寺の方丈は日寛と申しまして當年二十八歳、古今の美

僧、人呼んで之れを業平日寛と云ふ、其の龍王山正覺寺と云ふ法華寺の墓所へ十八九歳ある娘体の者と三十五六歳ある百姓体の者二人が其處へ遣入つて参り。○「エー、御願申します」取次「ハイ」○「寺町の正覺寺様と申上げるのは當寺様でございますか」取次「ハイ、正覺寺と申すは當寺でございます」○「庄内大山村の百姓重助と申します此處は居ります、のは私の兄の娘で手前の爲りには姪でございます、此者が親は十三年前御當所から商業上も付いて江戸表へ参り小網町と申す所で高田屋重兵衛と言ふて米渡世として居りましたが三年の間は貰ひ火で二度焼け其の上、自火を出し葬禮等を出して資産を悉く傾けましてございす、就きましては卜筮の先生も占て貰ひましたところ先祖無縁の祟りだと申すことでございますからドウか過去帳を御調への上、先祖の法事を願ひたく、是れは御祖師様への御供物料、是れは御祈禱料、是れは方丈様へ御菓子料、是れは御納所様へ御手數料、是れは所化方へ、是れは小坊主方へ、是れは男衆へとスツと頭數通り其處へ目録を列へました、阿彌陀の光りも錢とやら萬事何處だつても金の世の中で取次の役僧は早速此のことを方丈と言ふと方丈日寛は其處へ出て「是れは是れは宜うこそこの御出で、其處は臨近、

「ア、此方へ……」重「ヘー、ヘー」日「其處での御話が出来ませぬから此方へ……」コラコラ御洗足を持って来る」とチャホヤ致します草鞋の紐を解く、叔父と姪との兩人の案内、遠て一間へ通し御茶を出し御茶請の菓子を出して是れから直様過去帳を持って来て十一年十二年十三年十四年十五年と繰って見たが更らよ知れぬから、又十年九年八年と繰ったが高田屋とも重兵衛ともあり」日「御姓名は何んと仰しやると言つて聞くと「鈴木」と云ふから又鈴木と云ふのを調べたが鈴木と云ふのもあり」日「何んと石塔を一本ツ、御改めなすつてのドウ……」重「左様ならいと云ふので一本ツ、石塔を改めましたが是れ又高田屋とも鈴木ともあり」日「是れは先住がツイ此の近傍に隠居して居りますから先住に問合せて明日御挨拶も及ぶでございませうが何方へ御泊りでございませうか」重「ヘー、一の町の和泉屋方へ止宿して居ります」日「それで和泉屋さんへ明日申上げませう、何もございませぬが精進料理で一口召上りませうやう……」重「それのドウも難有うございませう」

さう斯うする内、傍らに扣へて居た十八九か二十歳位の娘が「アッ」と言つて倒れた持病の癩、叔父ある者も驚け、日寛和尚も納所小坊主も驚いてソレ水薬と介抱し及び洗石

日蓮宗のことゆゑ、日「是れは小室御符、是れは御舍利様、是れは御水」とイヤモウ種々さものを持つて来て口へ入れました、何が利いたかして忽ち病氣が全快もある、娘「ア、宜い心持ちなりました、難有うございませう、癩と云ふ病の怖い病で、皆さんが御薬だの御水等を下さるのの夢のやうな愛で居りましたが御禮を申上げることが出来ませぬ、……」叔父さんアノ御寺様も御厄介なまつて居り早く旅宿へ歸りませう」重「一の町まではまだ餘ッばどめるが途中で又癩が起ると已らが迷惑、イヤ後くりお前は冷えぬやうな和尚様の側へ寄つて話をして居るが宜い、其の内よ己れが和泉屋へ往つて御籠を仕立ッて来るから……」娘「それぢやア叔父さん成るだけ早くして下さりませう」重「良し、早く御籠を仕立ッて来る……」ドウウオナヨツと御籠み申しますと「叔父の重助は出て行く日寛坊主は美男ですから男自慢で」日「ア、姉さんや此方へ御寄り、其處は冷えるから……」娘「難有うございませう」日「お前さん、癩は御持病か」娘「折々暑さ寒さに向ひますと起ります」日「女の癩は怖いものでイヤ」生懸命に御題目を御唱へ申したら幾分か癩の凄まじさやせう」娘「難有うございませう」日「アノ癩を治らぬことを聞かやうだがナニカエお前さん

んは御嫁も往くのか、御婿を御取りおさるかエ」娘「ハイ、始めて御目も掛って斯様も馴れくしく御話申したら定めし鏡面皮奴だぞと思召しませうが最前起つた海は實は氣も掛ることがあつて起つた所、それは他のことではございませぬが私が先祖法華の爲め逆々叔父の所へ尋ねて参りましたところ二日は道中疲れて逗留して居りました、ところが二十三ヶ村へ取締をして居る大庄屋でございまして長谷川孝兵衛と申しますもの、是れはナカノの財産家でございまして、其家へ叔父がナヨツと私を往つて呉れと申しますもの、依つて手土産を持つて叔父と一緒長谷川と云ふ家へ参りました」日「成るほど」娘「ところが當年二十六歳もある長谷川の伴孝三郎と云ふ者を實は私の婿にするよと云ふので見合も連れて往かれたと云ふことを後で聞きました、其孝三郎が今度三百兩の持参で私の家へ養子に参るやうなモウナヤンと親類共が打合はせまして私が承知あらば直ぐは何月何日と云ふ極めて江戸表へ歸り次第婚姻の禮をするであらうとのこと、ところが其の孝三郎と云ふ男は色が黒くて鼻が胡坐を組いて居て片眼で反齒で尻尻甲高のイヤハヤウも酷い男でございまして、さう云ふ醜男を生涯亭主と頼み抱いて寝ることが情けなうございと思ひます

云ふことが始終胸もあるのでツイ癪を起しました、貴僧のやうな御美くしい御方あらば……」と聞えるやうな聞えぬやうな言ひをしてパツと赤らむ顔、日寛はイヤ扱ては此の女己れも夏の丹桂餅でござつたぞ、と斯う思つて日「左様でございませうか、姐さんや叔父さんが御迎ひも御出でござる前に難有い御内佛を拜ませて遣るからお出で」と袖を引く娘「アン御止しませぬ、誰か来るも行けませぬ」餘事を申して恐入りますが婦人が「アン御止しませぬ、誰か来ると思はるゝから」と言入ばモウそれでメムシもの「何しやアがる此畜生、戲事すると擲り附けるぞ」さぞと言入ばモウカマあしでございませぬ、是れから本堂へ連れて参り御祖師様の蓮華臺の下をボンと敲くとコイツがガンドライやもンでツルツと返へると階子の降口がある、其の階子を下へトン／＼と降りると入墨の座敷が本堂の下へ出来て居て何處から明りを取るか薄暗くはあるけれど明り取りがあるナカノ立派な座敷で内佛どころぢやアない蠅帳から火鉢鐵瓶、内々三つ割の御酒が附いて居て絹布の夜具が積んである、是れはその今町と云ふ所の唐木屋と申する呉服店の細君を引入れ



百おの妃姐

て毎晩毎晩怪しからぬことぞいたすと云ふ世も悪むべき悪僧日寛、是れ實に延命院が御殿  
 女中も引導を渡したと云ふ昔物語もごまかしますが、丁度年配さきも等しい御話で延命院よ  
 りは餘ほと烈しいことがございます  
 其の所へ乗込む此の婦人、扱て如何あることと成り行くやら、又是れある婦人が日寛を如  
 何と致すやは追々言上いたします。

第三席

扱て是れまで申上げました毒婦お百の傳、實に外面女菩薩、内心女夜叉、恐るべきは毒婦  
 んごまかします。

既し龍王山正覺寺と云ふ法華寺の住持日寛と同道して本堂日蓮祖師の木像の傍に唐櫃の入  
 口があり、トンと敲くと其の入口がサンドウ返しとあつて居て階子が掛つて居るゆゑ、そ  
 れを降りると下にはナヤンと燈火が點いて地の中は立派な居室が出来て居ます、内佛と見  
 せられたのは蠅帳で其の中は敷種の下物が這入て居る、御酒は樽で附けてありまして火鉢、  
 敷物、其の他座敷廻りは實に目を驚かすばかり、始終香を焚き居ると見えて香の薫りも穢



と致たして居る、實に地中も斯の美麗なる家のあるのは極楽かと思ふは、  
 此のとき日寛が「姐さんや、此處は誰れも来る所ではな、御酒を温るから一杯飲んで  
 其の内もコキウをして叔父様が来たら歸らっしゃるが宜い、ア此方へ寄りあそばさし」と  
 手を拉り男自慢の日寛が全く大山村百姓重助の姪と心得て引寄せ寄せる途端唐櫃の入口よ  
 り小坊主がトソトソと遠く降りて来て「何んぞ珍寶」珍一へ大變でござ  
 います、此の姉さんの迎ひだと言つて先刻来た人か表門を敲きますから門番の賢助  
 どんが門を開けと突然飛掛つて賢助を縛り掛けた、それから御納所、所化、小坊主、  
 悉皆引縛り住持は何處も居る、住持は何處も居ると言ひますからコソソ大變と師僧のと  
 ころへ御通知を参りました、ウツカリ出ては行かせぬと「言ふのを聞いて日寛は驚き、日  
 「姐さん、アノお前の叔父さんと云ふのはドウ云ふ身分のものだ」と聞く途端右の美  
 しい女は立上つて横面を方一杯バチリ撃つた、不意を打たれて日寛はコロリ其處へ倒  
 れ飛いて起き上らうとするのを取つて押へ用意の懐刀をメラリと抜いて頭邊へビョリと當  
 て娘「サア動くと切ると云ひながら突然懐中から取出した呼子の笛をビビビ吹立たる、

呼子を合圖唐櫃の入口より這入つて来たのが第一番赤岩の重助、最前大山村百姓重助  
 と言つて来た奴で此奴が海賊の其の中の頭領分、次は酒田の龜八、滑川の銀藏、立山の  
 三吉、長門の熊右衛門、オラリと列んで居て「重一姉御、旨い隠れ場所を見附ました、  
 此の所へ每晚唐木屋の姉嬢を引摺込んで引導を渡して居やアがる、法衣を着たり袈裟  
 を掛けたりして左も殊勝らしい顔をして悪事をするのは餘ッばど罪が深い、我々共は生命  
 を限り悪事をするので御用と聲が掛りやアモウ細首が飛ぶと覺悟をして居るが、此奴は  
 悪事をした其の上へ何處までも免れやうと云ふ了簡方が恐ろしい」娘「坊主、己れは庄内  
 大山村の百姓重助の姪ぢやアない、出生は大坂でも仔細あつて女で佐渡へ流され佐渡の竹  
 島口を破り能登島まで竹島父爺の勲作を殺した百だ、己れが女牢の名主をして居るときよ  
 新入りのお吉と云ふ女が肩を揉みながらの話唐木屋の姉嬢のお辰と密通して家附きの娘  
 お吉をサン／＼折檻し故意と番頭と色とさせ番頭め金と興へて謀らばせ娘を牢へ打込み、  
 姉嬢のお辰めが女世帯で引ッ撥廻はして昔日寛を注込んで云ふのをナラリと聞いた地獄  
 母、巨蛇の道は蛇で話の中唐木屋甚兵衛と云ふ者を毒藥で殺し怪しい死骸を菩提所ゆゑ

此の正覺寺へ葬つて毎夜毎夜庭傳ひ忍んで往つて戀し可愛いと云ふ奴を手も取るやうに悟つたから佐渡を破つたをハ幸ひと悪事の中の罪滅し、お吉は牢死をしたゆゑも其の菩提を吊ひ旁々此處へ来たんだ、是れまで爲した悪事をハ悉皆白狀しろ、白狀すりやア汝の生命だけ助けて遣るが白狀しおけりやア直此處で細首を打落すがドウぢや」日「恐れ入りました、斯うあるからは逆も隠したつて隠し終せませぬから始めから浮話し申します、お吉から委細は浮聞きあすつたでございませうが今仰しやつた今町の呉服屋唐木屋の女戸主のお辰と云ふものは江戸の松島町の日雇取文六と云ふ者の娘で、其の古へ唐木屋が地境の争ひで酒井様の裁判が届かず、江戸表へ擔ぎ出しての長の訴訟、馬喰町の庄内屋と云ふ内は逗留中、寢床の上げ下ろしを頼んだ女が今のお辰、訴訟も勝つて歸村を言付つた其のときも相當の手當をして女を江戸へ殘して歸らうとするど女は奸物ゆゑ何も要りませぬから旦那の御國へ連れて往つて御腰の一つも揉まして下さいと云つて唐木屋へ乗込んで本宅へは這入れさせぬから別々圍はれて居た、さう斯うする中本妻は是れは實の病死唐木屋へお辰が乗込むとき親類一同の不承知、甚兵衛は親類義絶をしてもお辰を本妻よしたい、と

歳も耻ぢず商業上も耻ぢず思案の外とは言ひながら孫のやうある女をハ引摺込んで抱擁をする中もお辰は佛參くと言つて當寺へ參り、面目次第もございませぬが私しと必易くあり、亭主が在つては充分な快樂が出来ないから殺して呉れと言ひますゆゑも私の手では殺せぬ、お前の手で殺せと言ひますとお辰が一人で殺し怪しい死骸は私が葬じりましてございます、だから誰知る者もございませぬ、私がお辰から取り溜めした金子が三百七十兩此處もございますから此の三百七十兩を悉皆貴女の方へ上げますゆゑ、ドウぞ生命は助けて下さいます、御入用ならば此の座敷廻りのものは一切上げます、何卒生命だけは助けて下さいますと悪事を働くも似合はずオオ〜泣きながら兩手を合せて生命乞する、お百はニッコリ笑ひ「百ヶヶ太坊主だ、人を殺して置いて自分は生命を助けて呉れと手を合せて拜んで居るよ……サア金子は悉皆受取つた、品物は取つても仕方がないから品物だけ呉れて遣扱て日寛他ではない、是れから唐木屋へ往つてお辰は一番眼ももの見せて呉れやう、謂は、唐木屋甚兵衛の敵討ち、それやア手前の首があげりやア其の仕事も掛

ることが出来ぬいから氣の毒だが首を……」日「ア、……アレ生命だけは助けて……」と言はせも果てず取って押へ刀柄の先きへ手を掛けて上からアツリ坊主の首を押切りよした、酷い奴があればあるもの、日寛の首はコロコロコロと旋轉る、赤岩の重助は其の首を取ってスツカリ顔の血を洗ひ切口へヒツタリ血の染まぬやゝ手當として二重三重も包み納所、所化、小坊主に至るまで其の儀差置いては仕事の妨げと残らず打切り、珠數繁よし唐櫃の中へ抛り込んだ、打切って其の死骸は石蓋を打つたんだから是れは死んだのか生きたのかドウしましたか、

扱てお話を續けて此方は酒井左衛門尉殿御領分田羽國の酒田、是れは先づその新海の大だと云ふほどの港でございますから其の繁昌は言はん方もございませぬ、萬事届いて港一面も船舶が繋り、就中も今町の唐木屋と云ふ家は間口十三間の店蔵で、河岸蔵其の他文庫蔵があつて先づ酒田屈指の財産家、呉服、酒、醬油、味噌、荒物類等一切商ひます、總てこの田舎では呉服商は呉服物ばかりではございませぬ、種々各物を買ひます、朝早く家の前を掃除し撒水をして神棚の正面には燈明を點け、まだ夜が明けて間もさいが

スツカリ掃除が届いて居る、商人店の早起は宜いものでございませぬ、ところへ年齢二十三四歳、色白く瓜核顔の美しい細君体の者が茶形の單衣の上被りして茶形の腰帯を締め白足袋は赤い鼻緒の麻裏を穿き、胡麻竹の杖を握り、少しく道中疲れと云ふ鹽梅で左の足を曳きながら先き立って参り其の後より年齢四十恰好の手代体の者、紺桔梗の合羽は長物腰に打込み足の装へも嚴重にして供をいたし、又其の後より大紋附の半纏に盲目綿の腹懸、股引羽黒講と云ふ兩懸を擔いで前には講中の幟を立て羽黒參詣の歸途と云ふ人物が店頭へ腰を掛けました、先き立った女は被って居る手拭を取り小腰を屈めまして「女エー、御免おさしませし」番頭「入らっしゃら」女「小々伺ひます、今町の唐木屋さんと仰っしゃるのには御當家でございますか」番「今町の唐木屋は當家でございます」女「私は江戸表馬喰町の庄内屋嘉兵衛と云ふ旅館屋の家内でございます、お長さんと仰っしゃる方は當時御資産を御引受けお出で由承知いたしましたしてございませぬが、チヨツとドウか此段をお長さん御告げ下さるやう」番「ハ、左様でございますか……長松や、長松や」長「へー」番「奥へ往つて細君さんよナ、江戸の馬喰町一丁目の庄

内屋さんと云ふ旅館屋の細君が御出ですすつたと申上げて呉れ」長「長よりました」を小僧長松は奥へ参りました、暫く経つて長松は店頭へ出て来て長「ア、番頭さん、細君もさう申上げましたら奥の八疊へ御連れ申すやうよと斯う申された」雨「ア、さうか……それでは貴女、サア彼方へ……」女「左様でございますか、早朝から参り御手数を掛けまして御氣の毒でございます、御免下さいまし」と叮嚀に挨拶を致し、茶形の單衣を脱ぐと、キリ、と致した装の拵へ、何んだか圓いものを左の手へ提げて居るのは如何さま手土産と見えます、小僧の案内にて奥の二ト間へ通る、土蔵の前の八疊の座敷、中庭を取つて高窓茶掛り、ナカ／＼至れり盡せり家の掃造床の間の懸物と云ひ、置物と云ひ實に屈いたもの、片田舎も斯う云ふ家かと考へられるが、併し酒田は片田舎ではございませぬ、ナカ／＼紋章所でございますして新造も芳らぬほどの所でございます、煙草盆が出る、茶が出る、茶請の菓子が出る、さう斯うする内、女主人のお辰が出て来た、モウ年齢の二十八九歳だが顔が若いことゆゑ二十六七歳に見える、ツロリと致して商人よりは少々不向きの装へ、是れも美しい女で丁寧な雨

手を突き長「ア、唯今取次から伺ひますると貴女は江戸の馬喰町一丁目庄内屋さんの御家内のやうに承知致しましたが、私が御懇意として居た庄内屋の細君は貴女より餘ほど御年配のやうに承知いたします、ドウ云ふ仔細でございますか承りたうございます」女「ア、御不審は御尤もでございますが彼れは私の姉でございます、中が二人ありますゆゑ少々歳が違ひ居りますが、皆片附きも致しましたし、病死も致しました、それで姉の夫は亡くさり續いて姉が亡くするまで遺言も私に庄内屋の家を取らせて呉れとのことゆゑ私には御屋敷へ御奉公をして居りましたが早速暇を取り同町福島屋と申します同商賣から養子を買ひ唯今の庄内屋嘉兵衛は福島屋の枠でございます、然るところ私が初産で乳を腫して難儀いたしましたから種々醫者にも掛り禁厭其の他も致し神信心等も致しましたが何分にも疼痛が激しくて癒りませぬ、左る人の勧めも依りまして出羽の羽黒権現様の御水を附けるとドンお乳の痛みでも癒るも云ふので羽黒本山までは餘ほどの里程でございます、板橋の宿場も羽黒山の御出張がございしますそれから御水を施すとのことゆゑ願いて附けますと云ふので一週間経ちませぬ内に拭つて取つたやうに癒りました、ドウか一度は御木山へ



ツと取持つものがある、男珍らしきは御殿女中の常習、歳を取った田舎漢でも一つは慾色と慾との二途は掛って好い交情もあり、それや是れやのことからお前さんが今當家へ御無心な御出でますッたやうにも私は考へる、それならアア〜野暮なことは言はずで、是れ〜だも依って歸りの路用が手薄から二十兩なり三十兩なり呉れと割って話さし、さうやアお前さんも御存知の通り私も普通の女ぢやアさし耻を言はよやア分らさうが、私は松島町の日雇取文六の娘で、チーお前さんの家へ僅か金で圍はれた、それから立身したゆえ庄内屋さんの御恩は忘れさう、御恩は忘れさうが餘り不相替することを仰しやると依って是れが唐木屋の家附の世間知らずの商人氣質の娘さればお前さんの威嚇に乗って出してもしやうが、それとは少し女が違つて居る、氣の毒だが確かな證據がさけりやア銀一文でも斯うすれば御返し申すことは出来ませぬ」女「へー、それぢやアナニかいお辰さん借りた貸したと云ふ首と釣換への印形が捺った證書がさけりやア返ささいと言はさるのかエ」辰「どうサ證據のさしものは催促よは来られませぬ」女「證據を見たらお前さんの迷惑もあるだらうと思ふから出ささいで居る」辰「ソ、ソ、證據を出されて迷惑する者が何

處の圖もござります、證據を出さなければ却つて迷惑する」女「ぢやア證書を見せませう、手許に幸ひあるから見せるのだがお辰さん、今店に居た文次郎と云ふ番頭の彼りやアお前さんの弟だね」辰「エー……能くも文次郎のことをお前さん、知つて居さるや」女「知つて居る譯がある、彼の文次郎と云ふ人に會はさけりやア話が出来さうからナヨツと此の所へ喚んで下さる」お辰の文次郎は何の用があつて喚んで呉れと云ふか知らと思ふが喚んで呉れと云ふから辰「文次郎、文次郎」文「へー……」辰「ナヨツとお出で、ナヨツとお出で……」文「へー……何でござります」辰「マア呆れたもぢやアさうか、是れは庄内屋の細君だと云ふがアソそれの柄もさういところへ柄をすけ湧さも湧いたやうな五百兩日那が繁昌のどき貸したと云つてそれを取りよ来た、證書があるだらうと言つたら今證書を見せるから店に居る文次郎と云ふ人を喚んで呉れと云ふがお前の此の人を知つて居るかエ」文「ナニ、ナツとも知りやアしから」辰「何とツツ〜しし子、奇麗な顔をして暴れよ来るさんて……」文「エ、エ……商人と侮つて五百兩の金を強盗よ来やアがッて……」女「文次郎さんお前ッンさよ大さ

後四十六  
 聲をするよやア及ばぬ、私ア構ひぬいがお前方の生命も關るから静かにおしよ 文「何も  
 生命も關る覺えのこぞいませぬ」女「宜いよ、静かにおしよ、静かと言つても事分る、商  
 人の家で高聲をするの、餘り寝めた話じやアない……背後の障子を御閉めナ」文「ハ、……」  
 女「背後の障子を御閉めナ」文「閉めずと宜うございませぬ」女「宜いから、私が出したものを  
 見たらビックリしなさう、私の兎も角、當家で難儀をするならうと思ふから閉めさせい  
 と言ひれて少しく薄氣味悪くあり文次郎の障子を閉めて眼も離さず彼女が出す品を見て  
 居る、お辰とても其の通り、一時は威張つて見たが向ふが餘り落着いて居る様子を見て是  
 りやアナカ〜ト通りのものであり、と思つたからチーンと殿敷の品を出すのを見て居  
 る内よ静か風呂敷包を開き、切口へ左の手を當て坊主頭で毛がございませぬから耳を搦  
 んでお辰の前へ突附けたのは即ち龍王山正覺寺の日寛坊主の首、是れより如何に相成るや、  
 ナヨットト息入れて言上よ及びませぬ、

第四席

身を慄はしてお辰の驚きト方からず、文次郎も腰の抜けるほど愕き唯ガ〜ガ〜

慄い二人は何の言葉なく顔と顔とを見合はせて居る 女「お辰さん首と釣り換への印形を接  
 いた證書を出せと云ふから證書より首の方を先さし出した、毎夜〜戀し可愛いと抱  
 いて寝た正覺寺の日寛の首で、己れは大阪出生の島破りの百だ、亭主を殺して此の坊主よ  
 怪しい死骸を片付けさせ親類義絶を幸ひよ此の資産を一人で引ッ掻き廻はして日寛の許へ  
 毎夜通つて居て坊主よ遣つた金子が三百七十餘兩、己れはドウせ遣からず磔刑臺で生命を  
 落す大阪無宿の百、店藏、奥藏、河岸藏の立派な商人の細君、左も殊勝らしく唐木屋の細  
 君で居ても日寛坊主と悪事を働いて居るのを看破つた、五百兩の金子を取らうと云ふのは  
 難儀をして居る奴よ施與す爲めだ、お辰さん五百兩ぢやア安い首だ、お前は亭主殺し、此  
 の文次郎さんが家附きの娘お吉を欺罔かし金子を持たせて連れ出し江戸で以て手先を頼み  
 怪しい者と言つて召捕らせ牢へ打込んだときよ牢名主をして居たのが此百だ、委細にお吉  
 から聞いて居る、嫌さら嫌、買へるものなら五百兩で買ふが宜い、サア返答はドウしたエ」  
 辰「買ひませすよ、買ひませすよ」と云ひながら文次郎も服配はせをするから文次郎は殿へ往つ  
 て五百兩取出し家内の者よ知られては一大事とソツと持つて来た端を揃へて 文「改めて五



百兩俵受取を……」辰「アウか其の首を俵隠しを願ひます」百「それだから私が言はさいとどぢやアあい、静かよおし、障子をお閉めと言つたのは此のことだ、キーお辰さん此の五百兩で根ッ切り葉ッ切り病切りぢやアあいよ、又入用のときも取りよ寄越すから二つ返詞でお寄越し寄越ささいと又私が取りよ来るから……」辰「ドウぞ俵隠さすつて……」是れで一つの俵勘辨を……」百「五百兩と云ふ大金だからア當分小遣は困らさい、アア度々嫌やがられよ来るのも本意でいさい、併しお辰さんお前も美しい顔だが悪事を能く働くね、私も随分衆人に知られた藝妓の小三と云ふものだが悪るい事をしちやア忘れられぬ」と云ひながら茶を喫み菓子を食べ、煙草を三服ばかり喫つて、静かよ 百「お辰さん、是れは戀しい可愛いと言つて抱いて寝た日寛の首だから葬むつてお遣り 辰「ドウぞそれは俵持ちさすつて下ろさ」百「迷惑をもらやア持つて往つて上げる」と元の通りよ結び、其の座敷を出る、

一ト間から出て店へ出る間、始終の様子と云ふものが腰を屈めまして 百「是れハ御送りでの恐れ入りです」喜んで言つて居るから誰にも此女が首を持つて来て五百兩の金子を強取

つて往くとい見なませぬ、静かよ店の者も 百「江戸へ御出での節ハ馬喰町一丁目の止内屋と御尋ね下されば直ぐ分りますからドウぞ御出でを願ひます」誰が此様家へ尋ねて往く奴があるものですか、

其の儘金子と首とを持つて重助及び兩懸を擔いで居る者を連れて出た、此兩懸を擔いで居たのが酒田の龜入坊主、けれども此奴は幼少い中も當所を出ましたから誰も知つて居る者はさう此奴が萬々此處の地の理を知つて居るゆゑ斯う〜斯う〜だぞ云ふ指圖を致したので斯う云ふ段もあり是れより致して遂に元船へと志願す、

却説唐木屋甚兵衛の權婦お辰は弟の文次郎と兩人で店頭よ立上つて思はずお百の後影を見送り、茫然として居る、

どころへ立歸つて参りましたのが支配人の庄兵衛、此男は通ひ番頭で折々又店へ泊り宅へも歸る、昨夜急用達よ参り、唯今立歸つて店頭よお辰文次郎の姉弟が何か斯う色寄せめまして茫然と立つて居りまするゆゑ變と思ひましたが 庄「ハ、細君エ用は聞ひましてご

後五十一  
 「支那人庄兵衛は奥へ参る。此奴も矢張り一つ穴の貉で、内々此のお辰も通じて居る男妾同様の番頭庄兵衛、主人を殺すところの一條も薄々知って居るけれども斯る財産家の男妾同様の支配人で帳面表を宜いやうに掻廻して居る、だから何處までも腐らうと興らうと此の資産はお辰の一心もあること、お辰は庄兵衛に對つて「庄兵衛ドウしたものだらう今是れ〜是れ〜の次第で賊は氣があるが、お前が歸つて來たを幸ひ相談をするが、お前の考へはドウであらう」庄「そりやア細君、大變です、今貴女が五百兩御出しなすつたところで事済みなすつたと思召すのは大違ひらう云ふ悪事を働く奴だから遠からず御召捕りにある、御召捕りなされば當時唐木屋の女戸主辰と云ふ者の亭主庄兵衛を殺し正覺寺の日寛と云ふ和尚と姦通して是れ〜と是れまでのことを申立てれば無論貴女は浮處刑、又此處も居ざる文次郎様、是れも連累がる私共まで皆んか浮處刑も就かよアありませぬ、ドウも斯うなすつた以上は仕方がないから貴女龜ヶ崎の浮陣屋へ浮出であされて浮役人金山庄太夫様も浮遇ひの上、先日は用立つた五百兩の金子をバ棒を引いて隠文をソックリ返

へしやし、別又五百兩と云ふ正金を所持せられ先方も悪事があるに依つて金山様の手で召捕り、何を言つても金山様がそれは偽りだ、偽りだと云ふ内も浮陣内で一服飲ませれば死人も口おし、それで半死届のことが濟めば根ツ切り、葉ツ切り、病切り、是りやア猶豫して居るところぢやアございませぬ、此の浮使は私か貴女だが、私では事が調ひませぬと申すは恐入りますが金山様も毎度浮遊びも浮出でもあり内々貴女との別段浮懸意、から貴方の言ふことは金山様も早速承知、殊に五百兩の隠文を返して別又五百兩と云ふ鼻薬を持つて浮出であされば其の効験は充分でございませぬから早あさる」辰「それではお前が言ふ通り……」と云ふので直様御籠を仕立てまして龜ヶ崎の金山の所へ飛ばせる、折柄金山は宅も居りましたため早速會つて手短か右の話をする一体此の金山庄太夫とお辰どの好い交情もあつて居る、ナカ〜此のお辰と云ふ婦人は嫁婦でございませぬから彼方も此方も口を掛けて居る、金山はお辰の話を聞いて「ソレソレ」で云ひながら捕手を向けた、

御話變つて此方はお百、重助、龜八等の者共等と船まで互に金子を配當いたし、重「先づ當

分此金で姉御小使もやア困らせぬ、貴女は良い腕ですわね——解を下ろして酒や肴を……」  
 と云ふから百が「イヤ〜ママ危うきは近寄らず此處は長居は無用、何處か港を變へて  
 一つ緩くり……船で飲んぢやア面白くないから船から上って泊り掛けよ往かうぢやアない  
 か……」重「成るほど姉御の言ひさるる通り此處はツカ〜して居る所ぢやアない少しも  
 早く此の所を乗出して……」重「誰さうだんべい、ママ此の近所ぢやア新海へでも往って飲  
 みませうか、それより他は往って飲まうと云ふ港は無い、それとも大廻りに廻って松島邊  
 りへでも往って……」百「そりやア大廻遠い、何處か近所の良い港で一ト口飲まうよ」  
 一同「それでは……と云ふので銚子身支度を致して船を乗出さうとする、ト早頭の方まで  
 プ〜と云ふ貝の音が立ったハテナ怪し〜貝の音色と船の舳は立上って赤岩の重助が四  
 邊をキツと見渡せば橋拍子取つたる早船がお百の乗つて居る船を臨んで眞一文宇よ飛ぶが  
 如くよ乗立てる」重「イヤ姉御、扱ては酒井の捕手が向つた、猶豫して居るところではな  
 いと」是れから帆を揚げまして橋を押し切らうとするが、何分も此方は大船進退不自由、  
 向ふは小船でございまして早橋を掛けたることゆゑ忽ち船縁へ著けられ「御用」と云ふ聲

諸共よ飛鳥の如く飛込んだのは酒井の家來龜ヶ崎の陣屋附の役人でございまして劍道無雙  
 の達人、捕者の名人河田一作と云ふ人、一尺二寸白磨きの十手を振つて船縁へ着くよと見  
 る内早くも体を踊らして乗込んだるの實もや飛鳥の如しと此のことさらん酒田の龜八坊  
 主の一刀を上段よ振渡り今踊込み來るところの河田を唯一ト打ちに打たんとするのを、  
 河田の体を開いて空を切らせ、一聲叫んでハッシと打つたる手練の十手、龜八の一刀ボロ  
 リと打落すと續いて乗込む役人が取つて押へて繩を掛ける、其の内よモウ敵はと曉つた  
 か長門の熊右衛門の二間の櫂を取り微塵もあれと河田を望んで打下ろす、河田の心得たり  
 と是れも同じく身を捻り空を打たせることゆゑ己の力餘り櫂の船縁へハチーリ常り手  
 許へ響き應へる途端よ是れ亦ハッシと柄を打たれボロリ打落すや否や肩間屑上の眞ツ直中  
 を力よ任せてハッシと打つ兩眼眩んで倒れるところを次よ飛込んだる役人が取つて押へて  
 繩を掛ける、斯の如く片ツ端より取つて押へ取つて押へて繩を掛ける。  
 其の内お百よ於てのモウ敵のじと覺悟あし身を踊らして千尋の海中へトブーリ水音高く飛  
 込んで跡白浪と消れ失せたり、

扱て此方の酒田の龜八、赤岩の重助、長門の熊右衛門、滑川の銀藏、立山の三吉、此の五人の賊と繩を掛け、船の鼻頭へ曳いて参りました。酒井家より番人が付き五人の者の御牢内へ打込まれまして遂に御牢内でございまして一服を服させられ吟味中々悉皆牢死いたしました。是れが爲め先づ今のところでの唐木屋の幸ひ無事でございす。其の後お百が酒井家へ入込んで唐木屋の次第を逐一申立ツたゆゑ酒井家より御捕長龜ヶ崎の陣代金山を始め唐木屋辰、同人手代庄兵衛、同じく文次郎其の他是れ又關係の者一同とれく御處刑もあり、唐木屋はトウく茲に相滅びましてございす。

講談變つて出羽國池田郡久保田の城主二十餘萬石佐竹左兵衛佐義政公の御船頭與田七兵衛、此の者は桑名屋徳兵衛の後役にて千三百石積佐竹の手船雷電丸御預りでございまして住居は港本町と云ふ所とございす是れは矢張り佐竹の御領分、御當所で申しすれば先づ横濱と云ふやうお所の船着、港はナカく立派なもの、其處に居ります奥田と申す廻船問屋で酒造家、上の御船御預りでイヤドウも宏大な身代、酒田の港を離れまして三里半

ほどお沖とございすする沖の小島と云ふ所は風待ちをして居た雷電丸の船頭七兵衛、今しも背見をして居りますと何處ともなくオーイと云ふ婦人の聲ハテナ見れば四邊には船も見えぬが婦人の聲が聞える、此處は港を離れた沖ノ小島、ドウして聞えるかなと船頭立上ツて見ると白晝のこととございすから遙か向ふへ婦人の姿で泳いで來るのが明々と分かる。

ナカく此處までは大概の男子ですら泳げぬから婦人では尙ほ更ら泳ぎ切れるものではござらぬが、此お百と云ふ者は海坊主の一念が皮肉に入つて桑名屋に祟りを爲し、佐竹へ仇を爲すと云ふことは前々より申上げました、それゆゑ海へ飛込めば己れの住居同様のものだから其の進退宛ながら箭を射る如くすれば我が身も不審議と思ふくらぬ身体軽く致して海上を走る、それで今オーイと聲を揚げたのは右のお百でございす、忽ち雷電丸へ泳ぎ著き錨綱へ手を掛けたから七兵衛は辭を下ろし船士は吩咐けて此のお百を助ける、雷電丸へ連れ込んで見ると赤裸体でございすが色白く、鼻筋が通つて居て愛嬌は翻れる様古今の美人、緑髪ハザンメラで御座しまして、ブルくブルく裸へて居るゆゑ先づ

「一も二もさく七兵衛の自分の着換へ其他寒からぬ様よ有合せましたるものを着せまして」  
 七「ドウ云ふ次第でお前、今此の所へ婦人は似氣なき荒海を泳いで此の船網へ掴まツたか」  
 百「左様でございます、私、大坂の者でございますが、親子連れでございます、善光寺様へ参詣をしやうと雨粒、私と三人で長旅のことゆゑ袋を背負ひ、至つて賢桑の道中を致し善光寺様より新潟見物へ参らうと途中で船に乗りました、新潟から大坂へ廻はる船だと云ひますからそれは丁度幸ひだ、新潟を見て私達も歸る、それで、アウカ乗船を云ふので乗出しますと豈圖らんやそれの海賊船で沖へ乗りますと斯くの仕合せでございますが右も左も方角に分らず、雨親の途へ殺され、私の弄恣れやうとする途程へ迎も身体を穢されるよりいへ海へ飛び込みましたところ御如来様が私だけ助けて呉れました、不審議も貴方の船網へ掴まツたの、私の身も取つての生命の綱……」と、風言と眞實とを混せて憐れも話をするゆゑ、奥田七兵衛の左ばかりの悪人が偽つて言ふと知りませぬから」七「さうからヤレ、可愛想よ、何の兎もめれ食草でもして氣を落附けざるが宜い、モウ此船へ來れば俗も言ふ親船へ乗つた氣もさつて居るが宜い、私の佐竹の船如奥

田七兵衛と云ふ者で宅も家來眷族が澤山居るゆゑ大坂へ行くときはお前を船へ乗せて親類衆もあらうからそれへ届けて運るゆゑ安心して私の船に乗つて居ざるが宜い」と云はれてお前の心中も、ア、モウ斯うあるから大盛石だ、と大に喜んで聽て風の模様で船を乗出しましてござります、  
 七兵衛の港本町の己れの家へ参り、ドン／＼荷物運ぶ、四十七戸前のいろは蔵があつて、アーンと其の藏々へ上の御荷物と自分の荷物をドン／＼親船から致して積込みました、  
 お百は於きまして、七兵衛は連れられて本宅へ参る、七兵衛の當年六十四歳、女房もモウ六十歳位の奇麗なお婆さんでございます、七兵衛の「婆さんや、是れ／＼是れ／＼で雨親が死んで仕舞つて、此の子が一人助かつた、マア婦人で能く海を泳いで來た助かりたい一心でやつて來たらうが是れも何かの縁であらうと依つて雨親の死んで親類ばかりだと云ふから、マア言ひ、大坂へ歸つても歸らぬでも宜いやうだ、丁度娘も十九歳のとき瘧症で取られて仕舞つたが、氣のせいだか、縹緞の大變違つて居ても口元だけが能く死んだ娘

又背て居るから己れの娘が生れ變つたやうと思ふ、婆さんや次第に依つたら彼女を家へ迎  
して養子を取りお互に早く隠居して初孫の顔を見るのが老人の何よりの楽しみ……」と七  
兵衛は大變にお百の肩を持つ婆さんも誠な人物の良い優柔な者でございませうから其の氣よ  
ある  
毎度申上げる通り悪人の表面の静かきものでございませう、それゆゑ此奴が島を破つたり他  
人を殺し亭主を殺したりする大悪人とはナツとも知りませぬ、そこで世間表の大坂の弟の  
末女を養ひ子に貰つて来たと言ひ做して置ませうと云ふ近所でのアドウも奥田さんで  
の美しい娘を買ひますつた、奥田の小町、奥田の小町と云ひ居ります」

第五席

お百のところは茲に暫らくお預りと致し今まではお百のこのみ言上して佐竹の御名前ば  
ナラく出ましたけれども更にお家の黒白論と云ふものは一向申上り居りませんでした今日  
よりは忠臣盛つて悪人滅び有聚は高名お御家のゆゑ一ト度の騒動も忽ち鎮静し及ぶと云ふ此  
の一條を言上いたしまして又たもや百の御話と一緒に居ります」

御話後へ戻つて時々延享の二年三月の十五日、月並の登城と言つて其の古へは江戸詰の諸  
侯が大廣間の大廣間、帝鑑の間は帝鑑の間、雁の間は雁の間、菊の間は菊の間と順々御  
詰めもある、大廣間は將軍家御會ひもあり、その他御名代で事の済むところの御間もござ  
います、  
先づ舊幕様時分は大廣間詰の諸侯は客臣とまで云ふほどの御會釋があり之れをその國士と  
申しましてナ、スツと江戸詰の諸侯は病氣の外は悉皆御詰めもあり、左右に居流れまして  
將軍家の御目通りをするのを待つて居る、  
ところがドウ云ふことだか其のとき將軍家の御目見えが御運うございませう御會ひの御運い  
も付いてあまた方でもござた方でもツイ退屈だと浮世の話を致して互にお興も入ませるの  
常習のもの、御上席の仙臺様は御年配でございませうから、少しく斯う御座睡をして居ら  
しやるが細川越中守様は誠にお御話好きでございませう、世の中お話好きと云ふものは我を忘  
れて一ト時でも二ト時でも座り込んで長々話し込む、それで家の迷惑は甚だし、ヤレ符を

立ッて見たり、下駄へ姿を點えたりするが中々歸らぬいそれからそれへと話又枝がさいて行く、又主人の方でもさう無素氣歸へす譯もも行かぬから茶を入れ、菓子を出して種々待遇ッて話をすると向ふは泡を吹いて無暗な話をする人がある、此の細川様の大の御話好きであるゆゑ阿波徳島の城主松平阿波守様は御向ひあされて「越」徳島殿、徳島殿「阿」ハ、熊本殿、何の御用でございませうか「越」扱て外でござらぬが先日貴方様より私方へ御遣はし下されたる御國産の淡路焼の瀬戸、イヤドウも黄藥と申し前黄藥、棒色藥質は結構な品でございまして手前へ頼りな籠愛を致して居ります「阿」エ、御褒めは預り面目次第もござらぬ彼れは國産までのこと、瀬戸のモウ紀州家御分家松平備後守殿御領分九谷赤江の瀬戸、是りやドウも日本最上の瀬戸でございませう、其の次の京都肥前尾州名古屋わたりの瀬戸は皆々何れも良うございませう、手前の國産は瀬戸よりも藍が良うございませう、阿波一ヶ國で獲れませう藍玉が日本中へ賣れます、淡路で獲れます米で阿波一ヶ國の上下共は露命を維ます、ドウモア此の國産では阿波の藍玉が少しく手前勝手のおうでござらぬが宜しやうでございませう「越」エ、それの豫て承はりましたが大

層ドウも藍の宜しやうでございませう、京染物其の他總てその最上の藍色の御領分は藍玉であければ行かぬと云ふこと、四國の一体國産が澤山出来るやうに承知いたしました、藍玉の外はまた何か御國産のものがございませう「阿」イヤ、淡路焼の瀬戸は藍玉の外は別々珍らしいと云ふものはございませぬ、隣國の土州公の御領分はイヤ國産の澤山もございませう、第一土佐縣土佐米、土佐の鯉節、其の他紙、砂糖、イヤドウも種々ある國産がございませう、其の他四國はナカ／＼富貴な國がございまして何れも國産は澤山出来ませう、又九州は國が廣うございませう、是れ又別段と御國産は澤山出来ませう、越九州はそれほど澤山國産はございませぬ、手前も四季の献上の内、トンを珍らしいと云ふ國産はござらぬが俗に彼の唐館唐海月、一説は朝鮮館朝鮮海月とも申します、彼れが弊國で出来ませう、それを彼方の通り製して公儀へ獻じますと是れは何れも御意に適ひまして早速又後を獻じます、珍らしいものは先づ此品で……「阿」イヤ、それは先達て貴方様から頂戴いたした之餘り結構でございませうから兩度ほど御無心申しましたが實はドウも珍らしいものでございませう、其の他九州では何と何が珍らしいと云ふ國産でございませう

越「左れば、マア手前の考へでは豊前の小倉小笠原殿御領分から出る小倉の袴地、鍋島殿御領分の半田錦、五島殿領分の鯛、是れはドウも最上なるもの、又黒田殿御領分から出る博多の帯地、且つ蠟燭類、是れは又一段のことで、それから薩州家の國産は泡盛、琉球布、鹿兒島布、其他種々の國産がございするが國が大きいのは至つて駿國で良い物が出来ませ」と御諸侯同士で御國産の御話をあされませす、

茲は伊勢の津、伊賀の上野兩城の主、三十餘萬石藤堂和泉守殿、此の御方は御小身、俗よ小藤堂と云ふ、御別家よりの御養子で能く下方のことを御存知ゆる萬事世事に賢い、御大名方がトンと物を知らずいて話しをするのが可笑しくて可笑しくてあらぬ、毎度其頓作輕口の御話が御席上をドツと返して御笑はせ相成る其藤堂殿が御席を進み出で、和「御一同御國産の御話でございするが、先づ奥州赤松は國が大きいせいか種々の御國産がございませすナ、仙臺で味噌、米、豆の類其の他岩沼と云ふ所から徳平漬物と云ふのが出ませすは最上の漬物で、それから南部御領分の鯛、少々鼻が曲り居ませす……イヤ是れは盛岡の牛糞と申しませした」とハラ／＼ハラ／＼喋舌るよ依つてドツと大笑ひをさせられ、越「今よ

始りぬ藤堂公の御話、萬事面白くございませす」

其話を傍らに聞いて居らせられたるは筑後柳川の城主立花左近將監、其の中で一番御高が御低くうございませす、けれども九州の武士は柳川よりと云ふほどでございませして至つて立花公は武張つた御氣象でございませすゆゑ平生縁々口も御利をきならぬで苦り切つて居る、併し武士は斯うありたいことで武士のハラ／＼喋舌るのは不品行のこと、立花公席を御進みあされませして、左「唯今藤堂公の御話、萬事世事に御精はしむことゆゑ下方の事情より致して國産の精しきところの御話、御一同御興に入つた御様子でござるが、先づ手前の考へでは此處は御出でござる佐竹殿御領分の出羽の海で捕れませすハハハと申する魚でございませす、國は隔つて居りませすが屋敷はツイ三味線堀で隣家のことでござるゆゑ毎度御國産を戴ませませすが其のハハハの味は古今の美味、殊よ其の御先祖新羅三郎殿使媛だ申する俗話がございませす、右の魚はオコゼと申する魚の小さいので沙魚と申す魚の少し大ききもの、形は能く似て居りませして頭は剣があらませす、佐竹殿が國詰りのときは劍が内よ向いて居るが江戸詰りのときは其の劍が外よ向くと云ふのは守護するの意でございませすか、



彼魚はドゥも珍らしき魚、屋根棟は此の魚を吊るし置きますれば、泡瘡の神が遣入らぬと云ふことを能く申します」とと重い口で餘りと云へば藤室様の御話が苦々しく思召したから立花様が仰ツしやツた。

ト佐竹様が之れを御聞き遊ばされ、佐イヤ、柳川殿は手前領分のハタハタを能く御存知あらツしやる、ハタハタより珍らしいものは先日貴方の所へ御覽よ入れた、併し御同席の皆様へはまだ御覽よは入れませぬが秋田秋冬と云ふものは先づ葉の大きさが立傘位あつて幹は柴竹竹、莖は罐子位ある、イヤドウも珍らしい秋冬でございます、是れを御同席様へ御覽よ入れたい、全國は是れ位大きな秋冬はございません、葉の大きさは立傘の如く、幹は柴竹竹、秋冬は罐子位でございます」と二度ほど仰ツしやツたゆゑ御同席は顔と顔とを見合せて、「ハテナ、秋田秋冬の大きいのは葉の大きさが立傘位あつて幹は柴竹竹位あつて秋冬の莖は罐子位あると云ふ、ア、所變はれば品變はると云ふが大きな秋冬があればあるものだと思つて居ると藤室様が又席を御進みおされて、和「是れは始めて伺ツた、佐竹殿御領分秋冬は其様か又大さうございませるか手前の考へでは大きいものは奈良の大佛と此の前

紀州熊野で捕れました鮭は三十三尋あつたと云ふ、是等は大きなものと心得て居りましたが奈良の大佛の前も乗兒がありましたよ依つて拾取らうと思つたら旅僧の寝袋であつた、大きいもの、前では小さいく見るもの、アハハハハ」と笑つたから又御同席もドツと御笑ひますツた。

松平安藝守様は佐竹様の伯父上様、是れ又正路潔白の御氣象の御方で甥御が可愛いと思ふところより「安久保田殿、久保田殿」と御喚びますツた、佐「ハッ……」併「唯今秋冬の御話でございますが、餘りと云へば法も過ぎたる御話、賊らしき偽りは云ふとも偽はりらしき誠は云ふべからずとは家康公の御名言、武夫たるべきものは左様な偽り飾りを仰ツしやるのは甚だ聞き苦しく存する、御年若とは申しながら以來御話をなさるるならば偽んで御話なさる」とマロリと御同席を見渡しながら仰ツしやツたのは親身の伯父様だから御意見の積りで仰ツしやツた、それを御年が若いゆゑ、佐「斯は情けなき伯父上の一言、私田秋冬が大きいから大きいと申すの、又偽はり飾るとは心を得ざる次第、毛頭偽はり飾りは任らぬ、既又中興先祖左中將義信は弓矢篤實とまで家康公の上意がございしました、如何も親身の伯父

上ければとて天下の諸侯列席の中よて偽り飾るの御一言は遺恨でござらう、今一言仰ッし  
ヤッて御覽じろ恐れながら其の御席は立たせ申さぬと服色を變へて小刀へ手を掛けた、安  
藝守様は意見をされるのよさう心附かぬかと思つたゆゑ 安「ナニ伯父よ對して不敬の一言、  
其の場は立たせぬと」是れ亦小刀の柄へ手を掛ける、スツヤ椿事と見えたるよきよ御上席  
の他臺様が「將軍家出御でござる」と聲を掛ける、其の内よ御襖が開いて月並の御禮滯り  
さく相濟みました、

デ御諸侯方はメツと御席を立つ、佐竹様よ於ては安藝様よ對して今一應聞かう、次第よ依  
れば伯父でも容赦はせぬ、又藤堂和泉守殿をも御及傷の様子よてメツよ立上がり往かうと  
する、一刀の鎧を押へて「アイヤ久保田様、御控えされ、箕播磨守でござる」是れはそ  
の目附役の箕播磨守殿でござります 佐「イヤ、是れは眞氏、何の御用でござって御喚留り  
さざる」播「左れば、唯今貴方の御言葉が御聲高でござつたゆゑ將軍家よりの御尋ねで  
ござります、以來は慎んで、御話さされて然るべし」佐「エ……されば安藝守が斯くく申  
し、藤堂和泉守が斯様く嘲弄致せしゆえ……」と、上手へ往かうとするのを鎧を押へて放

さぬのは同時よメツと立つと淺野内匠頭の二の振舞ひ、及傷を致さんよ測り難しと云ふの  
で、御目附の箕播磨守が一刀の鎧を押へたのは感服するものでござります、残らず御下がり  
さすつたところで漸々小刀の鎧を放す、此方は佐竹佐兵衛佐殿御所を御下りよさりました、  
た、  
時よ御供頭の篠田彌右衛門と云人、この諸侯の御供頭と云ふ役は骨の折れた役でございま  
す、今ドーンと諸侯方が御立ちのときよ大分先きを争つて御退出よさつたから何よか殿中  
よて事がありはせぬかと心配して居るところへ遅れて左兵衛佐殿が顔色を變へて「彌右  
衛門急げ」と言つて乗物へ移つたのは尋常の様子ではさいと悟つたそれだから供頭は骨が  
折れます 佐「ア、彌右衛門、安藝守よ急用あるよ依つて後を慕ふて参らねばならぬ、急  
いで安藝安の乗物へ乗附けろ」彌「心得ましてござります」  
彌右衛門は心中よて扱ては藝州様と何か殿中よて争争がさつたと見える、是れは藝州様の  
御供方へ乗附けては行かぬかと思ふゆゑ 彌「御上が安藝守様よ御用があるよの仰せゆゑ御  
駕籠の者早めて」云ひながら指先を斯うヒョイと後へ曲げて殿様は御駕籠よ乗つて居て御

惣籠の屋根の上でヒヨイと指を曲げたから一向御存知はあり、御六尺の内は頭がござ  
 います、棒頭はハナナ指の先を曲げたのは急いではあらぬと云ふ御知らせあらんと思ふか  
 ら一つ所をバツタバツタ、バツタバツタとやつて居る、其の内は櫻田の御見附を潜り隠  
 關を真ツ直ぐは蕪州様は御屋敷へ参つたからモウ見せせぬ最早蕪州様の御屋敷へ御歸へ  
 りよさつたと思ふから 彌「霞ヶ關の御屋敷へ……」 佐「イヤ〜屋敷へ往くより及ばぬ、  
 然らば藤堂和泉守も用があるから急げ」 彌「心得ました」と又藤堂様の後をバツタバツタ、  
 バツタバツタとやつて居る日の暮前より参りして三味線堀御屋敷へ御歸りよある、  
 御門裏入文字は開く、殿様の御駕籠から御立出でよあり供頭篠田彌右衛門の方をバツタと  
 御睨みおされてオーツと奥へ御出でよさつた、  
 奥へ通ると今年七十餘歳、勝手詰の眞壁掃部之介罷出で 掃「月並の御登城溜りさく相済み  
 恐悦至極よ存じ奉ります」と兩度申上げたが殿様の御挨拶もさく、滿面眞朱の如く眼  
 中血走り渡つて居る、一体御性質が御病性の烈しい御方、ドウも大名と云ふもの我儘育  
 ちで少しのことでも堪忍辛抱が出来ないで下方のことさたり一向御存じがあら、當今ハ學

習院と云ふものがあつて其處で各國の學問を御修業するにますから今の御皇族方や御  
 華族方の誠は世事を能う御存知、左ればよや此の度の日清戦争も不都合さく一歩も下ら  
 ず御勝利とありましたから、誠は能う下方のことさとも御辨へ遊ばすやうなせぬければ相成  
 りませぬ、  
 佐「掃部、佐竹の武士道の廣つたぞ」 掃「是れハ事新らしき御言葉承りります、何故佐竹の  
 武士道が廣つたぞの御意召さる」 佐「今日國産の秋冬の話に致せし處、安藝守が斯く〜  
 のことを言つて我を嘲弄いたし大勢の中よて辱めた、然るよ依つて霞ヶ關へ人數を向け有  
 無存亡の一戦よ及び左兵衛の一命を抛つ了簡である」 掃「掃部之介ハ之を聞いて茫然と致し、  
 時何の言葉もさく殿の御顔を打見守つて居りましたが、容儀を改め席を進み 掃「斯ハ何の  
 御一言よ候ぞや」 蕪州様の御言葉ハ貴方様の爲めよ仰つしやつた御言葉、それを貴方様  
 が御病性どの申しさから前後の御考へもさく兵を向け安藝守様を討つて私ハ生命を捨つると  
 ハ誠は貴方様の御言葉ハよも御本性どの存じ申さず、泰平の今日干戈を動かさせハ無論其の  
 家の改易、其の身も切腹、承られハ高の知れたる國産の秋冬の大さ小さいの御論其の位

のことにて人数を御差出し遊ばすと云ふやうなことで行々のところ覺束あし、サア眞壁掃部之介が白髪首を御打ちさるるか、左きく御人数を繰出して安藤守様を討ち御無念を御晴らしさるること御止まりあつて然るべし……」と御意見及んだが、佐「ドウあつても安藤守へ人数を差向けねばならぬ」と掃部之介を追拂ひムックと立って御家來を集め、藤州公の御屋敷へ御向ひさうらうとする御勢ひのとき横合で「エヘン」と冷笑した、怒って居るところを冷笑したから堪らぬ、佐「何奴あるが、嘲弄笑ひを致したの……」席を進んで「嘲弄笑を致したの私でございませう」と云ふ者あり、之の別人あらず名川采女と云ふ御家來、日常多氣入りの采女が嘲弄笑ひを致したから、佐「汝、何故又嘲弄に及びしぞ」采「左様の、主公は常々淺野内匠頭の刃傷の狼狽者だと仰ツしやつたでございませぬか、是れは吉良上野介も度々手違ひさせられ、其の上は武士の面上を打たれて已むを得ざるの刃傷、主君のこの高の知れたる國産の秋冬、其の大小の論から致して藤州様へ御人数を向けること今眞壁殿が仰ツしやる通りよも御本性でいあらせられたいと思ふはやのこと、手前の考へで、秋冬の季節を幸ひ御願表から秋冬を取寄せ御同席へ御

國表へ御歸りの御振舞ひと仰ツしやつて其の秋冬の御料理を差上げ御同席へ主君の御潔白を御知らせされ其席上は於て私が藤堂様と安藤守様を罵るでございませうから其の節飛掛つて私を御手打ち遊ばせ」佐「……」采「左候へ、主君の潔白も表われ、御無念も晴れ、御家の萬々長久、先づ私の考がへで、此の策略が至極御宜しいかと存じます、然るも依つてそれまで采女の生命は采女御預け下され、當日より美事御切り下し置かれまするやうよ……」と自若として騒がぬところの采女が様子、左兵衛佐殿も益々怒氣が鎮まつて采女の計策を任せ、國産の秋冬を取寄せ料理の中に加へ、御同席も見せるの手續の語を續いで言上いたしました、

扱て殿様より采女の申上げたること悉く御意に入りて御怒りも鎮まり、萬事御任せ相成りましたるゆゑ御國許へ最上第一番の大きい秋冬を早々差し送るやうに申し遣かりました、折柄秋冬時でございませうと依つて郡奉行平本茂助と云ふ人が段段手分けを致しまして秋

冬の餘索を致すと、檢谷と云ふ御領分内は大層大きな款冬がござります、と云のハ新羅入  
 橋以來の御名家でござりまするゆゑ、斯るときより不思議な款冬が生ずるものかして今ま  
 で斯る大きな款冬を見たことなきいと云ふほどの珍らしい款冬があつた、そこで御國表よ  
 り籠長持でござりまして、晝夜を厭はず御差立もする、  
 右の款冬が着いたしましたることゆゑ左兵衛佐殿より大い喜び、係役の采女も於ても是れ  
 から充分であると早速料理の支度及びびます、其の頭佐竹の料理人の鈴木半兵衛と云ふ人  
 でござります、總てその大名衆の料理と申しするもの銀の眞箸を用ゐて湯肴に手を  
 附けぬと云ふのが是れが料理人の方の心得、市中の料理といひまして湯皿を取るも銀  
 の眞箸刺身を取るも銀の眞箸でござります、手練といひながら眞箸さ入りする位  
 之れを殿様料理と申します、充分な手當が調ひましたことゆゑ、當今さらば招待状と云  
 ふものを以て浮同席方へオツと浮出立の浮懸應、一献差上げたいと依つて三味線堀佐屋  
 敷へ何時より浮來臨を乞ふことを申入れました、  
 時間違はず追々繰込みます其のとき松平安蔵守様と藤堂和泉守様の行くまいと仰ッしやん

た、此の行かぬと仰ッしやるのハ浮尤もそれを細川様、阿州様、仙臺様等が段々浮意見  
 及んで、貴方と佐竹殿とは親身の伯父甥、貴方が佐竹殿の爲めを思ふところより仰ッしや  
 ったのを浮年が若いゆゑ浮立腹、ダガ其の邊のところハ我々共が能く佐竹殿へ申附けて決  
 して不都合の仕つらぬ推して浮同道ささい、又藤堂様へも其の通り申しまして浮同席様が  
 皆さ浮同道ささいまして三味線堀へ浮繰込み相成り是れより種々の料理が出ました、  
 この國守方の交際と云ふものハ通例ハ二汁五菜と申して吸物が二汁通り、御肴が五通り  
 出る、ところが此の度の料理ハ二十五萬石を捨てるか拾ふかと云ふ浮沈興廢の料理で  
 ござりますから三菜十一菜出ました、此の三汁十一菜の上が傳奏料理七五三と申して是れ  
 が料理の止りでござります、  
 扱て愈々當日の御席順もオツと御列びます、御大名方が御大名のところへ御應招も  
 する節は公儀の御醫師方の御同道さるの法でござります、その御興醫が附いて参ると  
 云ふのは何か間違ひでもあつたとき御興醫がイヤ／＼さうではあり、と御食の御解解が  
 ござります、それで御醫師一名御同道も参ります、それもナヨツと御一人か御二人位のと

百 六 の 妃 姐

後七十四

きよは御醫師方は参りませぬけれども新う云ふ御料理のことは必ず御醫師が一名づゝ御立  
 會ふあります。實に宏大な料理組でございますから、御上席の仙臺様が御隣席の細川  
 様も御向ひあはれて、仙「熊本殿、熊本殿」「熊」……「仙」先づ諸侯の交際を云ふものは  
 二汁五菜、然るも今日の料理組は三汁十一菜、ユリヤ法も過ぎたる料理の結構、以來精う  
 云ふことと成行きますれば又々迷惑いたする者もござらうから、是れり一洗して矢張り舊  
 どの二汁五菜が宜しいではござらぬか、と仰しおると細川様が「イヤ、仙臺公の御旨  
 棄るも似合はず、天下の諸侯方の交際は以來三汁十一菜が宜しいでござらう」と云ふのは  
 細川様は九州武夫で恐ろしい家風でござりますから、コレ三汁十一菜が宜からうと仰し  
 やつた、

其の内は佐竹の別家秋田新田壹萬石佐竹管岐守、俗に之れを小佐竹と云ふ、此の御方が始  
 終御接待をして居りましたが、改めまして其處へ兩手を突か、伊「エー、唯今主人佐兵衛御  
 挨拶を申上げます併し唯今御同席様へ御覽入れまするのは國産のこととござりまするゆ  
 え、澤山入仕入れ之れあり候へば御意も適ひましたら、奥様方若様へ伊土産御付られます



れば、難有き仕合よございませす」躡て上席の仙臺様が箸を擧げて召上つて見ると布目を入れし大根の合せかと思へば大根でもおし上の鞠のソボロを掛け少しく苦味はあるが結構き味汁を含んで居る實は露を含めるやうだと云ふのは是れでございませうか、其の美味しいこと言語又述べ難い、何れ是りや國産ものであらうか何であらう、と頻り御考へさせられ御隣席の細川様は御向ひをされて仙一熊本殿は何んぞ云ふものでござらう」「細川、手前も考へて居るところ、食へども味を知らず何でござらうか藤堂殿の万事下方のことと御存知だがコリヤ何で……」「和」手前の考へでは九太の小口切……」「又悪口を仰ッしやる、悪るゝ氣で言ふのではございませぬが、ドツも願作輕口で折々失策がある、餘りハラ／＼喋舌ると其の内より過誤がございませぬえ、要用の他口は利かぬが宜うございませす、此のとき主人左兵衛佐殿が其處へ出て参りまして今日の御禮を申し上げ、佐「御意入りませしたさらば澤山御土産を仰付けられるやうよ……」「と言つて下がる、少しく経つて静かに襖を開いて出でたる年の頃三十五六歳の古今の美男、白襟麻上下を着用いたして居る、モウ自分は切腹の覺悟ゆる其處へ兩手を突いて「手前は左兵衛の家來、當日の料理係名川

采女と申する者、今日の料理組は御意に適ひましたや適ひませぬや御次は於て心配いたし罷居りました、唯今珍覽を入れましたるの國産の秋田秋冬でございませす、所變れば品變る、何と大きな秋冬ではございませぬか、それを主人左兵衛殿中にて御話し申せしときよ、左様も秋冬はありませぬ、偽はり飾ると仰ッしやツた御方もあるし、又大きいもの、前での總ての物が小さく見える、奈良の大佛の前へ棄兒があつたから拾ひ取ると旅僧の登寢であつたとか、さて浮諸侯方より浮似合ひ遊ばされぬ御一言……」「トイヤ當ッ擦るは當ッ擦るの、生命を抛ッて當ッ擦るのでございませすから堪らぬ、藝州様はハ、ア如何サヤ是は先日の無念暗と赤い顔をして居る、藤堂和泉守様は於てハ、ハ、ア秋冬の遺趣返し苦やしいとだ、と仰やる」此のとき左兵衛佐殿は一刀をスラリと抜放し、佐「浮同席方、家來の無禮……」「と早くも飛込で切らうとするのを細川越中守殿が「アイヤ左兵衛佐殿、浮心得違ひを召さるナ」と止める、浮同席も残らず立って「先づ／＼」と小刀をば取上げて別家伊賀守殿へ渡す、ア細川様は仙臺様と浮言葉を揃へて「唯今の同席一同にて此の名川と云ふ者を寝め居りましたが、今日の料理組、趣向萬事名川采女の計ひと相見ねる、實は先

日此國産の款冬の浮話、ドウも手前共始め偽り飾ると存せしところ實は何ともかども中  
うやうも之れなく實際を見ずして無い〜と云ふ言を發する、因か至極、公より良し  
家察を浮持ちあされた、決して生命を絶つところでのござらぬ、却つて浮褒美を下され  
こそ相當と手前共は存する、

元々伯父上様藤堂様浮兩人とも昔もモウ浮仲の宜いことでもござりますから、一時左兵衛  
佐殿も御心が直つて、サア何時も變らず打解けての浮酒宴、一同浮謡曲を唄つて別段  
浮意入り丁度燈火が點きまして浮歸館も相成りました、

後で左兵衛佐殿は采女を召されて、一扱て采女、汝の計ひは依つて家も僕も附かず予が一  
命も拘はらずして耻辱を雪ぎ家を固めし汝が働さあり、然るも依つて是れを取らせる  
と言ひながら既も藝州公へ切附けやうと思召した吉長の小刀を下され、殊も五百石と云ふ  
浮褒美を下されて小性頭仰付けられました、

サア名川采女は忽ち立身をいたしましたことゆゑ、其の喜悅大方ならず立歸りまして母  
上の居間へ参り、一扱て母上さん、實は今少は貴女様の浮顔を見納めと遺書を手文庫の中

に納れ置きましたたが浮前も於て云々斯々、一命が助かるのみならず五百石の浮祿を賜り、  
斯の如き浮褒美を頂戴いたして近臣頭取役を仰付けられました、母上様浮褒び下さります  
やう……」と云つたら定めし母親は喜ぶであらうと思ひのほか、アツと言つて其場も倒れ、  
ヨ、とばかり泣き出されました、采女は案も相違して其の悲嘆一ト方ならざれば何故す  
らんど思ひながら母親の手を拉り勢は引越し、一扱て母上様も何ぞ浮嘆さあされて新  
くの浮落涙……」母「イヤ、年を取ると根氣が盡きて嬉れしりも付け、悲しりも付け先だつ  
ものゝ涙、是れが世も謂ふ喜び涙と言ふのであるゆゑ……」と云ふを采女は打消して「イ  
ヤ、母上様それへ行かせぬ、浮隠し下さるナ、喜びの涙と、憂の涙と、涙の出やうが違  
はうかと云ふ私の考へもござります、貴方の今全く浮嘆さの餘りの浮落涙と存じます」と  
言はれて母親は涙を拂ひ、膝立て直して采女に向ひ、母「如何も申譯も之れなく、是れ  
もい深き仔細のあること今まで親と言ひ子と言つて互も親子の體を盡せしが、今日の改め  
て私が貴方をば上座も直し、家察の身を以て話を致します」と言ひながら何思ひけん采  
女の手を拉り上座も直し遙か下つて豫て納ひ置きたる用篋筒の抽斗より赤地錦の袱も包み



し品を取出して采女の前へ差出し「母、これを改め下さるやうな……」と云ふ改つたる母の一言も、采女は唯茫然と致して夢も夢見る心地せしけれども是れより仔細ぞあらう、固より致して物も騒がぬ氣象あれば静かき赤地錦の袂の中より取出して見れば佐竹の定紋、丸扇の御紋散し九寸五分の短刀、中身は相州の箱を拂ひ住人五郎入道正宗、目抜縁頭は最上の金、采女も於きましては「如何も母上、是れは御當家御定紋、此の書附の之れあるはドウ云ふ仔細でございまするか、今貴方が私の前へ此の短刀を御差出しなされて仔細があるぞ仰せられましたのは……」此のとき老婆は静かき話し出すやう「扱て外ではございませぬが貴方が私を全くの母と召し、母上様母上様と陰日向さく御奉行下さるのは私身も取り、誠に難有うございしますが私は何を隠さう八百屋の女房勝と申する漢まじき者でございませぬ、貴方の母上様と云ふものは佐竹様御勘定方を勤めたる名川文作と云ふ人の御娘御で、采女殿と云つて御殿へ上つて居りました、然るは佐竹七代目の殿として修理大夫實公、此の御方は古今の美男で久保田業平、佐竹業平とまで言はれた御方ゆゑ、將軍家の姫君様が御見染め遊ばされ強て佐竹へ縁附きたいと父上様へ御迫りゆゑ、あまた方でもこ

あまた方でも其情は變りはさく、御愛女のことゆゑ、公儀から佐竹へ御興入れなかつて北の御住様と申せしは此の御方、此の御方の御前名は千代姫様と申上げまして至つて御縁頭が御宜しくさい、殿は御美男、奥方様は大に御縁頭相違を致して居るゆゑ、御自身の外は御附の女中でも殿の御側は寄せぬやうに致して居る、然るどころ豈圖らんや御庭に於て御女中采女殿も御手が附きました、尤も是れは先殿様御配偶、當時御隠居御召使の采女殿、それへ御花見の折柄も御庭の隅にて御手が付き御持ち申上げたのが貴方でございませぬ、其の貴方の母上采女殿が懐妊して殿様が御國表へ御出立の後で北の御住様が之れを御聞込みなされ、御嫉妬心よりして父文作殿の僅かきことを咎め御婦人の御身を持ちながら御殿に於て文作殿を御手打ち、けれども公儀より入らせられたる姫君様ゆゑ如何とも詮方なく其の儘死骸は取片附けなりました、それで御家老梅津半右衛門殿が、此の屋敷へ差置いては爲りぬと云ふので橋場總泉寺淨菩提所へ御隠し申せし母上様、ア母上様は總泉寺に忍び居りましたところ月満ち渡つて御生れなされたのが貴方様、産後が悪くて母上様は總泉寺にて御死去、其のとき私は御門前八百屋として居りました虎右衛門の女房

勝、其の節丁度私も出産を致して其の子が亡くなりました、然るところ總泉寺の方丈より何と勝や乳が無くて甚だ困るから此の子を其方の手で育つては呉れまいかと夜分内々納所を以ての謬言葉は委細承知と言つて勝寺より赤兒の泣聲は不都合ゆゑ八百屋の家へ引取り私の手で貴方を育てましたから全く貴方は私を母と思召しませう、十一歳のときも總泉寺の寺小姓として讀み書きの謬稽古、十三歳のときも若殿様の謬相手旁々三味線堀謬館へ罷越しましたが今の殿様は北の謬殿の謬實子にて貴方の爲めには實の弟、腹變りとは言ひながら、腹は借りもの殿の謬胤、世が世であれば佐竹の謬定紋を附けては通行するべき身柄でありながら、現在弟、謬様の代身より立たうとせよと思召して僅か五百石の謬加増、此小剣と、近臣頭取役を仰付けられたのを謬嬉しがり、知らぬことにて母も兩手を突いて今仰つしやつた其の謬顔を見て涙を流さずには居られませぬ、アア情けあること全く二十餘萬石の殿様もあるべき身の上あるは謬合弟、當殿様が佐竹の謬定紋を謬附け遊ばしては登城遊ばすのを謬見上げ申する度毎に胸一杯草葉の陰の母上様も憫ぞや謬無念と思召すであらうと思ひ、それで私は涙を流しました、申上げるは今が始めて、私は八百屋の女房

勝と云ふ者でございまして全くの母上様は采女候と申して總泉寺で謬死去」とと餘計なことをペラペラペラ〜聞いて、扱て我は佐竹七代目修理太夫の長男ありしか、然らば殿様の品を添へて願出たならば然るべき身分の者も成れやうが、今更ら言ふのも詮なきこと、先代戸村丈作が死するるときと云ひ、我が成長も家中にて知らぬ者はあるまい、ア、情けあや僅かお祿を貰つて小姓より今小姓頭取もあれほど高の知れたる佐竹の陪臣、何卒いたして別家一萬石佐竹の苗字を繼いで登城を致し、冥途の母上様を喜ばせたいものだ、とガラリと氣が變はる、實は源三位頼政の詠歌の如く、慎むべし慎むべし、遂に名川采女一時の心得違ひよりして末代は汚名を貽すに至るの一條、先づ是れが佐竹騷亂の發端でござい

扱て出羽國秋田郡久保田の城主二十餘萬石佐竹佐兵衛佐義政公、或日櫻狩の謬遠乗、抑々此の櫻狩の遠乗と云ふものは足利三代義滿公の謬代より始まりまして今以ちまして

術の方では名代のものでございませう京都室町の所にて信州松本の住人小笠原信濃守定宗を召されて「如何に信濃、大和國の吉野の櫻花は今日を盛りと咲居るであらう櫻花を一枝手折り來れ」と仰せられますゆゑ、信濃守は「ハッ」と両手を突き「諸を致し、場所を下りまして己れが家立歸りました、小笠原は馬術指南番、是れ小笠原流の流祖あり、然るに依つて上預りの馬四十八頭ございませう、信濃守は何の馬もて大和國の吉野へ参り、櫻花を折取り來らうかと考へながら彼の馬、此の馬と厩舎を一々數へながら拾めて居ります、其の中は南部九の戸立の駿馬として八千代と云ふ馬がございませう、此の馬は古今の名馬として兩眼の光も明星の如く、鬃は飽くまでも縮み上り、左右の耳は奥竹を削いだる如く、此馬あらば大和國吉野へ乗附け、美事櫻花を折取つて立歸り、義満將軍へ差上げ「賞美を受けるであらう、と右の八千代は皆具をメツカリ据附けまして既に乗出さうとするとさよと縁を切つて居りました厩舎仲間孫三郎と云ふ者が「傍前様」信「何ぢや」孫「此の八千代召されて今日は何方へ出でませうませう、信「ア、……此馬に乗つて大和國吉野へ参り櫻花を折取つて室町の所へ

持參をする」孫「ハ、ハ、恐れながら將軍家御馬術指南番の傍前よ對して下郎が斯く申上げるは甚だ恐入り候へど、存じて居ながら申上げぬのも不忠の至り、貴方が召されやうと云ふ八千代は馬も大さし、先づチョツと見せしたところでは池月磨墨も此馬よは及ぶまいかと云ふほどの馬ではございませうが、鼻のどこかノ手を觸して御遊ばせ、呼吸が弱ら、是れが世に謂ふ小息でございませう、此の十三番目の御小屋も驚きございませう小櫻と申する馬は遙か馬は小さうございまして羸弱しやうと見えませうが、是れで大息でございませう、その毎日馬を扱ひ居りますゆゑ、上の御存知ならずしやりますまいか下郎は其の係りでございませうから能う存じ居ります、人間で申しますれば大さき男でも心の弱い者があり、小さき馬でも心の強い者がございませう、大息の馬は疲れませぬが、小息の馬は疲れました終りの眼眩いて倒れますもの、万一上の召されました八千代が途中で前足を折つて物の役立たざる其のときよ小笠原家の御耻辱それゆゑも御叱責を願ひます斯くの申上げませう」

信濃守の「一々之れを聞いて、信「成るはど、併し手が眼もて此の八千代の古今の駿足と存

するから、下郎の指揮に依つて信濃が馬を變へたと云ふことが万一知れやうものあらば小笠原の是れほどの恥辱はあり、然るに依つて主従馬の頭を揃へて大和國吉野へ参り櫻花の枝を折取つて室町まで美事乗返すか乗返さぬか、汝は是れある小櫻も乗れ、主従馬の頭を揃へて乗つ立て乗つ立て大和へ参り、室町へ歸る途中にて八千代が前足を折つて、物の役も立たざれば其方への褒美を取らせるし、又首尾能う室町の所へ此の馬が乗返せば下郎の分際として主も對して無禮の一言、其の場を去らず手打ちにするがドウぢや」孫「エー、それい確かに此の八千代が途中で前足を折り、物の役も立たざいと知つて申上げる以上の天下の大先生小笠原信濃守様の御馬術、何事もなく乗返しにあれば下郎の無禮を御各りの上の手打ち遊ばすの御尤もの儀、其の代り美事私の言を通り此の馬が途中で前足を折り、物の役も立たざるとさよりの澤山の御強請ごとの致しませぬが、御酒を一升願ひたうございます、何んと御前生命と一升で何方が貴うございます、雨が降る降らぬので善交を賭けるのと賭事が違ひます、サア御前、シツカリ御乗り遊ばせ、貴方の方の酒が一升、下郎の方の細首が飛ぶので、併し手前から申上げるの恐入りますが野夫の中にも

の物、三歳兒は聞いて淺瀬を渡れの聲、下郎ゆゑ何も知らぬと思召すのナット御前様御論が與うございます」信「エ、その高言の後よし、兎も角無禮の汝、眼も物見せて呉れるから左様と思へよ」と信濃守殿の満面も怒色を表し、ヒラリツと八千代も打降る、此方の廣舎仲間係三郎、細看板も梵天帶、淺黄の手拭で捻り鉢巻をし、ヒラリツと小櫻も打降り、竹鞭を取つて「孫「サア御前様、酒と生命の一件です」」信濃守も於ての聲を揚げ、眞一文字も乗出す、孫三郎も續いて乗出したが、信濃守よりの半町位づゝ遅れる、信濃守の馬の上にて孫三、イヤ己れの己れの大言も似るやらす其の醜態は何とぞだ、此處へ参れ、旨い甘酒があるぞ」孫「御前様、此處まで連れて来て甘酒進上あんで能く貴方私を嘲弄遊ばす、今も私が此の意趣返しをしますよ」ソレツ……」と云ふのでトツ／＼トツ／＼と乗出します、モウ大和國吉野へ近づかうと云ふ時分、主従馬の頭を揃へて乗立って往く、麴て大和國吉野藏王堂、一ト目千本の櫻花、それを折取り乗返さうと云ふとさよ八千代と云ふ馬の顔りもせー／＼せー／＼呼吸を致しました全身もビッシヨリ汗を發いて居る、孫三郎の腹

て腰に差し来りし馬柄杓にて水を汲取りて口中の涎液を取り、汗を拭き取って充分な馬を養ひ、臆て折取つたる櫻花を何時の間も拵へて来たか青竹の節を挿し底だけ節を残し置き、背負ふやうな細引を天地に縛り付けて迂らぬやうな節を止め、中々水を容れるのだが充分な容れれば煽る拍子に水が溢れますから七分目容れまして、それへ櫻花を差ししましたゆゑ乗返すまで櫻花の枯れを致しませぬ、それがその櫻符の法でございます、其の心得と云ふもので、之れを源太蔵の梅と云ふ其の形も似て櫻花を背負ひましたから荒ながら戦場の差物の如く「サア彦前、是れからですよ」「トックトック」と乗出し互に酔い調子をとり、それより疾驅にあり、ハヨーハヨーと眞一文字に乗立って参ります、今度の孫三郎の方が半町位づつ先きと駆抜け「孫三郎様、此の所も良い甘酒がござりますから早く来て召上れ」「信ア、……此奴め此奴め、此處は差置いて甘酒進上の意趣返しか、宜しい何の下郎も負けようか」と乗って立って来ると、室町彦前の半里ばかり手前まで来ると案も違はず八千代と云ふ馬が足を折つた、信濃守の流石は彦指南さるはゆゑ馬よりヒラ

ツと飛び下りたが、モウ八千代の其の儘で乗って行けませぬ「孫三郎それ彦前様、一升も有附きました、第一貴方の櫻花を取って彦前様遊ばせ、其様も花が散って仕舞つた丸棒の櫻花を將軍家への上げられますまい、サア下郎の櫻花なら將軍家へ上げられます」「と己れの背に差した櫻花を抜取って信濃守は渡た、其のとき信濃守の成るはど人の惚れかゝるものだ、身の賤しき下郎おれども其の馬術の進退のナカ／＼此の信濃が及ぶところもあらずと感心して孫三郎の乗り来つたる小櫻とヒナリと打跨り、室町の彦前へ参つて櫻花を將軍家へ差上げ、少しも隠さず下郎孫三郎のことを言上いたすと、義満公悉とく彦前感心遊ばして「早々それある下郎孫三郎とやらを此處へ喚べ」足利家の御家人主命は依つて孫三郎を迎ひ出る、

此方の孫三郎が八千代と云ふ馬を介抱さし、彦前へ罷越しませぬことゆゑ、足利家の御家人衆が主命を申聞けて御庭へ喚ばれました、是れ誠と義の徳と云ふもの、信濃守の陪臣で將軍家の彦前通りと云ふのも畢竟馬術が能く出来るゆゑ、左ればや凡百の藝道の解りあく稽古をせぬければありませぬもの、下郎ありと雖も馬術が優れ居りましたゆゑ遂に天下

の大名の列は御加へもありましたはどのことでもございませす。一段々孫三郎の身分も御尋ね  
 まする上総國富津の在、大坪村牧士孫三郎、  
 牧士と云ふもの彼の黒鍔伊家人と云ふ小身の伊家人がございませす、且つ公儀の御馬を扱  
 ひ居ります是れが、足利時代の牧士と云ふもので徳川家の時分は相成りましては何か事  
 の有るとも御帯刀をして出て、平生は百姓をして始終その馬の扱ひをして居るのが牧士で  
 ございませす、此の孫三郎の子供の中から鞍も鎧も鞍も何んにもございませぬ野駒で以て  
 馬は飛移り、鞍を掴んで乗ッ立て乗ッ立てから又或は落ち、又は道上がる、それ、稽古と  
 した馬術と尋常な鞍を置いて乗ッた稽古とて戰場までへ出ると大變遠ふそれゆゑは御庭前  
 へ於て彼馬を乗らせたところがスハラナイ馬術、信濃守は再び舌を捲いて驚いた、成る  
 ほど最前彼が言ふた通り野夫の中にも豪物の、そこで後は一萬石まで御取立もあり大坪  
 式部太輔兼土佐守入道道禪是れあり、是れをその御狩の遠乗と云ふ、  
 今日しも左兵衛佐殿は三月の中洗に致して總名港と稱へる所一面の櫻山がございませす、  
 其の櫻花御見物も主従十一名、駒の頭を揃へて乗立て乗ッ立ッて参る其のとき港本町の奥

田七兵衛と申する者の家へ御立寄りでございませす、  
 例の奥田の小町、後に入呼んで妃姐のお百、此のときは百合と云ふ名前、最と若々しく装  
 り立て腰高の茶臺の上へ結構ある茶碗を載せ、それへ御煎茶を汲入れて優美な兩手を突き  
 而して茶臺へ手を掛け恭しく之れを左兵衛佐殿へ差上げた時、左兵衛佐殿御年二十六歳  
 で古今の御美男既と佐竹の七不思議と言ッて御代々御美男で、別けて此の左兵衛佐義政公  
 は今業平とも云ふべきほどの御美男、七兵衛の養女百合を御覽さると年の頃は十九歳  
 か二十歳位は見え、色白く鼻筋通り、口元尋常、眼中涼やかよして髪は毛黒く房々を致し  
 愛嬌は宛あがら穢れるばかり、春月の雲を拂ふて出でたる如く、實は之れを指して御婿  
 宛の美人と云ふ小町衣通も一歩下からうと云ふほどの美人でございませして唯優美は顔赤ら  
 め首を低れて居るゆゑ、左兵衛佐殿は茫然と致して雲時百合を見惚れて御出でさされたが  
 左「七兵衛」七「ハッ……」左「此娘は其方が子か」七「エッ……御意もございませす、私の  
 實子は先年亡くありまして今般大坂表へ御藏屋敷の御用も付いて罷越しましたるときよ、  
 堂島も私の弟がございまして是れは米商を致して居ります、其の末の娘を貰ひ取り私の為

めは姪でござります、老爺老嫗が此の年とすり親身の子がござりませぬゆゑ、心細く存じ姪を貰ひ受けまして是れは婿を取り、初孫の顔を見て老を養へうと云ふ考へから大坂より連れ参りましてござりますが、名前は百合と申しまして當年十九歳と相成ります、是れは皆お百が眞實しやか又七兵衛と申したからそれを七兵衛は本統と思つて、左兵衛佐殿へ斯くは申上げたのでござります、左兵衛佐殿は於きましては側近く百合を召されて御茶をモウ一杯モウ一杯と十一杯も召上り實は湯氣も上がるほどで、其の日は心を殘して久保田御本丸へ御歸りもあり、其の後御遠乗と言つては七兵衛方へ御立寄り佛參と言つては七兵衛方へ御立寄りナカク御本丸より港までは餘ほどの道程でござりまするが下方で能く言ふ懸は思案の外とやら、毎日のやうに御立出でござりて七兵衛の許へ御立寄りもあり御酒宴等の御催しをわつて百合を御對手に御遊ばしては御歸りもある、ところがまだ御年が若いので今般加賀様より致して梅姫様と云ふ姫君様が御歸嫁と相成りませぬと云ふので、眞逆よりウも愛妾外婦を置く譯もあらず殊に百合が古今の美人ゆゑ家來の手前も何となく面目よく思召しけん、それが病の原因で唯今のところはトツと病

床に御就き遊ばし、幾ら御藥を召上つても何の効驗もござりませぬ、是れが世に謂ふところの物思ひの病、コリヤ男女に限りませぬ、兎も角百合の容姿が眼先もナラ附き、寝れば夢、起されば現、幻の如く書いてござりまするが、實に恐るべきは色情でござります、世に謂ふ是れが戀の病と云ふやうなことで一ト間も引籠つた切り御家來参る御會ひがあらぬほどのこと、臣等一同の心配一ト方ありますね、時又當年二十七歳として前申上げた名川采女、此の者密に御目通りを願ふ、御側去らすの御氣入りでござりまするゆゑ此の者には折々御會ひがある早速采女を御遊ばさせられて「左「采女何用ぢや」 采「恐れながら言上仕つります、上の御病氣は私は醫者ではござりませぬけれども、其病因を考へまして早速御全快と相成る藥がござりますることゆゑ是れを申上げやうと存じ御病中を推して御目通りを御願ひ申上げました 左「、予が病の原因を汝が悟り得て忽ちに病氣を癒す藥を考へたと、それはトウ云ふ藥ぢや、早速服みたいものぢやか」 采「他ではござりませぬが、御醫師方が申すのには上の御病氣は何とも名の附け方があいな御病氣、唯人は會ふのを御嫌ひあされて、晝夜御考へごとのみ遊ばさせられる

のは是れは下方で言ふ懸の病どか云ふやうなる病氣、平常御氣象御内輪で入らッしやアテ家來の前さへも少しく辱らひさざる貴方様ゆゑ、私の考へど云ふのは先日浮遊乗の御歸り掛け、奥田七兵衛方へ伊立寄り、其の節上の御給仕も出でたる七兵衛の娘百合、如何にも彼は美人でござる、それを貴方が御見染め遊ばさせられて彼を羨まじたいと云ふ思召はあれど、梅姫様と浮遊乗のこと、且つは家來の手前も何となく御辱らひがわッて浮遊乗の原因と考へましたと云ふ私の考へでござります、それゆゑ百合を御手許へ御喚び遊ばされまして、御寝間の浮遊を仰付けられたとか、御給仕をさせますとか云ふこととすれば御病氣浮全快と云ふのは如何でござりませう」

左兵衛佐殿之れを聞いてニッコリ笑ひながら起上り給ひ「左實は采女、其方察しの通り、ウと百合は寝間の御をさせたく思ふが其方の計ひにて御をさせられやうか」采女、それは何の難作もなきこと、早く采女を召されて、采女新く致せと仰せられますれば疾くも病氣もさられませぬ前、上の浮遊足も相成るべしでござります、早速七兵衛方へ罷越し百合と同道して参ります、と言ふを聞いて「左、食事持て」と仰ッしやう今まで浮遊事もせぬ

浮方が俄か十一杯召上り「左、風呂も参るから風呂の用意しろ」と正直も正直、愈々百合が浮遊をされると云ふこととあり、まだ参りもせぬ内よそこりあつた方もござ方も變らぬ情愛風呂へ這入ッて磨き上げ、充分化粧を致して香を焚き、萬事に心を懸けて百合の來るのを待つて居られます、

此方は名川采女が奥田七兵衛方へ罷越し七兵衛は對面を及んで、上のことを詳しく申聞けると七兵衛は大喜び元々出羽國酒田の沖の小島と云ふ所で船乗りをして居るときも助け來ッた婦人でござりますから此娘が上の御部屋様と参ッて御子様でも御持ち申上げ扱て御代取りと云ふときもされば奥田七兵衛は左團扇をこころではなき、兩團扇、一儀も及ばず致して妻ある者をも喚出し當人も其事を申聞けるゆゑ、其の喜ひ大方ならず、ツレ酒も香もと云ふので名川采女を馳走致し「七、サアナツとも早く上の浮遊病氣が御全快もあるのだから支度を致して名川様と浮遊一緒に浮遊中へ参るやうよ……」

扱て此の百合ある者は前々申上げます通り外面は如何にも優美かよ飾ッて居り猫を被る姿こそはなびなびさせぬ、狼の皮を被ッて居る、海に千年、河に千年、里に千年、三千年



の老功よ及んで殺生石の古跡を遺さうと云ふほどの婦人ゆゑ直ぐは是れから磨き装り、結  
構ある衣類を着用いたし、名川采女と同道して久保田の本丸へ乗込ひと云ふ、ア、恐るべ  
き一個の毒婦、是れが爲めは佐竹騒動を惹起すの根源、語を繼いで言上いたします。」

第八席

却説名川采女は七兵衛の養女百合を同道して久保田の本城へ参る途中矢橋と申す所がござ  
います、此處はナヨツとした割烹店、風呂屋、遊女屋などもございまして其の古へはナカ  
ナカ繁昌でございしましたが當節は如何でございませうや、其の頃は佐竹様御領分の矢橋と  
云つて久保田よりも罷越し、港の者も参つて遊興を致す地でございす、其の傍は處刑  
場がございまして是れを矢橋の處刑場と云ふ、其矢橋の割烹店へ上りまして、ナヨツと登  
食をど云ふので采女は供の者を待たせ置き割烹店の二階まで百合と二人で御酒を飲べます  
ア、此の采女と云ふ人も矢張佐竹の御血統で古今の美男、殿様の御美しいのど此の采女の  
美男といふ又少しく行くところが遠ふ、采女の方は丈がヌラリと致し如何にも凛々しくして  
好い男、殿様の極柔形奇麗な男、百合は淫婦でございすから采女の美男も内々心動

き居ります、酒は必ずや戀の取持ちをするもの、互に話し話される中よ好い交情もあつた  
して行々のことを申換はして殿様の御前へと同道いたす、御愛妾の御毒味はナト忠義過ぎ  
るア、そこで殿様の御前へ連れて参ると殿はモウ待ちよ待つて居たのでございすから、  
百合の妾を御覽さると、飛立つばかりの大喜こび、早速御側近くへ百合を召して俄かよ  
御酒宴を仰出される、斯うも人間は正直なものであるか、今までは御食事も遊ばされず、御酒の  
匂も嗅がず、髪髻ボウ〜として居らせられたのが、俄かよ御風呂よ召し、御月代を剃り  
装り磨いて百合の來るのを待ち是れより百合を御寵愛、色情の取持ちは何より可愛いと  
云ふ譬喩の通り、殿様は名川采女よ御夜美を下し置かれる、悪むべき奴は采女、恐るべ  
きもの毒婦、モウ殿様の御機嫌を伺はさい前よ采女とナヤンと打合せをして、是れから  
殿様の御心よ適ふやうよと、そこはエライ毒婦のことゆゑ柔かよ高ぶ附かぬおいらの位で  
はさいが、味淋澤山よ土佐の古節でコツテリと旨く奏立つて差上げたることゆゑ、世間知  
らすの大名のことでございすから忽ちの間よ心神が淡けて仕舞ひ、風が吹いても百合、  
雨が降つても百合、百合〜百合〜と晝夜モウ御側を離さず御寵愛、さうユリ〜ユリ

く揺ッては地獄から大概往ッて仕舞ふ、百合は折々采女のことを旨く取持つが取持ちやうも依ッては何んば世間のことを御存知あらッしやらぬ殿様でもハテ變だナ、と云ふ御考へがあらうさうするど行々は良人と思ふほどの采女の爲めにあるまいと思ふから、そこを旨く絞釣ッて居るも依ッて大層采女は立身登庸も及んで院内鑛山奉行と出ました、此の係りを仰付けられ名前を改めて鑛山奉行名川丈左衛門と成りました、固より器量優れし男ゆゑ町人共は充分な手當をし、さうして金堀人足等も先の奉行とは大違ひ、是れ又手當を充分に致ししますることゆゑ、下郎と云ふものは先づ五分遣るものは十分遣ッて御覽じろ、忽ち其の人を慕ひ、イヤ類りも善しく言ふ、ところが五分のものを二分五厘遣ッて御覽じろ、悪く言ふの言はさいのぢやアあり、何を吩咐けても快く用は致しませぬ、それゆゑ車廻はすの油も限り、人を廻はすのナランヨも限ると云ふことを申しすが總て此の黄金湯の力でございませぬければ何事も行させぬもの、黄金乏しければ交り深からずと云ふ通り兎も角金の世の中でございます時と殿様御参勤、御氣入りの名川采女でございしますも依ッて今般役換をして江戸表中老三屋敷に御参りなされた、莫大もさう立身お

百合は御國も留まらず、又院内鑛山奉行の後役は前名戸塚四郎三郎、當時父の名前を繼いで戸塚九郎兵衛、此の人が鑛山奉行を勤める、是れ亦大層評判が宜しい、前の御好まして人氣を博り、此人の眞實勢はり勢はり使ふ、そこで此の名川、戸塚の兩名の爲めは金はドン／＼湧き出で、仙北河の前後に新田を開いた尤も是れの名川と云ふ者が此處を新うすれ、新田一万石の御盆もあると云ふ見込を付け戸塚に其のことを詳しく認めて渡す、又その戸塚九郎兵衛も器量人ゆゑ又々それと改正を致して茲に一万石の新田を開きました、仙北領新田一万石と云ふのは是れでございします、それゆゑも名川が評判の良いとこの御説が今以て土地の口癖も折々子供達が唄ひます、

白銀と黄金の花の出羽の國何れ方らの名川九郎兵衛扱て此方は左兵衛佐義政公、江戸表へ御参込みも相成ります、然るところ其の頭殿中の流行もので大廣間詰、雁の間詰、菊の間詰、柳の間詰、其の他大小に限らず御諸侯方が御詰めの折柄も御互も其の小さい器も召上る物を少々づゝ入れまして、御退屈でございしますも依ッて御菓子其の他の物を御取りを致します、其の中も勝劣

後百

があつて今日は誰が勝ちだ、イヤ是れは趣向である、イヤ今日はドウも誰様も勝たれた、負けたと云ふことが其の頃の流行物で又その下方の話などを致して互に詰所の鬱屈を晴されます、それゆゑ自然とその家來から聞取つて御話をなさるので吉原町のことだの演劇のことだの、食物のこと、割烹店の善悪まで思ひきや伊諸侯方もあるまじきことを言ひ出す、我々共は面白くも可笑しくもございませぬが耳珍らしいことを聞いて伊諸侯方が伊喜びなさる、今まで伊家來衆が誰も申上げないことゆゑそれが大層伊意入り入ります、それゆゑ左兵衛佐殿が或るとき名川丈左衛門を召されて 左「丈左衛門」丈「へー」左「其方は懶發よして萬事世事を賢いが、予はトントこの下方のことは存せぬ、マ、知らぬは諸侯の常態ぢやが當時はこの同席の者が退屈であるゆゑ下方の話をしたる或は菓子煎餅の類、其の他種々あるものを互に取合つて思はず興入ることがある、何んと同席の談話ばかり聞いて居て唯笑つて居るのみでは甚だ智慧の無いやうと思はれる、珍らしいことを見出したる聞出したらそれを話し且つは結構あるものを求めて其の席に披露を致しおちを取らうと伊存するのぢやが丈左衛門其方の考へは如何であらう……演劇の談話からは折々出るが、

後百一

忍んでその演劇見物は相成るまいかな」丈「それは行かせぬ、伊諸侯様は演劇を……」  
 らせられまするものではございませぬ、彼れは河原非人と言つて甚だ卑しきもの……」  
 當時の伊昔と一變して市川團圓を……敵討職、勲善懲惡を形よして見せると云ふ、コリヤ尤もの儀でございませぬ  
 丈「それが爲め能役者と云ふものを御置さざる狂言師と申しまして婦人の手踊きを致しまする者が始終御屏敷に御出入りをして居ります、何も演劇を見なければ諸侯の御恥辱と云ふことと毛頭でございませぬ、コリヤ御止まりあつて然るべし……」左「……然らば相撲の見物の……」丈「是れとても相撲場も御立越しの甚だ汚宜しくありませぬ、汚地へ相撲と云ふものがございませぬから、それを召され、且つ御家來の中にて替力隠れし者を吐出して御庭に於て是れを取らせましたあらば又一興でございませぬから伊庭相撲を伊庭遊ばして然るべし存じませぬ」左「それが行かぬならば吉原町……」丈「コリヤ尙ほ行かせぬ」左「それでも松平陸奥守の高尾を落籍すし、輪原式部少輔も吉原町へ罷越したる前例話があるが行かぬかな」丈「コリヤドウも尙伊意入るうございませぬそれが爲に伊庭遊の

甚だ浮不首尾、其科條として仙臺堀と云ふものが現ふと云ふ事なるは、左衛門か愉快を致して同席を驚かして遣りたいたいのぢやナ」貴方が浮遊遊としての浮話柄から、是れとても臣等が浮徳通の申しませぬが河煙火の浮遊遊の如何でございませぬ、其の御趣向等、又此の丈左衛門から愚考を申し上げます……折柄河開き兩國の煙火を浮遊遊させ、一つ私趣向がございませぬゆゑ、是れは萬事丈左衛門任せを願ひたうございませぬ」左衛門「……宜しい、萬事行届いた其方ゆゑコリヤ又一段と面白き趣向もあらう、デハ煙火見物と致さう」是れがッロ〜殿を浮不行動又任立てるの根拠、收斂の臣もんよりは察る盜臣あれ、

愈々五月二十八日の河開き、三味線堀の御屋敷を御立出で、主従十一名、御料理人等も御共連れられました例の川一九へ御乗込みでございまして、總て大川へを乗出す、流石は徳川將軍家の御膝下、實は日本一と言つて然るべきは兩國の煙火、川は船を以て埋めたる如く兩國の橋上は人を以て山を築き、實はや雲霞の如くとは此のことあらん、折柄打上げたる玉屋、健屋の晴れ煙火、天地を轟く砲聲と諸共打上げる煙火、數種ござ

いませぬ、

一雨の煙火間もあき光哉

と云ふ句がございませぬが、世の中は煙火は何んの益もあつたものにはございませぬ、唯々ヨツと眼先きを喜ばしてマーン、玉屋一健屋一と云ふでモウ二雨も三雨も無くあつて仕舞ふ、此のとき俄か打上た煙火の扇の御紋の仕懸煙火で日の丸の煙火を打上ました、是れがその名川の趣向でございませぬ、イヤドウも其の仕懸煙火をば橋上橋下異口同音に發める聲、雲時は鳴りも止まず實はや大山崩るゝ如きの有様、殿様は今頻り新ら御定紋の煙火をば人々が褒めるゆゑ、左丈左衛門趣向の煙火、コリヤ同席へ談話の種もあるワ〜」と殊の外御意入り手を拍つて御喜び、其の中はモウ煙火は終りあり、見物の船は八方へ乗開きまして今まで寸地もございませぬ兩國川が所々船が一二艘見えるばかり

旅人や曉方蚊の行術

と云ふ句がございませぬが、看る〜中々青々たる河の面を見渡しまして又一段の景色を添へ、ッヨ〜吹き入れる河風は世間の暑熱を忘れ、左兵佐殿も充分の浮遊遊まで頼り

後百四  
「謠曲を唄たつて居らせられましたが、左ノコリヤ丈左衛門モウ少々愉快を致したいがドウ  
ぢや」丈「恐れながら唯今が五つ時でございますゆゑ豫て彦家老梅津半右衛門へも彦館様  
の五つ時彦歸館と云ふことを私しが申上げ置き、今日の又丈左衛門が彦供を致しました以  
上少しでも時間の遅れがありまして彦家老へ相済みませぬゆゑ、此の後御遊興を遊ばす  
とも今日の此の儘彦歸りあつて然るべうでございます」と誠又親切らしく申上げるのを殿様  
の「デハあらうが丈左衛門又見物と云ふたところか手重のことぢやあ依つて是れからその  
親音の傍らまで参つて屋敷へ歸り、年寄への手からして詫入るゝ依つて其方が過失のさ  
せぬから心配しやんか」傍らも控へて居る藤田彌右衛門、小野崎源右衛門、大島左伸三枝  
直、是等の皆んか名川加祖の悪好共何處までも殿を彦不行跡は仕立つて家中の者も疎ま  
せ、彦國の者にも疎まさせて秋田新田一万石、俗小佐竹と云ふ彦分家壹藏守義通公、其の  
彦子息を以て彦本家へ乗込ませ、其の功も依り且つに常殿様彦不行跡と言つて彦隠居をな  
せ、萬事名川と心を協せて家中の物を横領さんと云ふ悪計みゆを頼りよ 四人「親音  
の傍らで彦出であつて然るべうござる」と申上げる、丈左衛門の心中での悪計成れりとして

喜ぶと雖も何處までも苦い顔をして側らも控へて居ります内、次第々々彦船の吾妻橋  
の方へと参ります、  
左へ取つて首尾の松、右りも取つて嬉の森、今宵愉快の大吉相、聞も亦く吾妻橋際まで彦  
船が参る、二つ並びし枕橋、待乳山聖天の森の景色、三圍土手、稻荷の稲妻の笠の堤上  
よりナラリ見えて得る言はれぬ景色でございます、青々たる中洲の傍らも御船を留め扱て  
彦酒宴と云ふと彦着が無くあつて仕舞つた 左「コレ〜丈左衛門、着が無いではあ  
か、幾ら酒が有つても着が無ければ興が有ら、着の趣向を致せ」丈「恐れながら五つ時よは  
彦歸館と云ふことゆゑ、それまでの彦着の手筈を致しました、斯く彦刻限延びに参りま  
したゆゑ彦着が盡きましてござります」丈「ドウか趣向は有らかな」丈「ドウも下方と違ひ  
まして上々様のその料理屋から彦着を取寄せまして、萬一召上り物も間違ひが有れば百等  
一同切腹いたさぬければ相成りませぬ、此の儘も致して彦歸館めらせられさるやう」左  
「イヤ〜ドウか一杯着を此處へ取寄せて飲みたいものであるツイ」と仰せ置かれます  
と又傍らから藤田彌右衛門並大島、三枝等が言葉を描へて「名川様萬事彦指揮は貴方よ

後百六  
 限りです、ドウカナヨツと浮趣向を……イヤササ浮趣向「何か斯う名川が點頭して船の船立  
 ツて拍手をポン／＼とニツ打ツたヌムと青々たる中洲の中より「オー」と應へて一艘の漁船  
 が乗出しましたが、一人は網打、一人は籠子と申すもの、兩人とも緋色木綿の袴口よ  
 竹の子笠と深く被り、腰袋を著け、網とは提げて船に立ち、籠子は絞釣り、此處で  
 魚の居る所と云ふ見込みを付けまして船を留め、網打は体を斜にして、サブーリ打入れる  
 網、殿様は眼も放さず 左「是ればアウも丈左衛門趣向／＼、イヤ威服ぢや」と言ふ中より  
 シヤ／＼ロシヤツと云ふ眼の下二尺の大籠を打揚げた、是ればイヤンと此處で御出でよ  
 ければ御着は無くある、達て趣向と云ふ、割烹店からは入れられませぬゆゑ、此處で網を  
 打たせ、それで側より料理人が居るから料理をさせて召上るやうも云ふ趣向のイヤンと  
 丈左衛門めが計み置きましたことでもございませぬ、サアその殿様の喜びと云ふもの、一ト  
 方ありませぬ 左「イヤアウも不思議不思議」  
 御料理人の鈴木半兵衛と云つて其の頭二百六十餘大名の中で佐竹の鈴木と云つての名は  
 もので殿前料理と申しまして御前料理の第一等でもございませぬ、此の者が右の魚を受取りませ

して組板の上を跳越え、籠を押へ附けました、殿様の立ッて入らしッて 左「半兵衛、良  
 鱈ぢやナ、半ハ洗肉、半ハ鹽焼、魚骨腸の嚙を旨らう」其様かこと我々其の申すことで、  
 殿様の申しませぬ 左「早く持て早く持て」と言ふ、委細承知と云ふので半兵衛の例の洗  
 肉の最上、その鱈の初めをツツコと云ふ、それで鱈とツツコの境のところが一番旨い、殊  
 々御醬油の鱈甲高の例の土佐醬油、土佐最上の古節で味を附けそれ本場山葵のトロ／＼  
 した箸漬のやうなる山葵を入れたから其美味いこと得も言われぬ 左「イヤアウも趣向／＼」  
 取巻いて居る者共の皆んが巡理でもございませぬ 左「コラコラ彌右衛門、源右衛門」兩人「ハイ」  
 左「此の先さよ吉原と申す所があるナ」ト二人の御答を致し兼ねて居たが、殿様の御前  
 ゆゑ御聲高く 左「黙ッて居るナ、此の先さよ吉原町と申す所があらう」兩人「存じて居  
 りませぬが斯様を賤しき所を何んで御尋ね……」左「イヤ／＼さうでせぬ、大名と云ふもの  
 何んも知らぬいで馬鹿な等しきものぢやな依ッて、予ハ今日から下方のことを語らぬえ  
 て……」ウソ吉原町其の他忍んで盛り場盛り場等を見物いたす、餘り知らぬのも不都合な  
 ものぢや」名川が御袖を縫ッて御意見をするも其の手を拵ッて御座町の餘り狂氣の如く真

ッ赤赤顔で左兵衛佐殿、ヒラリ御船より致して「御危うござります」と云ふ間もさく飛上つたから彌右衛門、源右衛門其の他の者も續いて船より上る、殿様は二人の者の手引き土手道を千鳥足で御出でよある、ア、恐るべし、あまた方でも下方でも酒を酔ひますと遊廓の方へ起くるの、

後百八

是れより吉原土手を手拍子取ッて

花咲かは告げんと言ひし山里の使は來り馬を鞍、鞍馬の山の薄櫻

と御謡曲を唄ひながら宜い御心持ちよ大門を潜られますると左右はスーッと軒提燈が高燈の如く、實よ不夜城と云ふは是れあんめり、吉原町は又別でございませぬ、殿様は夢を見る心地して仲ノ町の通りを真ッ直ぐに茶屋の行燈を一々御讀みあさりながら水道尻秋葉常燈明の所まで御出でよあると、右りから四人、左から四人ペラ／＼と出でまして「オヤヤ篠田様、小野崎様、大島様、お慰が御待兼ねですよ」三人「シッ、シッ……」○「何んですネ、シッ／＼あんて犬ぢやアございませぬよ」左「彌右衛門、源右衛門」彌源「へー／＼」左「折々其方達は當所へ參るナ」彌源「エッ……是れは甚だ恐入りました」左「恐入るよ及ばぬ、

今日は別物ぢやう、予が無理よ其方共の手を引いて此處へ參つた以上の勤めの愛さ晴し兩度位當所へ來るのはそれは人間の常習ぢや、予が耳よ這入ると雖も予も愉快をしよ參るのであるから決して咎めはせぬ、ナヨッとその遊女と云ふものを見て歸りたい」兩人「それは怪しからぬ……」と表面御意見するが内々は兵庫屋五郎兵衛と云ふ、是れは吉原一の揚屋でございませぬ、此家へ至盛方を喚集めた、中よ三浦屋四郎左衛門の抱へ遊女よ篠原と云ふ遊女がございませぬ、十人はお探り分けて出したところが、篠原よ殿の御聲が掛ッて其の他の遊女の歸して仕舞ひました、殿様の篠原を側へ置いて浮籠愛、けれども時間が遅れまするよ依ッて其の夜の早く切上げよして浮籠御、御家老衆へハハ自分様から、家來共の意見をするのを悉く興よ入ッたることゆゑ長居を致たと云ふ、君命されハ別よ浮家來方も彼れ是れ申すところのございませぬ、併し餘り浮酒を深く召されてハ浮身体の密よ相成りまするゆゑ浮藥でも召上りまして浮養生を」と申上げましたるが一雨日のナト浮氣分が悪るいよ依ッて浮服藥でございませぬ、サア浮身体が癒ると殿様の吉原町の又別でございませぬからドウも浮忘れ兼ねてモウ一度と云ふので、彌右衛門、源右衛門の兩人を浮連れ遊ばす、

後百九

後百十  
けれども屋敷と一緒に出る譯もいからぬからして自分村上と云ふ留守居役を喫んで此の者も能く言ひ聞け、村上の駕籠を借り、留守居役の御門限がきいゆえ構はず出でに  
ある、此の村上ある者も名川加祖の好物、殿様の毎夜く吉原町へ出で相成ります、  
サア汚納戸金の汚使捨が澤山でござりまするゆえ汚國表より何んとか彼とか名を附けて金  
子を汚取寄せ成ります、茲に至つて汚國表汚家老汚江内膳、戸村忠太夫、流石汚名家で  
ござります、依つて其の他の汚家老方續々として一ト間も築せり「如何もドウも汚納戸  
金の汚入用が烈しい、コリヤ容易ならぬことである、江戸表へ詮索も罷出でやう」云  
ふので先づ一の家老が汚江内膳、二の家老が戸村忠太夫、三の家老が梅津半左衛門、是れ  
を佐竹の三家老と云ふ、佐竹大和、佐竹淡路、佐竹六郎、佐竹石見、之れを四家一門と云  
ふ、眞壁掃部之介、鹽谷伯耆、コリヤ皆客分と稱へるほどの名家、現今御諸侯の御城家、  
六郷家なども元は佐竹の幕下で居らした、それほどの御家でもござりまするから汚江内  
名代もあつて江戸表へ罷越し、御納戸金御使捨の原因を尋ね、而して御意見及び、以來  
斯の如く御入用の無いやうなせぬければならぬ、と云ふので愈々出立を云ふこととござります、

戸塚九郎兵衛が進出でまして、九「恐れながら汚江様が汚出向さまありまして汚調への儀は  
至極汚宜しうござりまするが汚國も成長つて汚國のこのみ汚承知で江戸表へは偶も汚出で  
のことゆゑ深しいことを御存じあらつしやらぬ、手前は永らく父が留守居役を勤め居り父  
の話をも聞及び居りまするゆゑ汚江様の汚名代として江戸表へ罷出で、私が取調へまして  
汚使捨を汚止まりなれば宜し、汚用ぬれなければ其のどさよは汚江様が汚出ましよあ  
り私が調への件々汚承知の上にて御意見おつて然るべう存じまする、先づ下調へよ九郎兵  
衛罷越しまして其の次第を詳しく書面にて汚國表へ差送るでござりますせう」内「成るはは是  
れはそれが宜い、戸塚は江戸表も成長つて江戸の様子振合を能う存じ居るゆゑ早速罷越せ」  
と云ふので是れから戸塚九郎兵衛は支度をして江戸表へ出でましたが、往つて返らぬ長  
旅、茲も戸塚は汚家の爲め命を殞すに至る、誠は忠臣無類の戸塚九郎兵衛が相果てるこ  
とよ成行くのは氣の毒千萬ござります、

第九席

扱て戸塚九郎兵衛は國家老總名代として江戸表へは罷出ましたが三味線堀屋敷へ參れば



人共が油断を致さぬから、上が伊手許金を使捨て成りませぬ原因が分りませぬゆゑも下谷仲町は福田屋と申します質兩替店、是れは佐竹の御出入り町人總ての御用を達しする、此の福田屋の家は先代戸塚九郎兵衛が至つて悪意で、今の福田屋七之助と云ふ者は戸塚の許まで暫らく學問もし、町家に入らざる剣法までも稽古をして貰ひし恩人の御子息ゆゑ、福田屋が大層戸塚の世話を致します、御話變つて茲は三味線堀佐竹の御屋敷東の通用御門番岡木善助此の者が、前町の風呂へ参つて酒を買ひ、夕河岸の鯛を五尾買ひまして、それを纏めて縛り左の手は提げ鹽焼も致して杯一飲らうと云ふ考へ、また下ッも好酒家の樂しみは別でございませ、濡手拭を肩に掛け、御屋敷の御門へ往かうと云ふ丁度三味線堀の橋の降口へ來ると、脊中を一つポーンと敲き、「善助」と言はれて振返つて見ると黄八丈の小袖は黒縮緬の丸羽織、黒縮緬の頭巾、俗に之れを宗十郎頭巾と云ふ、黒縮緬の裾袴、白足袋も雪駄を穿き、襷色箱の大小もて此方へ來いと善助も手真似をしながら、先きもナヨッナヨッ〜と往く、善助は「ハテナ」彼れは確か戸塚の若旦那様、御先代は御恩を受け彼の御方様も大層私

も目を掛けて下さる、常節は伊國勝手で居らつしやるが世の中は能く育た人もあればあるもの、本統は戸塚の御前様から往かきけりやアさらぬが後を慕ふて往くの又鯛を提げて往くのも体裁が悪るし、ソソから捨てれば宜いが捨てもしさいで鯛と徳利を袂に入れて後を慕ふて往く、下谷の割烹店は今松源と云ふ其の古へは大層割烹店が簀を列べて數々ございませしが彼處は元と蓮月と云ふ割烹店が眞ッ直ぐに彼處へ庭を拵へ、家を造り先づ下谷隨一等の割烹店、移り變る世の中は往昔とは天地の相違、蓮池の有様とは大違ひもありませしが、實に絶景は池の端でございませ、彼處を總名瀬の里と云ふ、其の蓮月と云ふ割烹店へ最前の武家が這入りませしたとゆゑ善助の入口も立って考へて居ると、又振返つて頻りも招くから續いてヌツと這入る、應て右の武士の奥へ通る女中の「エー御連様、此方へ……」と聲を掛けませしたゆゑ、汚い草履を脱捨て鯛と徳利を袂に入れて居るから妙お様様をしきから善助のやつて來る、ト池へ突出したる奥座敷で、ヤウも古今の絶景、折柄連時でございませするゆゑ、紅白の蓮華

今日盛りと咲散れて居る、池の中央の辨天の御堂の實の極樂の巻簾と思はれます、右の武家の此のとき始めて善助を側へ喚んで被れる頭巾を取ると案違ひす戸塚九郎兵衛殿善「イヤ是れは是れの御機嫌能う、私のモウ貴方の御國へ御出で遊ばすことのみ思ひ、江戸表へ御出府もあつて居るとい存じませぬゆゑ、御容姿と御聲の能く似て居らっしゃるが、ハテ誰方様であらうか、戸塚様は相違ひと思ひましたも何んとなく私の疑ひながら御後を慕つて参りました、エー御機嫌能う」九「善助、今日の貴様はナ馳走を仕やうと思つて常店へ喚込んだ、何んでも貴様が食べたものを所望しろ、何んでも馳走する、馳走と云ふ文字の馳せ走ると書く、冬の馳走の温かよ、夏の馳走の涼しく、貴様が是れの旨さ、彼れが美味いと云ふものごとく食べさせるのが馳走だから、心置きなく是れ〜が欲しいと云ふものを遠慮なく申すやふよ……何を最前から貴様モチ〜して居る」善「イヤ、トウも旦那様面目次第もございませぬ、最前私が風呂から上り、一杯飲べまして今日の彼岸でございませぬから繰くり寝せらうと存じまして前町の酒屋で酒を買ひ、丁度通り掛りましたる夕河岸の鯛、これを求めまして鹽焼よして食べやうと存ずるところで旦那様も善助と言つ

て春中を敵かれ折角買つた鯛を捨てるも異なるものと袂へ入れて参りましたゆゑ液が……」九「斯う、穢き男ぢやナ、其様奇物の捨て、仕舞へ」善「それでも夕河岸の……」九「夕河岸でもきんでも割烹店へ其様奇鯛を提げたりして……」善「それで持ッて来るぢやアおかつた」九「サア〜捨て、仕舞へ」善「今夜の鯛の大喜こびだ」と縁所おく其の鯛をドンリリ川へ抛り込んだ、是れから種々の肴が出て参りまして、話をしきから酒を飲んで居る内、九「扱て善助、他でいさいが兩三日前は國表から用事あつて江戸表へ出張つて参つた、其方の東の通用門番をして居るから、屋敷の出入りは一々書留めてもあらうし、又記憶もして居るであらうが昨今夜も至つて繁々門内から外へ出る者の誰と誰で、又表から出入りする者の誰と誰だか其の出入りを一々其處で話して聞かして呉れ」善「左様でございませぬ、マア繁々出入りを致します者の此の逆月樓の主人、下谷でいどう松坂の呉服店、御抱相撲で出羽の森浪右衛門、相撲年寄役で玉垣額之助、能役者で鶯傳右衛門、舞踊の師匠で根本お幸、モウ其様もものでございませぬ、内から出ます者の別々参つた御話のございませぬ、加賀様から梅



したが是れなきに其だ不都合のやうに承知いたしました。

傾城の賢者のこの柳かき

と云ふ句がございまして、全盛とまで言われるものでございすから、往昔のその高尾薄雲の時代のことを二つ三つ申上げまして往昔の吉原の斯う云ふものかと若い御方々の御考へがあるぞ宜くさいが、吉原の往昔を申上げます、既にお奥州宮城郡青葉山の城主松平陸奥守綱宗公、涉忍びで吉原町へ御通ひなされ三浦屋の抱遊女高尾と云ふ者を御寵愛をなさいました、テ俗に鮫鱈と高尾の吊し切りと云ふことを能く申されす、三又よ於て高尾が仙臺公の爲め水中に斬捨てられたやうに書いた書物がございすすが、アれり甚だしいこと、且つ島田重三郎と云ふ旗下が情夫であつたと云ふやうに書かれましたが高尾と云ふ婦人の全く左様お不行儀者でございませぬ、實に婦人の魚鱈とも成るべきほどの者でございす、それほどの者を吊し切りなされたさぞ認めましたに如何にも當人が草葉の陰で残念と思ふでございませうゆゑ是れをナヨツと申上げまして一つよ、現今の遊女達の訓戒も致したうございす。

高尾の十三代續きまして既にお高尾考と申する書物もございす、初代の高尾を妙信高尾と云ひ、第二代目の高尾を萬治娘の高尾と云ふ、出生の野州鹽原の出生でございまして現に其の子孫も鹽原もございす、三浦屋四郎左衛門が奥州松島見物の歸り掛け鹽原の温泉に立寄りました、唯今では大層立派な成り居りすが往昔のモウはんの百姓屋で風呂を立て、入れましたものでございす、其處へその三浦屋夫婦が唯今さら三浦屋、往昔で云へば二十一日の間滞在いたして療治を致しす、此の鹽原の温泉の諸病も癒やす、如何にも閉居でございまして暑を避けまして生を養ひまするのよ、至極宜しき所でございす、三浦屋夫婦の退屈の餘り近邊を往來すると毎日のやうに箭の根石を賣り來る娘がございす、彼處より此の箭の根石と云つてマ、で箭の根の通り石がございましてそれが名産でございす、テ其の娘が「當所の名物、箭の根石を御土産に御持ちなされませぬか」と呼んで來るところが誠にお奇麗な容貌で、田舎娘のことゆゑ装束もかたして居りすが愛嬌の宛ながら舞れるやうでございす、三浦屋夫婦の子供がございませぬから泊つて居りまして旅店の主人を喚んで「ア、毎日箭の根石を賣り

来る子供の彼れ近所の娘から「主人」左様でございます。親御も云ふもの母親が口く  
 きて父親ばかりござりまするが元どの武家だも云ふことでもござります。彼の娘の幼少い  
 ときは當所へ参り手習師匠をして居りましたが、唯今での病氣ゆゑ其の手習師匠も出来ず  
 彼の娘がア、ヤツて箭の根石を買って歩きますが、今日くの御飯を食べる代りさるの  
 で、誠に可愛い娘でございますから近所の者が米を遣り味噌を遣る、それでマアドウカ新  
 うか命を繋いで居ります、又療治もござつた御醫者様もア、可愛想だと言つて薬を無料で  
 遣りさるります、又逗留の浮客様も箭の根石を價良く買つて持参さるものも皆んさ彼  
 の娘を不慥思召しますからでございます「四」ハ、左様かい、何と主人私の子供が無いか  
 ら彼の娘を買つて往きたいが、サウしたら病身の父親が困るであらうから父詰共は連れ  
 て往きたい、私何を隠さう新吉原町三浦屋四郎左衛門と云ふ遊女屋の主人だが今度奥州  
 松島見物旁々奥州白石在霞峰村へ先祖の佛參ふ夫婦連れ来て参つての今歸り掛け、別々新  
 うと云ふ悪いところもございけれども養生旁々浮宅の御厄介も成つて居るがドウも彼の  
 娘の子の縁縁と云ひ、行儀と云ひ、愛嬌がもつて如何にも實直らしいから彼娘をドウか私

が買つて往きたいナ、一人連れて往つたら困らうから父親も俱は連れて往く、今言ふ通り  
 江戸の山谷と云ふ所の別荘の廣くもあるし、風入りも宜い其處へ連れて往つて父親の療治  
 をしたから癒らうかと云ふ考へもある、それも當人の親孝行を感ずるゆゑ、ドウか御主人、  
 話をして見て下さらぬか「主人」それドウも旦那、父子の喜び此の上もございこと、吃  
 度先方での直様承知いたします、併し早速其のことを……」と云ふので此の旅籠屋の亭  
 主も如何にも篤實の人で自分の子供でも連れて往かれるやう喜んで先方へ話をすると云  
 ふと父子の喜び大方からず誠に細い煙を立てまして三度くの食事衣類等の手當りござ  
 らせぬくらいゆゑ直ぐ承知いたします、四「ソレから同道」と父子諸共皆通し駕籠で江  
 戸表へ参り、山谷の別荘へ右の娘と父親を差置きます、此の娘の名をお杉と申し後遊  
 女高尾と云ふ、今其の高尾の子孫が杉野と申します、  
 扱て三浦屋の家十七歳まで忠實しく両親に事へ居ります中、實の親も没しまして今で  
 の三浦屋の立派な娘、細絨の美しいところへ結構な衣類を着用いたしましたことゆゑ三浦屋の  
 娘と云ふと先づ其の頭を全國のイサ知らず江戸表で一等の美人であらうと云ふは其の評

判、然るところ此の三浦屋の夫婦諸共、心懸けも喜、貰ひ娘の杉のさう云ふ結構な氣質でござりまするが七八年と云ふもの、商賣も甚だ不繁昌、且つ種々災難が打續いておや三浦屋が當時からハ身代限、往昔からハ分産、事同しことでござるが愈々茲で潰れやうと云ふ、其のときさ娘の杉が開き直って兩親に向ひ「扱て父上様、母上様、私の十二歳のときも御當家へ貰ひれて實父も山谷の御別荘で御親切に御世話も預りましたゆゑ一ト度病氣も全快し一年あり二年あり快く歳月を送って終を取りましたの、皆んが御兩親様の御鴻恩、既不幸が續いて吉原開けての舊家三浦屋が茲滅すると云ふの如何もも残念の至りトウウ私に遊女と成り、此の家を恢復致したうござります、これが身を穢すの賤しとの人の申すかり知りませぬが昔から致して新吉原町三浦屋の家も來さる客も然るべし御身分の御方されハ更らも耻らうとござるござらせぬ、御兩親様方が御承知ならハ私の改めまして先代高尾殿の後を繼いで二代目高尾で一ツ家を興らうと存じます、如何でござりますやうや」

三浦屋夫婦は之れを聞いて涙を流し「誠にお前の親切は厚けりやが、それでは山谷の別荘

で口くきつた實の親御も私達夫婦が済ませぬ、貰って來るでござり決して遊女もござりませぬ、藝妓もござりませぬと云ふマア附こそ出さぬけれども心も約定として私が貰ふて來た、此の家が微塵もさらうと我々が道路も相果てやうとお前を遊女もするものござらぬ「杉」ツ………それ御兩親様が御心得違ひ、私は恩義の爲りも勤り奉公するのでござらせぬ、此の家を興す爲めでござりまするゆゑ、マア兎も角左様なことを仰ッしやらさうと私に御任せ下さるやうと」と口で言へる實は恩義の爲り、且つ自分が一ツ妓樓の風儀を直し家を恢復しやうと云ふ精神でござります、そこで兩親も「お前がさう云ふ精神さうば」と云ふので餘儀なく許すことと相成りました。

サア娘のお杉が三代目高尾と成って御客を取るとあると、トウも名代の美人でござりまするに依って、豪商豪族が擧げて參る、中も前申上げたる陸奥の太守綱宗公高尾の許へ御通ひも相成る、御寵愛の餘り御國表より金華山の黄金を取寄せてそれを盃も鑄らせ、横谷宗民、此の者の片切彫で藤の裏葉、それを全盛高尾も御差しおされて「綱」サア盃の儘取らせるに依って快く飲むやうと」此のとき高尾の一ト口飲べまして盃を下し置き「高」マ、奉

したい人がある」と言つた、陸奥の大守御氣色サツと變はり、御國詔りの鼻掛つて、  
 誰も差したくない「高」京の吉野さんに差したうございませう」對手が婦人でござるから綱宗公  
 ツコリ御笑ひあすつて「ア、左様か、豫て京都島原の吉野と云ふ者は高名ある遊女と聞き及  
 ぶ、早々吉野へ差すやうな……」扱てその使は困りましたテ、如何も全盛でも花魁でも遊  
 女の使ひは仙臺の武士が持つては往けませぬ、供をして居た近臣の内兩三名唯茫然として  
 顔と顔を見合せて居るのを揚屋の亭主尾張屋清十郎、そりや草創の茶屋でございまして俗  
 ん尾清と云ふ、此の者が「花魁、其の御使ひは私が致しませう」「高」それは尾清さん御苦勞様  
 ですが吉野さん又私からの思ひございと云つて此の盃を誠よ私一人で戴くのは惜し  
 御盃のえ、まだ遇ひは致さぬけれども豫て高名を聞いて居るから……」「清」是れは花魁の御  
 考へ至極面白い、先づ京都では島原の吉野さん江戸表まで吉原町の高尾さん、宜うござい  
 ます、使ひ又参りませう」「高尾は短冊を取上げ、辭か筆を執りまして少しく考へて居り  
 ましたが、

御情けを酌換はす藤のうらはかき

京都新吉原町三浦屋内

高尾

と認めて「高」尾清さん、是れは少さいがホンの道中の小遣だ……」と言つて百兩呉れた、

マア其の金子は仙臺様から出るでもござらうけれども百兩を直ぐ尾清へ遣ると云ふのは  
 往昔吉原の遊女の見識、

甚だ當節を指して悪く言ふやうで恐入るが「誠よ御氣の毒だがナヨツと斯う云ふ所へ此  
 の手紙を届けてお呉んさいよ、是れは少さいが」と言つて圖助出すのは先づ見渡したと  
 ころで花魁社會もありませう、

テ尾張屋は京都島原の吉野の許へ参りまして高尾の口上を述べて盃を差すと「吉」遊路の所、  
 江戸の姐さんより此の吉野へ思ひござし、難有く頂戴いたします」と快く吉野が飲んで短  
 冊を取出し、サア〜と認めましたのが

酌換はす情けも藤のうらはかき

京都島原

吉野

と書きて「吉」尾張屋さん、御使柄御苦勞様、是れは少さいが」と言つて百兩呉れた、此の

吉野と云ふ者は點茶を酷く致しました婦人で後、泉州堺の豪商灰屋紹益と云ふ者の妻と成りました、此の吉野が好んで織らせました布を吉野織と申します、吉野の歌よ

誰そや誰そ誰かは今日のつまあらん

仇し愛世も仇し身あれば

また

風厭ふ花も扇の風情かき

と云ふ句もございます、先づ京都での大盛、そこで吉野の言葉も「尾張屋さん、江戸の姐さんよナヨッ」と此の返盃を致します「尾張屋清十郎は高尾から吉野へ思ひざし、吉野から御返盃と云ふ、又高尾の方から御手許拜見と云ふ日もあると又京都へ來さければならぬ、と云ふので其の頃大坂新町に高窓と云ふ大盛がございますから清十郎は右の事情を話しまして高窓花魁と相とさせますと、高窓は一口飲んで、聽て是れも短冊へ美事と認めましたのが

私も戴く藤のうらはかき

として、尾張屋さん御使柄御苦勞、是れは少さいか」と言つて百兩呉れた、之れを三郎名妓持歸りの盃と云ふ、コリヤ吉原町の寶物でございましたが當今はドウありましたが、變り行く世の中ゆゑ跡方もございますまい、

却説元へ戻つて例の高尾、或夜仙臺の大守をバ曲者來たつて窺ひ寄り刺さんとするのを高尾全盛が此の者を退けまして仙臺様を御助け申上げた、それを綱宗公が悉く感じ「予が爲めより彼は生命の親ぢや、予遊女の許も浮かれ居たるところをバ忍び寄つて曲者が刺さんとするのを早くも彼が心附いて其の者を退けたればこそ無事一命を保つあり……」そこで内々手を廻はして高尾をバ落籍及び御國表へ御連れ遊ばしお杉と云つて暫らく御老女を勤めまして遂に七十三の高齡で終る、今以ちまして現に奥州仙臺荒町法流山佛眼寺に墓がございます、戒名の「淨休院妙讀日清大姉七十三歳」

往昔吉原の遊女は斯の如くの見識でございます、尤も客の方も今のやうな下等社會が多く、素見歩きの致さぬものでございます、古い寶物も金二百疋を持たざれば吉原の大門を通ら



すてやでしてゐる。それゆゑ、誠々上等のみ愉快を盡して又下等は下等でそれ相當な遊女見世がござります。ところが唯今でハモウ段々段々局見世でござるの、何見世だのと申しまして下等の遊ぶ所が出来ましたゆゑ、その混亂大方から致して上等社會の愉快の地も少しく不都合を來して居る。左れば吉原並と云ふ淨瑠璃の文句も「客は扇の垣根より」と云ふことがござります。ト申すのは斯うして扇の垣根から遊女の善悪を定めまして登樓を致したものでござります。近く吉原町も本飾と云ふことがござりましたが誠々狂言と思はれて床かしく存じます。それまで本飾と云ふものハ暫らく中絶したして居りました。追々當節は舊々復る様子で、是ればかり元どの吉原町も致したものでござります。」

第十 席

御話前より、戸塚九郎兵衛が密かき後を尾けて往くと、兵庫屋五郎兵衛と云ふ勘屋の家へ登りましたから、イヤ確かき願様と三度も四度も考へ居ります。このゆゑ直ぐも踏込んで御意見を仕やうかと思つたが、どうすれば公儀へ聞へて御家の大事、と洗石の器置人の戸塚九郎兵衛、



アノ、水道尻は伊勢屋と申する御茶屋がござります、其の伊勢屋と云ふ家の先代九郎兵衛殿が留守居役を勤めて居るとさう馴染の家で、當時の女戸主、お直と云つてナカ〜此奴ドウも姦物でござります、其の代り、ソレ者揚句でござりますることゆゑ高事が行届いて居ります、九郎兵衛と此の伊勢屋の家へ這入る 直「オヤ、是れハア御珍らしいドウして旦那様今日の……」九「直や久しう遇ひぬが大層苦返つたナ」直「オヤ、御程の宜いこと、年を取つてハモウ旦那行かせぬ」九「又愚痴か」直「愚痴ぢやアござりませぬが、人よ嫌ひれるのが矢ッ張りその年を取つたゆゑ……」九「矢ッ張りそれが愚痴だらう」直「ア、聞いて下さい、御先代様と能く御一緒御出遊した御供頭で篠田彌右衛門様、御側頭で小野崎源右衛門様を始め大島様でも三枝様でも御屏敷様から折々御出で成りました、ところが近頃ハ異を變へて兵庫屋さんから致しまして三浦屋へ皆さんが御出で成ります、尤も御茶屋さんの格式が違ふからでもござりませうが、たまやア婆の家へ御出で下さつても宜さうなもので、旦那様でも御在で遊せハ私方へ折々御出で下さいまするが、貴方の當時御國勝手とばかり思つて居りましたが此方御出で、今日のドウ云ふ風の吹廻しで……」

「九」コレ〜お直、鮑屑ぢやアあるまいし風の吹廻しで来る奴があるか……、扱て直や今日の篠田、三枝、小野崎等のことと付いて貴様尋ねたいことがあつて来た」直「ハイ何を……」九「其の四人と一緒来る色の白の杖のヌマリとした二十六七歳も成る奇麗な武家が一人見ねるであらう」直「ハイ、此の前私が三浦屋さんの入口でナマリと御見受け申した、オヤ篠田様、小野崎様の御連れハ大層御年が若くて奇麗で居らっしゃる、何んと云ふ御方であるか私の考へたことがござりましたが、此の間アノ兵庫屋の女中も聞きましたら政様と云ふ御客様で篠原と云ふ花魁を買つて御出でござると云ふ、彼の御様子ぢやア花魁が首ッ丈け惚れて居らっしゃるだらうと云ふと、女中がイヤ、ドウも花魁の大熱々だと云ふことを言ひました、彼人の御屋敷で何の御役を御勤りでござります、まだ御年が御若い……」お直ハ気が付かぬから〜「オヤ、直や」直「ハイ」九「三浦屋の家で篠原と云ふ花魁の隣座敷の遊女ハ何んと云ふ」直「エ、その東雲と云ふ花魁でござります」九「成るほど、篠……」

原は東雲、宜い名ぢや「直」その東雲さんと云ふ御方のモウ年明と申して二十六歳でございませうが、美しい花魁で今まで御職で御出でございませうが、篠原さん御職を譲って御自分の二枚目へ移下がり、柔順しく細細が美くて遊藝ごとの一つとして出来さることない、口数が寡くしてドウも惚れくとした花魁を戸塚様今夜御買ひ遊ばせ「九」ん、それで東雲と云ふ遊女を買おう、そこで直や少し注文があるヲナ「直」へい何んで「九」遊妓の一人も上げることならぬ「直」へ、「九」男藝者の悉皆何んでも構はない、手が足りさいと云ふから遊女屋の若い者でも藝の有る者なら雇ひ込んで腕限り根限り騒ぎ立てると云ふのだ……「直」へ、「九」妙な御説へで……「九」そこで肴の蕎麥の蒸籠で土手を築いて飯の岡持の山を成す、斯う云ふ趣向、酒樽の鏡を拂ひ燗の出来るやうな廊下へ燗鍋を据へて充分は大酒宴をしたいと云ふ今日の希望だ、入用御構ひさした幾らでも直や貴様の家の客だも依って貴様の家の外聞ならぬやうな……「直」それ私の大喜こひでございませう、併し蕎麥の蒸籠で土手を築き、岡持で山を拵へると云ふのは吉原が開けて無い御遊ひでございませう……宜うございませう、鏡を拂って燗鍋で直ぐ燗をつけませう」とお直藝

のモウクル〜喜んで是れから彼方へ往って一人、此方へ往って二人男藝者を雇ひ、其の他藝の有る者なら素人でも構はないと云ふから三十八九名頼込んで一人座敷の大愉快、オーイオーイ老爺の張踏んだり張踏ませ、越後國の角兵衛獅子、ステテコ踊に蹴立、皿投げり障子投げ、亂暴千萬、隣り座敷に於ては殿様篠田、小野崎、大島、三枝、花魁の琴、藝妓の三味線、新道衆の胡弓、三曲打合せて極上等、上品の遊興、それ引換へて隣室に破れるやうな大騒ぎ、餘りドウも亂暴極まる遊興ゆゑ篠田彌右衛門の餘りと云へば無作法ある奴と思ひヒョイと視て見ると正面又手を拍って騒いで居るのの國表名代の戸塚九郎兵衛でございませうから彌右衛門の驚いて「彌」扱て小野崎、三枝、隣室で彼の騒いで居るのの誰かと思つたら鎮山奉行を勤めて居る當時中老株で以て飛ぶ鳥も落す勢ひ、浮國の仙北新田を開いた戸塚九郎兵衛、コリヤ我々斯うして居る日にあると穴が十個あつても二十個あつても足さう、上又浮勤め申して引上げやう」と俄か悪人共の周章驚愕さ兵庫屋へも此のことを言つて殿様を直ぐ浮籠籠へ入れて三味線堀へ帰るに相成る、

此方こなたの戸塚九郎兵衛、隣り座敷のシーンとして居るのを見て、九く「皆みなの者もの大おほき大おほ儀ぎであつた、最早はやく清きよみよきつたから……」と祝儀しゆぎを充分じゆぶん遣やり、遊女うしよめの食物じよくぶつを誂あつへ、其そのの身みよ於おての今いままでの燈風景とうふうけいを誂あつびて直すぐ伊勢屋いせやの家うちへ引取り、それから福田屋ふくだやへと立歸たてかへりました、

後百三十四

却かへ説せつ其その後のち兩りゆう三さん日にち經へつて戸塚九郎兵衛の浮國表うきくにのうらより到着たつとく仕つかりましたと云いふ伊い届とどけを出いして置おきまして殿とのの浮前うきまへへ罷出まかりだで目通めとほりを願ねがひ、九く「麗うるはしき尊顔そんがんを拜ほし恐おそれ至極しごく存ぞんじます、浮國表うきくにのうらよも何なにの障さやりも之これなく益々ますます平安へいあん存ぞんじます、貴あなた意い安やすく思おも召めされましますやう」と申まを上げる、貴方あなたも無事むじで今日けふの對面たいめん満足まんぞく存ぞんじます」と口くちでい言いふが殿様どのさまの腹はらを吐つけ、五六日ごふにち前まへ吉原きちげんで大騒おほさわぎをして居ゐたのであいか、九郎兵衛も大將たいしやう詰ついて歸かへつたらうと君きみ臣おん共どもの腹はらの中なか同じおなじこと、それゆゑ殿様どのさまは毎夜まいや毎夜まいやの浮通うきとほひも浮遊うきゆうぬき、藤田源右衛門ふじたげんえもん、小野崎源右衛門おのさきげんえもん、大島おほしま、三枝等さんえだらも自分の身みの上うへが怖おそいから殿様どのさまの御酒ごしゆを御止ごどめ申まを上げる、是これが爲ためめ十日じゆにちほど吉原町きちげんまちへ御出ごいででよさらぬから頭かしらり遊女うしよめ藤原ふじはらの姿すがたが眼先めまへきにナラ

つゝ寝ねれば夢ゆめ、起おきれば現ま幻まぼろしのトウもその美うつくしい姿すがたがナラつゝ御忍ごしのびで吉原きちげんへ往いらせられやうと云いふ思召おもめが充分じゆぶんあつしやる、藤田ふじた、小野崎おのさきはモウ大概たいがい宜よろからうと云いふので御ご憑よ申まを上げ先日せんじつ透とほしく御駕籠ごかろうを入いれ御歸ごかへりよまつての後のち揃そろつて吉原町きちげんまちへ往いらせられる、殿様どのさまは今日けふは久ひさし振ふりで藤原ふじはらの顔かほを見て愉快うきわいを盡つくさうと、樂たのしみ樂たのしんで兵庫屋五郎兵衛へんぐわごろうべゑと云いふ揚屋方やうやかたで御出ごいででよさらると兵庫屋五郎兵衛へんぐわごろうべゑは妙たご奇き顔かほをして居ゐる、五郎兵衛ごろうべゑ今日けふのトウした「五ご……恐おそれながら私わたくしはモウ貴客きやくは御存知ごぞんちあつしやること存ぞんじましたと云いふが、まだ御存知ごぞんちあつしやいませぬか」「何なにさ……」「五ご」先日せんじつ御歸ごかへり遊あそばしてから第三日だいさんにち目めよ至いたつて戸塚九郎兵衛とづかくわうべゑ様さまと云いふ御方ごかたが御出ごいででいごさいます、テ實じつは五人揃ごにんそろつて當家たうけへ罷ま越こし、三浦屋四郎左衛門方みづらやしやうざゑもんかたへ是これまで節々せつせつ愉快うきわい參まられたる内うちで一番年いちばんねんの若い政次郎まさじらう様さまと云いふ御方ごかたは、アリや餘あまほどの御身分ごみぶんの御人ごにんだ、御學問ごがくもん修業しゆぎやうの爲ため江戶表えどへ出て斯かる御不行ごふぎやう跡あとのことが浮國うきくにへ知しれやうものから御當人ごたうにん様さまは次第しだいも依よれ切腹せきはらをも仰付おぼせられる、此この母上ははあさま様さまと云いふものも是これ亦また容易やすからざる御身分ごみぶんの御方ごかた、マツた御一人ごひとりの御子ごこ様さまゆゑ其そのの御心配ごしんぱいは「ト方かたあらぬゆゑも政次郎まさじらう様さまは昨日けふ俄ふか御國ごくにへ御立ごたちにあつたところが豫あて

後百三十五

政次郎様を御迎ひも参られたる者より委しく此の九郎兵衛へ政次郎様の母上様よりの御密面だ、ドウか其の政次郎様が心を懸けたる婦人を落籍も及びまへ政次郎様の行跡も直り、時よ何んとか名を附けて政次郎様の手許の給仕をさせ遣はしたいと云ふ母上様の格別の思召もて落籍も罷越したと依つて左様心得ると、三百兩の金子も涅齒祝儀として別々金子一両、萬端御手當の上御引取りも相成りました、貴客はモウ疾うも御國表へ御立ちも相成り彼の篠原花魁は戸塚様方まで御支度おされ遣からず貴客の御手許の御小問使も上がることかど私は心もて唯御身の上の無事を祈り居りますこととございまして、今日の御尊來の實以て私は夢の如くも心得ます、戸塚と云ふ御方は御存知あらうしやいませぬか」

義政公之れを聞いて、イヤ悪い奴は九郎兵衛だ、扱ては予が毎夜のやうも忍んで吉原町へ参るのも畢竟篠原と云ふ向ふよめがあるからのこと、是れを落籍けば吉原通ひをしやいと云ふ考へで斯くは計つたと見ゆる、何處も篠原を隠匿し置さしか、何は兎もあれ今宵は屋敷へ歸り取札さぬければさらぬと云ふので「ん〜御怒りもされ、兵庫屋五郎兵衛夫婦の者が何を申上げても御應答があら、御茶も召上がらぬいで御歸りもする、篠田、小野崎、

大島、三枝等も手持無沙汰で追々駕籠も飛乗りまして御上の後を慕ふて三味線堀へ歸られました、

講談變つて戸塚九郎兵衛、今日あたりは吉原町へ殿様が往らせられたらうと老へて居る、殿様の方では唯戸塚奴が篠原を何處へ連れて往つて己れが手活の花どののみ一心と思召して居るが、さうは言へず戀の遺恨と云ふものは、あまた方でも我々共も致しまして、さて其の情も變りはございませぬ、義作事方を喚べ、近臣「へ〜」作事方は早速御前へ出る、義竹三屋敷は黒塚はさらぬから左様心得い……残らず練堀もしろ、黒塚もどは見ると嫌やだ、作事方は何も心得ず主命のことゆゑ「委細承知いたしました」と言つて御前を退がり此の間控へたばつかりの黒塚を今度は練堀もしろと仰つしやるが黒塚と練堀では大變御入用が違ふが、實も御大名様方は前後の御辨へがさい、とトリ〜御咄を申して居る、

扱て此方は戸塚九郎兵衛、先代より小名木川の御下屋敷御預りを仰付られた三代前の殿様の御隠宅を悉皆戸塚も下し置かれた其の御屋敷は藤花の名物で小名木川佐竹の藤花と言つては御出入りの者が願つて拜見をするほどのこと、ナカナカ龜井戸の藤花から見ると十層

倍の藤花がござります、しかも其の藤葉は長くて花が美しくござります、  
 一体此の小名木川と云ふ所は閑静な致して景色の佳い所で植木は地味が宜ろしいか致し  
 て何の植木でも盛ります、それゆゑ別けて他の藤花から見ると遙か又大きうござります、  
 又御庭の三階の高樓よりは駿河の富士も見えさするので兩様兼ねてふじみの御殿と稱へま  
 するほどの美觀の家を上より頂戴を致して戸塚が又更な充分の手入れを致したるゆゑ  
 な宏大もあゝ家造りでござります、其處よその篠原を連れて参り、幼名を芳と申しました  
 ゆゑ自分の妹は假稱へまして芳と申し、充分な支度が調ひましたから九郎兵衛は三味線堀  
 御館へ罷出で、御近臣が殿様の御前へ罷出でまして「申上げます」「何ぢや」「近小名木  
 川下屋敷戸塚九郎兵衛殿罷出で御目通りを致したいと申しますが、如何仕りませう」  
 「義九郎兵衛参ッたか」「近へ」「義此處へ喚べ」「御取次の御家來は驚いた、大層殿様が御  
 怒りの様子ゆゑ次第に依ッたら戸塚様は御手打でも成りませぬかと心配をしい戸塚  
 の前へ兩手を突き「近戸塚様、殿様は餘ほな今日は御怒りが烈しうござります、何か貴  
 方御上の御怒りも觸れたことがござりますか」「九それは此の九郎兵衛が心得居るから心配

をッしやるナ」「近左様でござりますか、私は次第に依ッたら貴方の御一命も關はるかど  
 日常御忠節の御當家名代の戸塚様、如何あることかと心配いたしましたのでござります」「九い  
 や、それは辱けさい、御上は御居室に御座わらせられますか」「近へ」「御居室に居らせら  
 れます」「九然らば……」「近御案内を致すのでござりますと覺束さくも近臣は戸塚と同  
 道して御前へ出ると、左兵衛佐義政公、御顔の色は眞ッ青で眼中血走り額上には江戸繪圖  
 のやう赤筋が生じ、身を振らせ齒をバリ／＼噛んで戸塚の姿を見ると御聲高く「九郎兵  
 衛」「九ハ、ーン……」「義何用あつて罷越した」「九郎兵衛は少しも騒がず「九御意もござ  
 ります、父九郎兵衛が御三代前の殿様より頂戴いたしました小名木川の御屋敷、今日を  
 盛りと藤の花、折柄潮入の泉水より數種の魚類之れありますゆゑ御漁券々御尊來下し置  
 かれますやう、就さましては私の妹の芳と申します者がござります、行儀見習の  
 爲めな然るべき方へ奉公な差置さましたところ都合に依ッて今般手前方へ立歸りまして  
 ござります、尤も是れは乳母が娘で手前の爲めには乳兄弟でござります、兩親も相果てま  
 して侍み少なき女子ゆゑ屋敷へ引取り扶助いたします、此の者は縁竹の遊も遙し居ら

後百四十

ますれば上の参酌は此の者が任りまする、何卒明日正午頃には小名木川へ御尊来下し置か  
れませすれば其の手當任りまする、如何あらせられませるや、参酌の爲め九郎兵衛罷出でま  
してございまする」と言ふと、殿様ハア、分つた、扱て九郎兵衛が忍び忍び吉原町へ  
予が参るから是れが公儀役人の耳へでも遣入れへ家の爲めよさらぬと云ふ考へから流石は  
彼が親父は留守居を長く勤めて町家も立入り世事も賢き者、其の忤ゆる國武士との違ひ、  
己れが義理ある妹と假稱へ予が休息も差出して吉原通ひの不行跡を止やうと云ふ彼が策、  
主の爲めを思ひ家の爲めを思ひ、それ等を計つた、イヤ彼が趣向、實も感服、其の辨別も  
さく一時彼を惡みし予が過失であると、俄かに参酌の色が變はり眼を細くささつて「義  
イヤ、是れの九郎兵衛、藤の花は盛りか」九「へー、盛り居りますること……」義「へ、左様  
か明日は正午前又罷越すぞ」九「へー難有さ仕合せ」義「作事方の者を喚べ」近臣「へー」作事  
方が直ぐ御前へ罷出ると、義「ア、練堀も直すよめ及ばぬ、矢張り其儘黒堀まで差置け」作  
「へー、承知いたしました、  
サア殿様は夜の明けるのが待遠しい、早く夜が明ければ宜い、早く夜が明ければ宜い、夜

後百四十一

が明けたら小名木川へ往つて見やう、芳と云ふ女は確か篠原に相違ない、と云ふ御考へか  
ら頻りに御時計の點數を數へてモウ夜明けも程もあるまいと云ふ内も夜明けを告げる群衆  
の鳴聲、  
また明けるか明けぬ内も起出で給ひ、盥嗽手水を遊ばして「酒肴の用意も及べ」と俄  
か御酒宴の御催しゆを御家來方は驚いた、彌右衛門、源右衛門、其の他左仲、豆を召され  
頻りに御喜び遊ばして「義今日小名木川の下屋敷の花藤を見よ参るよ依つて供いたせ」  
と仰せられることゆゑ、ハテナ、昨日までの大變の参酌で何の御言葉もあつたが、俄  
か今朝の御機嫌が直つて朝からの御酒宴、併し御機嫌の悪いより御機嫌の飽いのは巨等  
が身も取り、ドノ位満足であらうと戸塚の計ひのことは更も知らぬから四人は佐竹の大守  
の御供を致して小名木川の御屋敷へ参りました、  
實も庭の廣く藤の花の左右は咲亂れ、御泉水の三町四面もあらうと云ふ大ささ、潮入り満ち  
て中央は築山があり、小さい辨天の祠宇などがあつて其の景色言語に述べ難く、道理ある  
かや大々名の御隠居所、其の隠居所を戸塚へ悉皆下し置かれ、戸塚が又手入れ等致したる

ことゆゑ、美しうございます、殿様の九郎兵衛も御會ひの上、庭の景色を褒め、其の内も酒や肴が来る、御箸を取つても更におウもその芳と云ふ者の様子を聞かぬ内味は美味しくさい、義「ア、九郎兵衛」九「エーッ」義「昨日其方の申した乳母の娘で乳兄弟の芳と云ふ者が酌いたしたと言ふも付て今日の催しだが、芳の如何いたした」九「ウ……ヘー……唯今支度を致して居ります、今少し御酒を召上つて居らせられます内より芳を御前へ罷出でさせます、甚だ恐入りますすがそれまで九郎兵衛御酌仕りまする」義「九郎兵衛の酌で、餘り美味うさい、ナットも早く芳を寄越せ、名からしてよし何んでもよしぢや、九郎兵衛さんと言ふ名の、ウも餘り酒宴の席さどりの珍重せぬ名だナ」と仰せられる。

篠田、小野崎其他の者よりサツパリ分らぬ、何を殿様の言つて居らつしやるかと思ふ内も、前かよ襖を開いてハツと両手を突いたる一個の美形、頭髮を三つ輪取上げて藍甲の簪、露の垂れたるが如く珊瑚の玉の簪、美しく丈はスラリとして中丈中肉、色飽くまでも白く、鼻筋どほり、口元尋常も致して眼中涼しく、頭髮は黒く致して眉毛一文字、實もや春月の雲を拂ふて出でたる如く沈魚落雁羞月閉花の風情といはれぬ限り、殿様の内膳を定めて

キツと見れば案も違はず三浦屋四郎左衛門の抱遊女篠原でございます、遊女の節の装ひと今日の装ひと天地の相違、白襟三枚、黒襟三枚、金モウルの帯も立田川の紅葉の模様は袷衣を掛け、帯かよ席を進み、芳「伊酌を仕りませう」と言つたときも殿様は唯茫然として看る、内も眼尻は下がり、鼻は歪み、流れる涎も於ては信濃國の水柱も等しく伊酌も出す夢も覚めるかと云ふ風情もて伊酌をせざる。

扱て此方は篠田、小野崎、大島、三枝等も於さましては篠原花魁が姿が變つて伊酌も出でたることゆゑ何とも戸塚も對して其の席上も居られませぬから一人立ち、二人立ち、皆んも立つて仕舞ふ、後より篠原花魁のお芳と對座いで、義「芳や、ドウも遊里の姿とい天地の相違、九郎兵衛が計ひよて是れからの誰憚るところもさく花も楽しみ、月も楽しみ互も借白髪まで相變らず月日を送るであらう、此方へ寄れよ」と篠原の手を拉り御側へ引寄せて雲時伊酌もございませぬ、それより殿様は三日目四日目位も伊遠乗と仰出されては小名木川伊下屋敷へ伊立寄り、今日は伊漁と言つては伊下屋敷へ伊出でよある、又側から戸塚九郎兵衛が芳を以て伊酒も澤山召上らぬやうも、伊意見を申上げるから、段々段々芳の伊意



見より今までの浮大酒も僅か召上るやうに相成り、浮不形跡のヒツツリと御止まり是れ戸塚の計ひが宜しいからでござります、

それと是れどの變つた御話でござりますが、能くその放蕩息子親父がガミ／＼小言を言ふ、小言を言へば云ふと言つて出掛るし、緩めれば緩めると言つて親を馬鹿にする、そこを旨く親父の計ひで忤か感じて、ア、悪るかつた、年を取つた者も苦勞を掛けちやア済まぬ、と云ふやうに致しませぬの親の計ひもありませぬこと、又亭主が頼り遊女買ひに參る、幾ら意見をしませても用ゐぬ、或る日、船に乗つて深川へ遊びに往くのを知つて居るゆゑ背後から羽織を掛けながら羽織の袂へ「何も御慰みかござりますまい、御船の中で御遊ばすやうよ」と女房がヒョイと入れたものがある、亭主の夢中で毎夜通ふから何の氣も附かぬ、船中にて退屈の餘り先刻女房が途中で御覽さういと言つて袂へ掛り込んだものがある取出して開いて見ると

風引かぬやうに召しませ猪牙とやら

と書いてある、それを亭主が頼り感じて途中より船を乗返し、それより遊女通ひを止ま

つて家富み榮へ、借白髪まで無事添へ送びたと云ふことござりますが、さて意見の仕方、ツかしいものでござります

御話變つて此方の名川丈左衛門、野尻忠三郎、家老梅津半右衛門、是りやア皆殿様と不行跡仕立つて家中の者も疎ませ、御國の者も疎ませ、御親類方へ手を廻りし御隠居をさせ參らせて御別家秋田新田一万石、佐竹壹岐守様より御養子を貰ひ其の處も乘じて梅津半右衛門、是れの家老末席ゆゑそれを殘念に存じ戸塚九郎兵衛と同高同石にて日常彼が下は附き、下知を受けるのが忌々しくて堪えられぬところから名川の怨讐に依つて事を疎らんとして家を失はんとせし風あり、けれども元來名家ゆゑ一旦御咎めはありましたが、又々其後再興と成りまして今以て梅津の家は浮繁昌、前々よりも言上いたします通も澁谷、戸村、梅津の三人は、是りやア佐竹名代の家老でござります、そこで悪人が打寄つて評議の下浮不行跡仕立てるの浮國で浮抱へおされた愛妾お百合、是れを喚び寄せて事を計いんと俄か國表へ忍びの使者を遣はして百合を召し寄せます、此方のお百合、書面を見るより早く懐かしき江戸表ゆゑ取急いで罷下る、出生が大坂で江

戸で悪事をして女で佐渡へ流されたるのを百も始つてお百も終る、島役人を殺して其の場を立退き名前を變へ、姿を變へて當時佐竹の愛妾お百合、實は三國傳來の悪狐も等しき毒婦されハ男子を誘すのハ名人でございますゆゑ、江戸表へ參つて是れから殿を御不行跡も仕立てんと殿の御目通りへ出たときも初めてお芳の方と云ふ此のお百合が會ました、百合心中も思ふやう、扱て世の中に背た者がわれハあるもの、幼少いときも別れしゆゑ幼顔と云ふものは種々も變はるものだが先年秋田無宿の重吉も吩咐け隅田の土手にて殺された太田屋の峰吉と云ふ其の古へ深川の盛妓、其の娘の芳と云ふ者も能く背て居るが名前も芳、様子を聞けハ三浦屋の抱遊女篠原と云ふ者、扱てハ我が殺させたる峯吉の娘でありしよと、内心驚いたが大膽不敵のお百合、何れ食ハぬ顔で挨拶をして其の場を別れまし

此方のお芳の方、是れまた姿形の變り、名前も變つて居りまするが、丈恰好より頭髪の上、名代の美人の藝名小三、後よて聞けハ母を殺せし大悪漢、其の後佐渡國へ流され島にて相果てたと云ふことを承りしが、死んだと見せて島を脱け佐竹の愛妾と成つて御家より仇あすか、一つハ母の敵、一つハ大恩を受けたる御當家の御爲りもあらざる女子ゆゑ、戸塚九郎兵衛様と心を協せて取つて押へたいものだと、お芳の家を思ひ殿を思ひ、且つ其の古への仇もあれハ是非取つて押へやうと戸塚も言ふ、九郎兵衛是れを聞いて「九」そりやア容易さらざることを、確かき證據が擧げられハ迂濶も手を掛けられぬ、萬事孔兄も任せられよ」と急立つお芳を押鎮めて萬事も眼を配り更ハ油斷を致しませぬ、此方ハ悪人名川を始め其の他の者共、種々手を換へ品を換へ百合を以て左兵衛佐殿の御心を動かさんとすると雖も茲も芳と云ふ賢婦があつて戸塚九郎兵衛と云ふ忠臣の下知を受、能く守り、静かハ殿に御意見を爲すゆゑ今ハ御酒も澤山も召上からず、偶ハ御遊興ハ小名木川の御下屋敷まで御漁ぐらぬのことでございます、萬事戸塚の爲りハ隠謀の先を制けられて残念も存する悪人共、此上ハ是非も及ばず戸塚とお芳の方を殺より外に仕方あるまいと考へ、計略を以て戸塚とお芳の方を無き者よせんと企謀る、實ハ惡むべき悪漢共でござりまする、

後百四十八

扱て又御國表より一ト騒動を起し、其の處に乗じて事を爲さんと云ふは、一つの考へがあるから、野尻忠三郎と云ふ者が家老の名川と心を協せて御前へ罷出で言葉を巧み申立てるやふに「今般加州様より梅姫様御婚嫁に付いて當日御式の御入用、御屋敷の御手入れ、御國表の御城も大破いたしました、是れ亦御手入れも相成らねば成りませぬが、兎も角今までの御入用勝ちで御國表の御金も充分あらざるやうに承知いたしましたるゆゑ、三年限りの紙幣を御發行し遊ばして御婚嫁の御入用御國の御城普請等も其の金員を以て御拵へ遊ばせられ、其の後御儉約を遊ばしますれば新羅様以來の御名家ゆゑも豊年も打積り忽ち右の紙幣を御引上げの上正金を御引換ありまするのは鋭く委の映るが如く、茲に一時御紙幣を御發行遊ばせられませぬければ御婚嫁の御入用、御里方が百萬石の加州様ゆゑ萬事御派手も遊ばしますれば、此方様とても他からの御婚嫁と違ひませうから早く手當を致しませぬければ其の場も至つて差向へど相成り、出入り町人共より致して不都合の金子を借受けまするよりも遠き慮り、今の内紙幣を御發行遊ばせられて然るべうござらんと惡むべきところの悪人共、言葉と揃へて申立てました、是れ御世も謂ふ通り世間のこと

と疎いのに諸侯の常態實も」と云ふので早速名川丈左衛門野尻忠三郎其の他も兩名は此の者を江戸表より御國へ遣はして紙幣と云ふものを御發行し相成ります、  
 此の紙幣の爲め御家の騒動を惹出しましたのだが、そこへ殿様方の御存知あらざらぬ萬事家來の言ふことを聞き、チヨツと考へて深き御考へもあく御許しよ成りますのが世間も往々ありませぬ、左れば往昔の諸侯方り下方の事情を御存知なく惡しき家來共の伎倆に御迷ひおされて忠臣を遠ざけ、下方から上ツた所の婦人の一言を御信用遊ばします、現加州家も於てのお貞、黒田家でお秀、仙臺家でも婦人宜しからざる者があつた由御本も書いてござりまする、又唯今言上の佐竹様のお百合、孰れも惡むべきの毒婦でござりまするそれが下方のことと能く御通じよ成つて居ればトんと其の邊のことを御信用も無く惡るい者と看做せられ直ぐ御暇もあり、改めて女中等も御抱へに成ります、當節の御諸侯様方の御幼年の頃より御學問を御修業遊ばして御年頃も成らせられませぬれば御洋行おらせられて各國の事情を御熟覽の上御歸朝遊ばし、兵籍も入つて戰場往來を遊ばされませぬから御存知、それゆゑも御不都合の藥もしたくも無い、新橋邊の處

妓のドウ云ふものだ、柳橋の藝妓のドン赤ものだをチャント存じて更な遊遊ひさ  
と云ふこといささせぬで奥方様を大事に守り遊ばし、御交際くで諸方へ遊遊興  
の往らつしやるけれども不都合の決してございませぬ、  
餘事を申して恐入りまするが寛政は三修隠居と云ふものがございませぬ、コリヤその寛政  
あたりの修諸侯が修通家だの、粹斎殿様だかどと云ふことを能く下方で噂を致ししても  
ナカク當今の修諸侯様方の百分の一より至りませぬ、其の三修隠居と申すのは備前岡山  
の太守松平内藏頭様修隠居をさされて一心公、雲州松江の太守出羽守様、後々修隠居をさ  
されて不味公、有馬の雪齋公、此の修方々を三通と申します、  
茲は往昔の御諸侯様と唯今の御諸侯様の相違のところを申上げますが、彼の備前の御隠  
居一心公が長唄の名人芳村風幸、此の者を修前へ召されて安宅の淨瑠璃を語れと仰せられ  
ました、昔は是れを「坊主の坊主の大坊主の」と語りましたが唯今で「端越の月の蔭」  
と語る、それの古の風幸の大名小路の備前公の修屋敷へ召されて殿様は修端越しと懸附さ  
れます、此の風幸は其の頃名代の美音でございまして、充分に張込んで「坊主の坊主の大

坊主の」と語らうとする内は修藤中より坊主頭顱をヌツと修出し遊ばされたから「坊主の  
坊主の」と語りませぬで、ヤツと言ったが流石は名人だけあって直ぐは文句を變へて「端  
越しの端越しの月の蔭」と語りました、それで今以ちまして斯くの如く語りませぬ、  
いづれも寛政は越中殿と修改革の議論の合ひませぬので修隠居を成されましたのが雲州  
公は備前公でございませぬ、越中殿は唯修改革を頻り修修約のこのみ仰出される、  
ソコで雲州備前の修兩公が曰く、ソリヤ修約をするの宜しいやうなもの、大名がさう  
修約をしたら市中町人共の生計が立つまい、程能くせぬけれども行くまいかと云ふので種々  
議論を立ッたけれども越中公は固く執つて既修諸侯様方は修綿服とまで仰出された、そ  
れゆゑ修兩卿は修隠居をさされました、テ越中様は後々樂翁様と申上げ大學者で寛政度の  
修改革に付いて中山大納言殿と議論をされた名代の修人、又一心公、不味公は泰平の今  
日とさう修約ばかりした日と市中の者が今日と差開へやうと云ふ下方の事情を修酌取り  
ませぬました、難有き思召してございませぬ、俚諺に申す通り過ぎたるの猶は及ばざるが  
ごとく總て物の程を行かぬければ行けませぬ、今以ちして不淨のものされど何置置と

か云ふことを申される六尺は長さ、三尺もしるさきと云ふこと下方で云ふのは是れその寛政の頃の浮改革の悪口でござります、扱て或るとき一心公と不昧公と大名小路の浮屋敷に於て浮酒を召上つて居らせられる、雪が頻り又降つて参つた不「イヤ、是れはドウも雪は豊年の貢と云つて目出たものぢや、近年稀れの大雪、何んと忍ヶ岡の雪景、隅田川の雪景、是れを一見も参らうぞりござらぬか」「それこそ至極宜し」と云ふので浮隠居を成されてもまたそれは此の浮若殿でござり、固より當今で云へば浮活潑の浮性質、ソコで浮麻役人其の他浮近臣等で大名小路の浮屋敷を浮立出で相成りいづれも馬乗、駒の頭を揃へて忍ヶ岡へと浮乗込み成る、忍ヶ岡も唯今は馬の断場と成りまして雅致を失ひ居りますが古への忍ヶ岡と云ふもの作らず巧まず致して自然の雅致、東叡山より向ヶ岡も積もる雪、實もや銀世界と此のことあらん、暫時浮隠遊ばせられて浮馬上より手を拍つて悉く絶景の浮賞美あらせられ、それより駒の頭を返して下谷廣小路黒門前と云ふ所から三橋を渡り、袴腰と云ふ所へ浮掛りあると、唯今の雁鍋と申する割烹店がござり

ますが、あれは近いもので其の古への彼處は内田と申す居酒屋がござりました、唯今茶屋とか申す牛屋が此の内田の舊地でござります、其の前へ浮掛りのときは家内よりフーンと云ふ味美さ句が致した、不昧様は浮馬を止め「コラノ家來共」と浮自分の家來を召されて「彼の丸又二引の紋の附いたる風除障子の内より味美さ句が致せしが、何を匂らせたか、尋ねて参れ」家來「心得ましてござります」と右の内田と申す居酒屋へ参つて「コリヤコリヤ、誰か居るか」入口より浮馬をオタリと駢べて立派な浮武士方が立て居て「コリヤコリヤ誰か居るか」と云ふから居酒屋の番頭は驚いて其處へ飛出し「番頭」へ「家老」其方は何ぢや當家の支配人か「番頭」エー當家の若者もござります「家來」餘り若くはあらず「番頭」へ、それでも若者と申します「家來」ナニ左様か……貴様の家から香氣しき響りが致したか何を騒らせるか速く申せ「番頭」へ「香氣しきと申すの何で……」「家來」香ばしと云ふの香ばしき味美さ句ひを指して香しと云ふ「番頭」へ「響り」と云ふの……「家來」響りと云ふのフーンと句ふと云ふことだ「番頭」へ「左様で……別な美味しものもござりませぬが、今アノ葱餅を煮て居ります、是れぢやアノござりませぬか」と鍋蓋を

取るとアーンと云ふ匂い、

雪の降る日は葱鮓ほ美味しいものございませぬ、あまた方は餘り此様ものも存知  
 わらッしやいませぬが、雪の降る日は葱鮓を来た日よア其家の前は通り切れませぬは  
 のこと家來「是れは何んと申す」番頭「へ……へ……葱鮓を申します」家來「何んぢやと……」番  
 頭「葱鮓と申します」家來「葱鮓どのドウ云ふ次第だ」番頭「へ……葱の上へ鮓と云ふ鮓を載せ  
 てあるので是れを葱鮓と申します」家來「葱鮓を載せて来たのが、然らば葱鮓であらう葱  
 鮓の片言だ、以來氣を附ける」番頭「へ……へ……」家來「恐れながら上へ言上いたします、唯今  
 香ばしき匂が致しましたのた葱鮓を煮て居りまするので、それが上の湯鼻に附きましたの  
 で……」ハテ葱鮓か……岡山公、岡山公「ハ……」不「ドウも餘ほ空腹、木母寺より充  
 分又支度を申付けて置きました其處までのナカク難儀ゆゑ其の葱鮓で一杯呑ッて往か  
 うでござらぬか」そのに至極宜からうと、大名が居酒屋へ飛込んだのは備前様と雲  
 州様が始めて湯雨卿の湯馬からヒラリヒラリと降り下りある、雲州の湯家來中村金太夫と  
 云ふ人が先さよ参りまして 金「コレ〜若者、湯雨卿入らせられたが湯座敷は何處だ」番

頭「宅よア別々湯座敷はございませぬ、湯油樽へ腰を掛けまして……」金「湯油樽へ腰を  
 掛けられるか、貴様達が休息する部屋は……」番頭「へ、それでも……」金「宜しい掃除を  
 して敷物を致せ」當今あらハ毛布と云ふものがございませぬ、けれども其の時はございませ  
 ぬから毛氈を出したが、而も湯離様の毛氈で所々斑染がある、それを敷きまして居酒屋  
 の番頭はテノテコ舞ッて 番頭「へ……其處へ……」此方又腰を掛けて呑んで居た者は葱鮓を  
 かれて見て居る、

其の内に湯雨卿、湯一ト方ハ三十餘萬石で湯一ト方は拾八萬六千石の湯屋居様方が其處へ  
 入らせられる 金「コレ〜箸を下し置け」呑んで居た奴は驚いたテ、其の内又スーッと湯  
 座敷へ湯通りある 不「コレ金太夫、珍肴佳肴鮮魚の類は何ぢや尋ねて参れ」金「ハッ……  
 若者珍肴佳肴鮮魚の類は何ぢや」番頭「へ、何でございませぬ」金「珍肴佳肴鮮魚の類は何ん  
 だヨ」番頭「手前方より狛コロはございませぬ、二三日前ハ鮓が……」金「鮓でいさら、  
 珍肴どの珍らしい肴と云ふことだ、總て味美き魚の敷は何と何があれと云ふのを尋ねるの  
 だ」番頭「へ……それぢやア肴の敷をハ湯雨ねさるので……」金「どうも、泰平の今日ハ珍肴

佳肴ぐらゐが分らぬとは困つたやつたナ、以來學問を致せ」番頭「へー、菜は半平、蛤、蛤蜊、鍋、バカ鍋、潮先鍋、今の葱餅でござります、其の他蟹、蝦、蛤、林鮑でござります」金「イヤ、どう早く言つて分らぬ、今一悪申せ」番頭「菜は半平、蛤、蛤蜊、鍋、バカ鍋、潮先鍋、今の葱餅で其他蟹、蝦、蛤、林鮑でござります、旦那様は學問をどう仰しやるが學問を成すつても……」金「コラ、割目正しからぬれば之れを食はず時さうなれば之れを食せずと云ふことが古の書物もあるカナ、ぢやアも依つて其の葱餅、酒の良いのを出世」番頭「へー、ドウも竹屋ではござりませぬから推はござりませぬ」金「分らぬ奴だナ、ドウも云ふのは酒のことを指してござりませぬ、貴様達は酒を云ふが彼れば、ドウも云ふは酒の良いのを廻ると仰しやるので」金「どうも」番頭「へー、葱餅、リヤン鍋、上物二合」さう斯うする内、胡桃足の日光膳の所々剥落て居るのよ、澤庵の香物を山盛り、盛り、所々剥落たる塗着、厚焼の猪口を二つ三つ載せ、番頭は尻を端折り、襷を掛け、足袋も穿かぬいで兩方の指に蚊を拵へて切れ掛つた下駄の鼻緒を引ッ掛ケガンツ〜ガンツ〜引摺りながら番頭「へー、御馳入」

雲州公は驚いて不「コレ金太夫……」金「へー……コレ〜高貴の御方の前へ襷を掛け尻を端折つて出る奴があるか、今度鍋を持参するときは襷を取り、尻を下して参れ」番頭「へー」金「殊に鍋は目八分も持て」番頭「へー〜目八分とは……」金「目より八分上げて持つて来るのだ」番頭「へー……オ〜ッラ大變だ早く火鉢を持ッて來う、蹴躑かゝものから鍋破りの日朝様もあつて仕舞はア」鹽て葱餅の鍋の蓋を取ると五分切の白葱、餅を其上へ載せ、山椒をチヨツと振掛けてあるからブーンと云ふ句がして得る言はれぬ味、殿様方が雪の降日は葱餅を召上つた日は此の位美味いものはあり、それは山椒の匂ひがするから又一段と宜しい、左る人の句よ

山椒は鐵砲鍋の口火かき

と云ふ句がある、サア多雨卿ハ又變つた斯う云ふ所で召上るのも多遊興と相見えまして多機嫌能う召上り、伊家來方にも多酒を下し置かれます、向ふの方ハ麻舎仲間、馬丁、其の他勝手も食べると云ふことを重役衆から言付かつたからサア斯う云ふとさなと云ふので頻りに食べ込んで居る、

此方の方で、葱餅を召上るところが美味しいの美味しくないので、腹加減は宜しほ酒もその調合酒でございませうが、今ヨツと下方で呑むの、又たあまた方が好む我々共、又あまた方の呑むのを好むもの、充分召上りまして、浮舟の味は、はかばか機嫌能く、ヒラリヒラリ浮馬を乗し、眞一文字本母寺へ往らせられるが、又本母寺の浮料理、充分の浮手當でございませう、其浮料理をば、浮家來方も充分下し置かれ、日が暮れて、備前様の大名小路の浮屋敷へ浮歸り、雲州様の赤坂の浮上屋敷へ浮歸り、

扱て翌日、よりまして不味様の浮家來中村仲右衛門と云ふ者が、例刻もより、腹加減の浮目覺めが、浮遅いことゆゑ、浮病氣で、いゝもあらせられ、いせぬかど心配して、浮枕頭へ兩手を突き、仲一恐れながら伺ひませう、今日の餘ほ、寒氣が強うございませうが、浮寒の浮障りでもありませう、例刻よりお起きが、浮遅う入らせられませうが……」

「不」イヤ、仲右衛門か「仲」へ「不」ドウも脚上が痛んで行かぬ、餘り調合酒を呑り過ぎたゆゑ、劍菱の古今の名酒ぢやが、今日頭の痛いの、コリヤ、ラン、ビシであらう「仲」へ、それで浮頭痛があらせられますので……然らば、モウ少々……」

「不」イヤ、モウ目が覺めたナ、……イヤ、ドウも頭痛が致して

行かぬ、一時起きて一杯呑らぬと、氣分が宜くさう、肴の支度を申付けける「仲」肴は何を仕立てさせませう「不」葱餅が宜からう「仲」へ「不」イヤ、葱餅が宜からう「仲」へ「不」分らぬ奴ぢやナ、葱餅が宜い「其の古へは三度開いて分らず、四度目を伺ふと云ふの、腹まで切らうと云ふ決心がなければ、伺はれませぬ、中村仲右衛門は眞ッ青な顔で、御料理番の所へ出て来て「御料理人……」

「料」へ……「仲」今朝御酒宴の御肴は、チキアツと云ふものだ「料」へ……「仲」幾ら言ふても同じなチキアツと云ふもの……「料」コリヤア困りました、モ一逼……「仲」モウ一逼云ふてもチキアツと云ふものだ「コリヤア昨日殿様が召上ったもの、相違ないから御供方は問合せるが宜からうと云ふので問合せる、葱餅と云ふことだ、御料理方は驚いた、此様ものを上は昨日召上ったか知ら、併し又變つたことを御好みなさるのには、上々様の常習だが、居酒屋の積まりと、ころへ這入って能く召上ったものだナ、と御噂をしきながら料理を取掛る、

そこで御小座敷をスツカリ掃除を致す、御庭は一面雪が積り心なき小雀が、松ヶ枝と積れる雪を散らすは何事やら、殿様は昨日の葱餅が美味しくて美味しくてあらぬからそれ



が食べた一心御頭痛を御堪へさせられて御目覺めにあり、能う食へるであらう、と待つて居るところへ御小性が指足で持つて来たのを見ると鍋が白いヲ、ハナナ、ドウも昨日の鍋とは鍋が大い又相違いたす、昨日のは黒いが今日のは白い、それは其の筈で、昨日は銀鍋、今日は銀鍋、麴て蓋を取つて見ますと蓋は割蕪として飾は眞ッ四角の切り、一旦油を抜いてスツカリ煮込み、其上御毒味役が三度も四度も蓋を取つて中を撿め長蛇下を御小性が指足で持つて来たから湯煮汁の冷めて仕舞つて旨くも何んともさう、イヤ腹様の怒るまいことか湯鍋を取つて湯庭へ投げ出し、不「予十八萬六千石を頂戴いたして何不自由さき身の上されど昨日の如き良き料理人を抱へさいのの残念千萬の至りだ」と仰せられた、是れその雲州様すら、其の通り下方のことより湯暗いヲ、それが段々段々と開化けまして唯今我々共が御前講を致しまするの何のやうなことを申上げては御合點遊ばせられますから軍談師が御前へ出まして講じまするも誠は樂でございませす、併しドウも不品行ある言葉を發する者が往々ございませす、彼れは誠は同業の耻でございませす、是れは深く戒め慎んで講じたいこととございませす、コリヤナヨつと唯以前と當今の御諸侯様の相違を申

上げますまでのこととございませす、  
扱て此方の佐竹の殿様、悪人の徳邊は依つて紙幣を御許しに相成る、是れが御家騒動の根源、愈々紙幣騒動は掛ります、

却説御國表出御國秋田の郡久保田の城主左兵衛佐義政公の御領、三年限りと仰出された紙幣、それまで先づ御話もございませぬ、扱て三年経つて又三年と御觸直し、  
御一新の御領は十三年限りと云ふ紙幣が出ましたけれども不都合ぢやと云ので早速彼れは御直しに成りました、誠は當節の紙幣の往來をするも重くなく、少々位は採りても斷難れても上の御判は相違がなければチャンと取換へて下さる、金銀の悪るの御見掛けです、紙幣の其のやうな損じのございませぬ、誠は市中の融通も往昔とは打つて幾ばりまして生活し宜うとございませす、今まで諸侯様御國表の紙幣は種々不都合が有りまして此の紙幣より騒動を發せしは往々ございませす、併し其の古へより紙幣の宜しうのは肥後國熊本細川様の紙幣、それと伊勢の松坂の紙幣、是ればかりはモウ採りやうが、切れやうが、

何處へ参りましても取換へて呉れます、熊本様も申上げれば何處からでも紙幣をば出先から正金で返へすと云ふのは流石の流石、恐入りなりましたことでもござります、

茲は港本町と申する所の浮世所申しますと横濱と云ふやうな土地、久保田の城下より離れまして海岸寄りのナカノ、鎌倉の地でもござります、其處も若松屋と申す呉服店がござります、主人庄左衛門は四十一歳のとき病死いたしましたるが、番頭の四郎兵衛と云ふ者も遺言をして幼少の庄之助を相續人仕立て、萬事四郎兵衛が家内のことを引受け、塵一踏でも私なく、華客大切商賣大事、實に之れを指して白鼠と云ふ支配人の四郎兵衛、三百兩の紙幣を切換へさせぬければ一夜明けましても商賣が出来ませぬから小僧其の紙幣を背負はせて出る、港は港で紙幣座と申しますものがござりますして、其の紙幣座元締を勤めて居りますものは奥田七兵衛と云ふ者、元と是れば御船頭で彼の百合と云ふ愛妻を酒田の沖で助け、此女が當時殿の御寵愛の百合の方その縁故も依つて重役も取り入り賄賂を充分遣つて紙幣座元締役と成り、役人と心を協せ上を偽り下を虐げ、私慾横領も及んで金銀を掠り取り、マルテ請侯の生計のやうも致して居りまして其の勢ひは宛から鳴神の如くそれゆゑ誰一人として奥田に向つて不足がましいことを言ふ者もござりませぬ、然るも依つて益々増長し、町人や漁父の皆んも犬猫同様も心得居ります、其の奥田の役所へ唯今の四郎兵衛が参り、四「浮世所申します」門番「何んだ」四「エ、港本町若松屋庄之助手代四郎兵衛と申する者……」門番「……」四「紙幣の切換へを願ひも申してござります」門番「ア……どうも、モウ少しすると役所が引けるから早く往つて切換へを願へ」四「へ、總て斯う云ふ役所の門番共は虎の威を藉る狐とやらで、横柄もものでござります、

聽て役所の椽下の砂利の上へ兩手を突き、マルで白洲へ出たやうも、四「恐れながら申上げます」役人「何んぢや」四「港本町若松屋庄之助手代四郎兵衛でござりますが切換へを願ひに出ました」役人「さうか、證據を持参したか」四「へ、持参いたしました」役人「主人の印形も貴様の印形を捺してあるか」四「へ」役人「金子のドノ位だ」四「エ、三百兩御切換へを願ひたうござります」役人「何んだ」四「三百兩切換へを願ひたうござります」役人「コソ、十二月の二十日限り百兩以上の切換への罷成らぬ、正月の十六日より百兩以上切換

へよ及ぶと云ふの元々三年前紙幣を發行遊ばせられる節町人百姓残らずへ申渡した、況てや町人のことゆえ汝等の心得罷居るであらう、又々一年一年觸直しても之れあるゆえ、存じ居りながら三百兩持参し及び二十五日と云ふ今日、切換への成らぬの辨へながら持参いたす役人又迷惑を掛けて心快しとする汝、三百兩の切換へ罷出るとい甚だしき奴ぢや、切換への儀の罷成らぬから下がれ、九十九兩三分二朱まで切換へて遣る「四」エー、恐れながら御役人様へ申し上げます、百兩以上切換へのあらぬの辨へより仰渡しゆえ心得罷居ります、それを推して切換を願ひに罷出ましたの實は上役人様へ勝手敷を掛け、何かと心配を相掛けまして恐入り候へども吳服商と申しますもの米澤より致して米澤袖を買入れ、信州上田より上田袖を買入れ、或は京都よりの帯地縮緬、南部の縮緬、結城の袖甲斐國の袖、諸方から掻集めまして商法を致します、切換分内の品を買求めてそれで商賈が出来すれば何もコレ推して切換の儀を致しませぬ、相成らぬと知りながら罷出ましたの不屈の候へども何卒商人の難儀を切換ひ下さると思召して三百兩切換への儀、偏願ひたうござります」役人「とりや罷成

らぬ總て物より法と云ふものがあつてな、成らぬと言つた以上何處までも成らぬ、存じて居ながら持参いたすの上を見越した不屈者と云ふものぢや、トウあつても百兩以上の切換の正月十六日後でなければ相成らぬ」四「その切換役人様は非道でございませう」と我を忘れて四郎兵衛が言ふと、役人「非道とい何の一言、道は非すと云ふのが非道は何を道と違つたことをした、御城普請、婚姻禮等の御入用も付いて三年限りと仰出されよあつたところ、御都合は依つて今年三年の領主の權もあることと致して汝等が何も此の所へ來つて彼是れ言ふところはあるまいがな、兎も角汝は於ての當役所を何と心得て非道の何のと言ふか、其の一言を發する上、最早一錢の切換へも罷成らぬから持歸れ」と紙幣を投附けたから紙幣の四方は散亂する、下役人共も於ての飛掛つて打擲し及び、散々紙幣を蹂躪りました」

斑染があると言つての取ッ換へ、焦げたと言つての取換へも成る、其度毎に幾らか手数をだしてその焼棄もさつて仕舞ふ、實は情けなき今度の紙幣の不都合、但願申す通り泣く兒と地頭より勝たれぬで、無念と思へば詮方なくも四郎兵衛の其の紙幣を掻集め涙が

ら奥田の門前を出て小僧は湯附けて紙幣の店へ持たして遣り、其の身の通番頭のことゆ  
き己れが家へ歸りました、

後百六十六

事の出来る時節と云ふもの仕様のさいもので、何時も家を明けたことのない女房お若  
其の日も限って二歳ある三之助と云ふ男の子を十文字引ッ春負ッて自分の里方へ参り  
ました、此の女の里方と云ふのは、網元をして居りまして博徒の親方、備前屋の平六と言  
ッて乾兒の三百人からあります、元々三段目の相撲取で舞槍の平六と言ッた人、其平六  
が相撲取を廢業て上州へ参り馬庭念流堀口の門人と成ッて劍術を習ひ、それより奥州口へ  
往ッて男を賣り、國へ歸ッて備前屋の平六と名乗り、網元をして居るエライ親方、どこ  
か一人娘のお若が番頭四郎兵衛の忠義篤實と戀れて親の稼業の肌合稼業をしてる私ドウ  
か堅氣の人のところへ嫁歸きたいとナカク心懸けの善き娘、自分より違ッて親と親んで  
嫁歸いたのが四郎兵衛の家でございます、平六は其の二歳と相成ります三之助と云ふが  
初孫のことゆえホーッと可愛がり連れて往くと、マルで掌の中の壁の如く、天窓を敲か  
うが何をしやうが笑ッて居て欲しがらるものを買ッて遣る、それゆえ我を忘れて日の暮れる

も知らずお若の遊んで居る、

此方の四郎兵衛、宅へ歸ッたところが向ふの老姐と老翁が言葉を描へて「お若さんの備前  
屋へ往きおされた、モウ程お歸ッて浮出でございませうが、火が無けりや宅もある  
から持ッてお出でございヨ、湯も沸いて居るから持ッて往ッて御使ひござい、モウお若さ  
んの程お歸ッて来るでございませう」四「ハイ、難有うございませ、少々書物がございま  
すから……其の内にお若も戻ッて参りませう」と水口を開けて戸内へ遣入り直様二階へ  
上りました、痲症の強い人ゆえ段々の首尾を書いて腹一文字と描裂き、餘は口惜しか  
ッたど見えて五臓を掴んで壁に抛附け、腑を掻切ッて三十九歳を一期として物の美事と切  
腹、

お若のソッかこと、知らぬ誰ぞや彼の夕間暮れ、三之助を背負ッて我が家へ立歸  
り「若」お歸りの老姐さん、長く留守しましたして申譯もございませぬ「若」お若さん、四郎  
兵衛様の御店から心持が悪いと言ッて引いて来された、悪い風邪が流行るだも依  
ッて大事よしおさるが宜い、大層顔色が悪かつたから早く往ッて世話をして上げ、御湯

後百六十七

も沸いて居れば火もおこつて居るから……」若「難有うござりますすヨ」と云ひながらお若の水口が開いて居るから這入つて見ると墨の血だらけ 若「ヒエ……隣りの老姐さん来て下さい、向ふの老姐さん来て下さい」と怒鳴るから何事が起つたか知らずと思ひながら、日所能くして呉れるゆゑ膽を潰して二人が飛んで来ると墨の一面の血、階子段を蹴上つて見ると四郎兵衛は腹一文字を切つて五臓六腑を掻出し身体一面鮮血に染みて居る、お若の之れを見るよりウーンと氣絶、老姐と老姐は「お若さん、ウツカリおし、お若さん、ウツカリおしヨ」と呼はりながら薬を與へ水を吞ませて介抱する、漸々己れ又歸つて、子まで成したる夫の最と淺間しき死な様を見て又もやウーンと氣絶の様子、色々介抱をして「ソレ備前屋へ誰か」と云ふので近所の者が宙を飛んで細元平六へ知らせる、乾兒を二人供も連れて平六が來つて見るとお若は二度氣絶したと云ふ、直ぐも二階へ上つて見れば夫の死骸又抱き附いて泣いて居る、子供は傍でオイ／＼泣く、二階の墨は一面の血、若いときより致して血の中で成長つて是れまでの親分もあつた人だからそれにハツとも恐れはしませぬが、何れしても可愛想な娘が墓つて持つた亭主が此淺間しい切腹を見て氣

絶すると、子と思ふ親の心はいづれも同じ 平「お若、ウツカリしる、斯うあつて仕舞つた以上は幾ら喚んでも叫んでも迎も元々復る氣遣いねい、氣でも違つたんぢアあし、晝飯の膳子は己れが讀んで聞かせるから氣を鎮めて聞け」平六は物も落附さむる大親分、是れから讀下して見ると紙幣の一條が詳しく書いてある 平「お若、三年の紙幣を堪へま堪へたところで又三年との觸直した、町人百姓は必死の難儀、サア六十一歳の本封も返る平六が宗吾郎の二の舞をして生命を捨てるも依つて、ヨ一手前が當所も足を止めると面倒だ、己れの弟野郎は上州木崎の鬼の源太と云つて此奴も乾兒が三百人からある、今上州口では大親分、委細を聞いては居られぬから……權次、己れも代つて弟野郎のところへ此の始末を能く言つて呉れ、サアお若泣くところぢやアあし」と一人の乾兒も三之助を背負はせ、一人の乾兒もお若の案内をさせ懐中も有つたる金子を百兩取出して 平「お若、これを旅用よし、弟野郎の顔こそ鬼のやうある顔をしては誠な親切な野郎だ、殊も己れの親身の弟だも依つて悪るいやうなしねい、當所も手前が居て若し從類を絶すことよき可憐い孫の生命まで取られる日にありやア仕様がよい、サアモツ己れが生命の捨てどころハ此處

より外もやア無いと覺悟をしたからより早く往け、早く往け、追手が掛ると面倒だから少しも早く往け」

馳て四郎兵衛の死骸を片付け、さうして後の始末を三軒兩隣の衆も頼み、書置を懐中へ納れ、腹を切つたる婿四郎兵衛の首を打ち落し、スツカリ切口を洗つて紙をハビツタリ貼り、彼が片袖の血の染みあひところを切取つてクル／＼巻き、其上を風呂敷を包んで蹴足より、豫て淺間大菩薩を信じて居るゆゑ、大きな珠敷を首に掛け、始終念佛を唱へながら樂音の平六、長物腰を打込んで供をも連れず唯一人奥田の役所へやつて参りました。平「御頼み申します、御頼み申します」門番が「何だ」平「へー、へー、魚町の備前屋平六で……」門番の急よ、ハア、魚町の備前屋の平六さんかい、是れは是れの……」馳て飛出して門番「御役人様の今御飯を召上つて居りますが、サア備前屋の親分、御案内を……」正直者奴で備前屋の平六と聞きやアがったものだから俄々しくクル／＼高麗鼠みたやうに廻つて役人へ其のことを言はうとする、

途端に障子を開けて内から出て来たのが奥田七兵衛「コレ魚町の備前屋さん、今私の御宅

へ上らうと思つて斯うやつて支度をして出る途端、丁度宜いところへ……」平「ぢやア私方へ御出向さよきるところでしたか、私もそれの丁度宜いところで御目撃しました」七「何もしろ備前屋さん、此方へ御上り、御役所のモウ引けて今御酒を召上つて居るところだ、直ぐよ……」平「エー……御役人様へ申し上げます、私の魚町の備前屋平六でございます」役人「コレコレ備前屋、早速貴様と言ふがアノ奥田屋の手代と云ふの貴様の婿ださうだ、ところが今日押詰つて三百兩の紙幣を持って来て切換へて呉れと云ふ、貴様も知つての通り二十日過は百兩以上の切換へ成らぬ、それゆゑモウ相成らぬと云ふで、それの非道である何でも切換へて貰ひたいと云ふ、成らぬと云ふのを承引ぬゆゑ下役は打擲された、それで聞けば宅へ歸つて切腹したさうだ、それゆゑ早速備前屋は會つて話をしたか宜からうと斯う言つて今奥田七兵衛がお前のところへ往かうとしたところだ」平「エ、一體アノ野郎が町人よ似合はぬ生物識よチンマンカンマン私もやア分らさういけれど彼奴の何ぞと云ふと誰人だの賢人だのと申しまして誠々商人より不向きの野郎、無御役人様の御氣は障つたことを申したのでございませう、ドウか私が御説を……」役人「御説どころではさう、今度の誠々

備前屋氣の毒だ」平「就きましてはナ、三百兩ございませぬければ一夜明けても商賣が出来ませぬ、ドウか備前屋平六も切換へて下さつたと思召して極内分も三百兩、七草まで一時御借り申しまして又其の後御切換を願ひたうございませぬ、是れが世も謂ふ商人の遣り様りで諸方から仕入れまするのも正金でございませぬければ品物を仕入れることが出来ませぬ、申すの恐入りまするが此の紙幣が米澤へ往つても通用すれば庄内へ往つても取引が出来ると云ふる何れも推して切換の参りませぬが、御領分内だけのことでございませぬか  
 ら誠恐入りましたが……」役人「ア、宜いとも宜いとも……ア、七兵衛、役所はあいか  
 ら貴様の懐中より三百兩……」七「ハ、承知いたしました」と言ふ、ソリヤアモ備前屋  
 と云ふとナリくして居ります、七兵衛の金子をザン／＼と握つて七「三百兩、サア檢  
 めて備前屋さん御受取りを……」平「左様から暫時拜借いたします、斑染たり汚れて居りま  
 すが、それまでの代物と思召して是れを御受取り置を願ひます」役人「イヤサ、それ置い  
 て往くより及ばぬ」平「アはございませうが私も氣が済みませぬことゆゑ、ドウぞ御切換の  
 趣意でございませうから此の代物を……」

平六の體で提げ來つた小風呂敷の結び目を解いて又二重三重も包んだものを取ると、生々  
 しさ男の首級、鬚を掴んで左の手まで切口を押へ平「御役人様イヤサ奥田七兵衛様、三百  
 兩の紙幣を受取つて下さい、是れは實の最前來た若松屋の手代四郎兵衛の首級、紙幣切の  
 代物は首級の切が來たんだ、三年限りと云ふのを又三年と觸直し、町人百姓の難儀して  
 他國へ走る者あり、首を釣つて死ぬるあり、道路も彷徨い餓死する者もある、町人百姓を  
 犬猫同様扱ひ、我々の斯う藝妓を上げて旨い物を食ふと見せ付ける爲め此の平六を  
 喚寄せさせた御役人衆、サア是れから先き受取つて下さい」と白土奥右衛門と云ふ紙  
 幣座役人の前へボンと投げ附けると首級の七漢の大皿の中へ落ちる「無禮者め」と白土  
 奥右衛門が切附けるゆゑ「何を小癩者」と馬庭念流樋口の高弟、是れまで多くの人を殺し、  
 奥州口まで男を賣り、故郷へ歸つた樊噲の平六、乾兒の三百人からある、右の腕前ゆゑ一  
 刀スラリと引抜いて白土奥右衛門の劍を打落し、一足踏込んで片手上段又斬下したること  
 ゆゑ眞ツ向より上層へ掛けて割付け血煙立つて倒れる途端も、同役河又善太夫が「同役の  
 復讐」と斬込ひのを平六は前も在る大皿を片手取つて擲け附ける、狙ひ違がはず河又の

肩間肩上の眞ッ直中へ皿が當ッて微塵も碎け善太夫は後へムドゥと倒れ起上らうとするところをザクッ肩口から胸板へ掛けて斬下したから是れまた血煙立ッて倒れる「ソレ役所へ來ッて狼藉を働く不届奴、打取れと八九名の下役が左右より斬込み來るのを「何を小癪さ」と右も拂ひ、左も拂ひ、前も飛び、後へも退き、進退宛あから飛鳥の如くトウ〜下役を斬盡した、

一時は驚いて腰を抜かした奥田七兵衛、漸々のことよて腰を擦り擦り駆出したが足が遠廻んで心も任せず、生命が助かりたい一心も奥の方へ逃げて往くのを「平」ナニ、逃がしてあるべきか、事の企畫みは汝から出たこと、己れの娘をハ領主の妾も上げ、役人と心を協せ是れが爲め金銀を儲け、尻の光りでも金子を拵へた盛 大盡、覺悟しろヨ」と呼ばる、七兵衛も於ては奥の方へ飛出して案内知ッたる己れが家、裏の雨戸を蹴破ッて飛出さうとするので、向ふもスラリと列んだ百人からの長脇差、是りや皆さ備前屋の乾兒でござります、今日しも該所の明神の祭禮があッて例の祭禮博奕、大勢集ッて勝負を争ッて居るところへ今親分が奥田の役所へ斬込んだと云ふ報知も「ソレ親分の大事……」と日頭實の子のやうも目を

掛けられて居る乾兒達でござりますから、親分のこと、云ふと生命を捨てるのは何の物かはそれゆゑ此のところへ大勢の乾兒が赤手拭もて後鉢巻、世も赤手拭の一揆と謂ふのは此のどきの御話でござります、七兵衛の又もや驚き逃げんとするところを乾兒の中も心利いたる奴が飛鳥の如く飛込み來り七兵衛を捕へてクルクル巻き金藏の戸前の前の銀杏の樹へ逆さま縛り付け切削ぎ竹を持って來り遂も寄ッて集ッて紙幣座元締役奥田七兵衛を逆磔刑も掛ける、其の苦痛大方あらず、不義の天罰斯の如し、家内の者をも彼處も一人此處も一人猫兒を殺すやうもスパ〜斬殺し、金藏の戸前口を破り永年詰めたるどころの横領の金子、其の金函の蓋を拂ひ、之を引ッ掴んで大勢の百姓も分ち與へ、固より備前屋の親分乾兒の死ぬ覺悟ゆゑ、人間死ぬと覺悟をすれば金銀の礫瓦も等しく八方へ撒き散らしました、

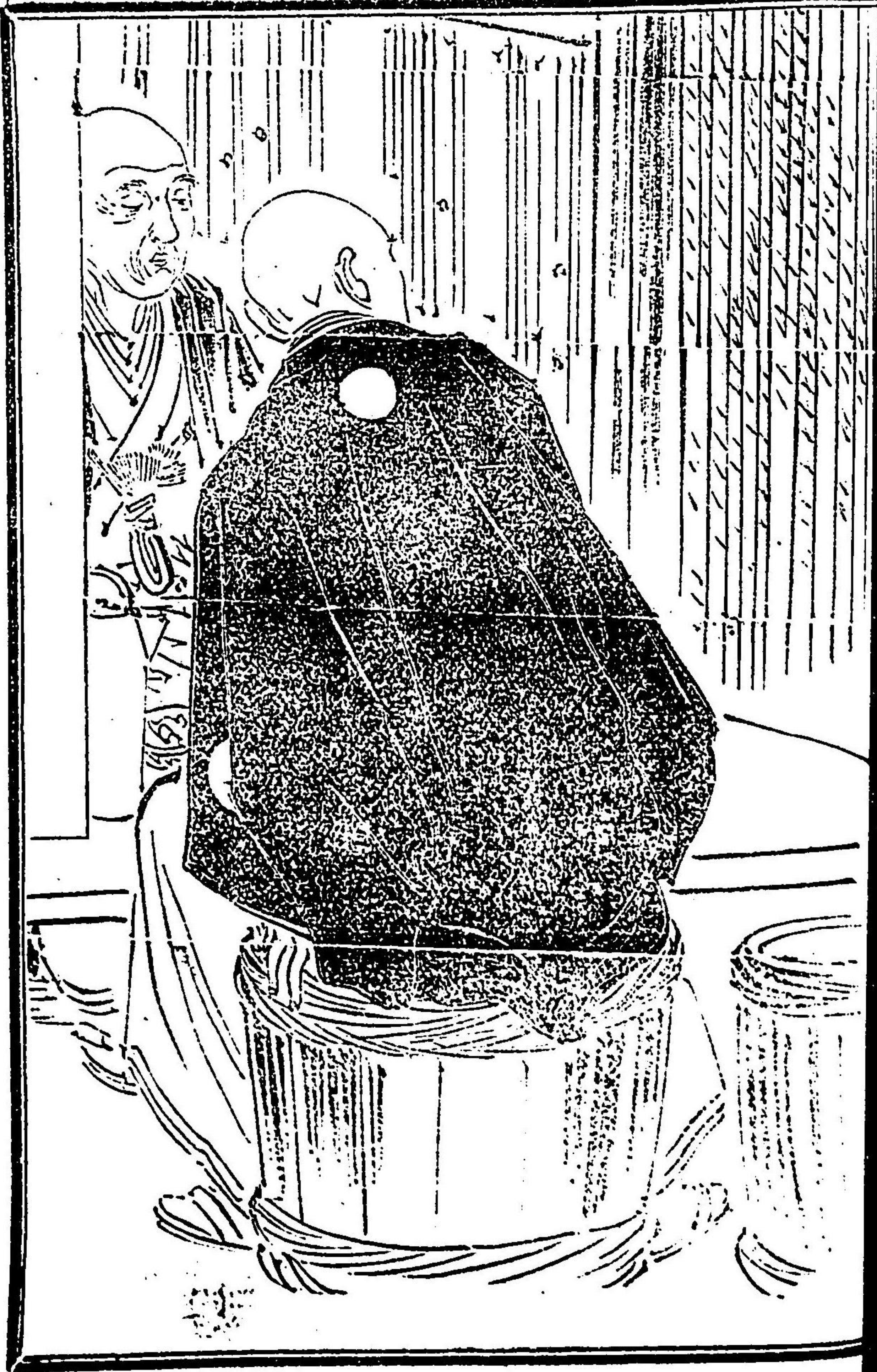


百おの妃姐

後百七十六

却説網元備前屋平六の濱方の漁夫及び其の身の乾兒達大勢を引連れまして一同赤手拭の合印、之れを世に赤手拭の一揆と云ふ、看るく内も我もくと馳せ加はりましたるゆゑ寺内時と云ふ峠を越ゆるときより彼れ是れ千人足らずの人数、一齊に聲を揚げて御城下を指して乗込んで参る、城下の者の戦が始まりしやうも心得、八方へ逃げ散る、實に其の騒動の言はん方々ございませぬ、

茲に久保田の御城下本町に三上太郎左衛門と云ふ豪商がございます、是れ此の秋田城之助殿が秋田城と築き出す時分からの草創の豪商、三上の三夫婦と申して大旦那が七十三歳、若旦那が四十一歳、其の次の若旦那が二十一歳、是れを三上の三夫婦と云ふ、又人足れを指して高砂大盡とも佛大盡とも申します、今年七十歳餘り及ぶ大旦那の太郎左衛門殿は誠な情け深い人で生涯三度の施行で何千兩と云ふ大金を抛つて貧窮人を助けただけの人、けれども是れも矢張り札座の元締、今金藏の戸前口まで切殺されし奥田七兵衛も札座元締、三上も同じ札座の元締ではございませすが、茲に懸隔がございまして、奥田の方は役人へ手入れ及び己れから好んで致したる札座元締役、三上の方は三度言付ったが御辭退し御



辭退をしてトウく披所さく御請をした札座元締役、併し今奥田の家を打壞し、奥田の家内を壓殺しよして其の餘勢で三上をも取詰めるものことゆゑ、三上の家内は悉皆立退きました、其の中より一人七十餘も成る大旦那がドウもつても立退かき、木「お前方は怪我をしておはさらぬから早く身を隠匿すが宜い、私はモウ今年七十餘歳にして面白いことも可笑しいことも仕盡して來た身体だから此處は私が待つて居てドウ云ふ趣意だかそれを聞いた上で殺される、それでお前達は早く立退け」と何分強情を言つて七十餘の老人が立退きませぬ、どう斯うする内は聲が聞ゆるゆゑ已むを得ず若夫婦達は先づ其處を立退きましたのでござります、

後百七十八

大さき家もタツた一人、太郎左衛門が戸前口を開き庭口も大釜を二個据付け、薪を山の如く積上げ、戸板の上には澤庵を出し、米俵を杉形も積上げ、味噌樽の鏡を拂ひ、酒樽の鏡を拂ひ、袴を着けてチャンと打壞はしよ來るのを待つて居ります、サア濱方の漁夫共、附けましては備前屋身内の若者共「三上の家と打壞はせ」と前後の辨へもさくドツと喚いて打掛らんとする光景あり、此のとき備前屋平六は大音を揚げ「待つて、

己れが下知をしぬい内もア三上の家へ手を着ることはさらぬいと、手を着やがりやア己が捻り殺して仕舞ふ」と呼ひつた、サア鶴のト聲で一同ハツと言てスーンと左右に開き、誰ん得物くを大地に差置き、親分平六の一言を待つて居る、其の内は備前屋平六の鉢巻を取り、襷を取り、尻端折りを下して靜か三上の家へ参り、大旦那も會ひまして「平六、て旦那様、濱方の一揆豫て沙汰及びでもございませう、奥田七兵衛殿の非道さる紙幣の切換、其の不都合より致して起りました一揆でござります」と聞くより早く太郎左衛門の「イヤ、奥田と私の同役でござるから嘘な紙幣のことに付いて皆さんが怨んでござらっしゃらう、それゆゑ家内は悉皆逃がし此の通り戸前口を拂つて酒肴を申したいけれども何も無いから其處に据付けてあるものを充分に沙汰せざる、サア私のモウ思ひ死すことゆゑから斬ることも突くことも勝手よござら」と云ふ覺悟の様子を見て樊哈の平六が「是れハマツリ旦那様、旦那と奥田との天地の相違、奥田七兵衛の怪しい女を連れて來て其女を殿様の妾と差出し、尻の光りでアノ位の金持も成り札座の元締役で、苗字帯刀沙汰、メカ元と彼奴の何處の馬の骨だか知れぬ奴でござります、今を去ること三十二年前は濱方へ來ッ

後百七十九

て足を止めそれから成立つた身代、畢竟娘の方でアレまであつたゆゑ人呼んで是れを  
 登大盡と云ふ、貴方の方の施行を度々浮出しかされたので佛大盡と人が言ふ、同じホの字  
 だが佛と登との大層違ひます、ドウして貴方の浮宅の座敷一本でも越いて往くやわいござ  
 いませぬ、併し斯の如くは浮酒や浮飯の用意を致してある上からいそれだけの頂戴いたし  
 ます、更且旦那心配あるさ」と流石名代の候客中六「サア来ッて浮酒と浮飯の浮馳走  
 みされ」と云ふや半ハ叩いて一同喜ぶこと大方あらず大釜で飯を炊き、生味噌を呑め香物  
 を嚙り柄杓で以て酒をガブ／＼呑みます、其の賑ひ一ト方あらず一同「イヤ、ドウも流石は  
 大盡の酒で、遠方で呑む酒とは大違ひ、味噌も何だか呑め心が宜い、澤庵も大根の性が宜  
 いので漬けて旨い」とマルとポリ／＼ポリ／＼頬張ッて酒を呑み、或は飯を食べるのだ  
 が硬くては間ふ合はあから御粥が宜からうと云ふ、ドウも一揆と云ふと御粥が附き物の  
 やうでございしますが、さう云ふ譯ではございませぬ、テ其の徳太平山と云ふ山御要密の  
 山へ押上りました、  
 此處は三吉権現と云ふものがあります、此の三吉権現の由来はあれを長ければ之れを省

く、今以ちまして有命で居るさぞと云ふことを土地の者共が申して居ります、テ子供達が  
 夜泣きをしたり、且つは長泣き等をする、ソラ三吉権現様が御出でさるぞと云ふ  
 と泣く兒も黙る、生きながらは致して鬼もあつたと云ふ、是れは名代の三吉権現、其の  
 御華表側まで人数を繰揚げて夜に至りまば久保田の城へ取詰めると、篝火を諸所へ焚上げ、  
 又兵糧を炊き立てる、其の米は皆んさ三上から致して貰ひ來ッて充分な手當を致す天草一  
 揆の二の振舞、其の勢ひ宏大あり、  
 講談變ッて御城中では第一番は濫江内膳殿、第二番に至ッて戸村忠太夫殿、その他御一門  
 の家老佐竹大和、佐竹淡路、佐竹六郎、佐竹石見等の面々御本丸に集ッテ此の度の一儀容  
 易さらざること、紙幣を御發行し相成ることは我々共一同上へ御諫言し及びし江戸表に  
 罷居る悪人共の惡憑を依り何でも紙幣を御發行遊ばすと云ふ主命、已むを得ず、氣遣ひ居  
 りしが案は違はず此の騒動、夜に至れば愚昧の百姓共當城へ攻め掛る、其のときより浮家  
 の滅亡眼前あり、殊々美濃國關ヶ原浮戦前と徳川家へ浮敵對の色を現わし常陸より致して  
 當國へ國換を仰付けられたは當家の甚だ徳川將軍家へは不首尾あるどころ先年公儀より

致して姫君様を七代目修理本夫様へ下し置かれて、北の伊住様と申上げ、既、伊子様まで伊出来遊ばせられて大さ公儀の不首尾を取直したけれども、徳川家との譜代の諸侯よりあらざれば實、薄氷を踏むの思ひ、容易からざる一大事……」と云ふとさ、澁江内膳が席を進み「扱て伊一同へ内膳申入れる、手前から申して、恐入れを當家家老の上席、總て伊國の政治の拙者が取計ふべきところ近頃の上より致して萬事伊指揮、それを争ふほどの臣に力なく、是非なく今日今日を送りしが今とあつて、最早澁江が生命を抛つて伊家を守護するより外、致方之れなく、一時一揆を取鎮め、彼等が願意を聞取ると申して江戸表へ罷越し殿様は伊諺言及び伊用おかければ是非及ばず殿様を伊隠居をさせ參らせ、伊別家より致して伊相續を相立て澁江内膳は是れが爲め切腹致して申開きを致す決心でござるゆゑ、何卒いたして此の度の儀、内膳の一身は伊任せ下さるか」「一同」如何も澁江氏の仰せの通り大勢罷出でたればとて事の纏まるにも至らず、然らば澁江氏、國勝手年寄連名の書を差出し申すゆゑ伊一身は伊引受けおされて伊鎮靜のはを願ひたうござる」「内」如何も承知いたしたり」とそこで澁江の國家老より致して連名の書附を受取り、其の身の

伊家の爲め生命を擲つ、覺悟ゆる充分な支度を成され、馬上提燈は燈火を點け、太平山を指して唯一人伊乗出し相成る、御城の方より致して一人の武士太平山を指して一文字は乗附け来る、百姓共は於ては此の武家と對して手向ひも致さんとするほどの光景ゆる平六深く制し、其の身は遙か遠出し、て今向かつしやる御方は如何なる御仁か見届けん近づく儘見れば程々緋の錦糸を以て鶴一羽伏縫おしたる切羽織、定紋打つたる陣笠を戴き五三の桐の馬上提燈を連錢、蘆毛の馬は跨りトックトックと乗附け來つたるは佐竹三家老の上席御城代澁江内膳殿此の御方は至つて情け深く上に忠あり下仁あり、御國の人民舉つて神の如く尊敬いたす人間の徳はこゝでござります、平六始め一同大地へハッ、平伏しまして隠んで澁江の言葉待つ、内膳殿は御馬を止めて「アイヤ濱方より致して大勢の人数を集め今承れば奥田七兵衛を害して其の家を微塵も碎き、徒黨を組んで御城へ取詰め候段重々の不屈早速人数を繰出して汝等の首を刎べきされ紙幣のことも付いての願之れあるものことゆゑ、内膳此處まで承はり汝等の願意、宜しきやうに取計ひ遣はすであらうゆゑた様心得るやう